
何の因果か気まぐれか

gauss

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何の因果か気まぐれか

【Nコード】

N4173N

【作者名】

gauss

【あらすじ】

何の因果かりりカルなのはの世界？に転生してしまった主人公。でも原作知識を持っているのは彼じゃなくて……………あれ？りりカルなのはの世界になんでハンターが！？色々ごちゃ混ぜなこの世界でいったい何が起きるのか！！

1話（前書き）

初めましてg a u s sといいます。

今までROM専だったのですが、自分でも書いてみたいと思い投稿してみることになりました。

ハッキリ言って読みにくかったりすると思いますがそこは作者の技術不足ということで長い目で見てくださいと幸いです。

ちなみにこの小説はオリキャラがいっぱい出ます。

オリジナル能力もいっぱい出ます。

それでも大丈夫という方のみ先にお進みください。

1話

そこは地獄だった。

紅蓮の炎がすごい勢いで広がりながら、周囲のすべてを飲み込んでいく。

物、人、動物の区別などなくありとあらゆるモノを炎は飲み込み灰へと変えていく……

悲鳴が聞こえる

助けを呼ぶ声が聞こえる

生きたいと、死にたくないと喚く声が聞こえる

誰もが炎から逃れようとする中でオレはその場に留まっていた。
いや、動くことができないという言い方のほうが正確だ。

爆発と炎によって崩れてきた瓦礫に足を挟まれ動くことはできず、オレは死を待つことしかできなかった。

平和な一日のハズだった。

仕事が一段落して久しぶりの休暇を満喫するつもりで親しい友人たちとデパートに買い物に来ていただけだった。

『平穩の価値は失って初めて気づくもの』

どこかの誰かが言っていた言葉だがそれが本当だと気づいたときには遅かった。

爆破テロに巻き込まれ俺たちの平穏は一瞬にして地獄へと変わった。

まずエレベーターや配電室が爆破され、その火が燃え広がりあたりを灼熱の地獄へと変貌させた。

ちょうど真ん中の階にいたオレ達は非常階段から避難しようと急ぎその途中、二度目の爆発によって崩れてきた瓦礫に巻き込まれた。一瞬で潰れたものも入れば、中途半端に潰れて苦し者、オレのようには死ぬことはなくとも動けないものなどどちらにしてもオレ達が炎に巻き込まれる前に救助が来ることはないだろう。

迫り来る炎をどこか遠いところから見ているような感覚でぼーっと眺めていた。

風がふく度に炎は勢いと温度を増して迫ってくる。

そしてとうとうオレは焼かれ、死んだ……………

「…………夢、か…………」

自らが焼かれ死ぬ痛みで目が覚めると、視界に入ってきたのは見慣れた天井にオレの部屋だった。

寝汗でビツシヨリになった寝間着や下着を取り替えるついでにシヤワーを浴びるために風呂場に向かう。

「おはよう、休みの日だったのに早いじゃないか入学式は明日だぞ」

シヤワーを浴び終えリビングに飲み物を取りに行くと親父の起きる日を間違えたんじゃないかという言葉はスルーして飲み物を取り出した。

「父さんにもコーヒーを入れてくれないか？」

「ん、ブラックでいいの？」

「うん、ついでに朝ごはん作ってくれると父さんうれしいな」

どうやらわが母は未だ夢の中らしい

そういや昨日盛ってたな……

冷蔵庫の中身を確認しスクランブルエッグを作ることを決めベークンや卵を取り出しフライパンを温めながらコーヒーを煎れる。

「しかし、もうお前も小学生か……時がたつのは早いもんだ」

オレが朝食を作るのを見ながら感慨深そうに話す親父の言葉にそうだねーとどうでもいいように返事を返しながら焦がさないように注意する。

——もう六年か……………

ニコニコしながら明日の入学式に備えて新調した一眼レフカメラ

を手入れしている親父には悪いと思うがオレは小学校入学に対して特に楽しみだとかいう感情は持ち合わせていない。

むしろ自由に考えたり実験したりする時間が削られるという意味ではめんどくさいという感情ぐらいしか無い。

確かに始めて小学校に入学するという場合ならばまだ見ぬ世界に対して夢と希望が満ち溢れることだろう、それは大人でも子どもでも変わらないが子どもは特にそういった感情が強いと思う。

しかし、オレの場合は二度目の上に中身はすでに社会人になった大人なのだ。

そう、爆発テロに巻き込まれて死んだオレは『ホンダ ヒトシ』として生まれ変わった。

輪廻転生——オレは別に宗教を信じるつもりはないがまあこうやって転生しちまった以上受け入れるしか無い。

三十年近く生きて大学部では工学部就職先も電子機器開発など明らかに理論派の路線を進んでいたオレだが子どもの頃から漫画やアニメ、ラノベの世界に行ってみたみたい特殊能力を使いたいと思い続けた夢見る少年の心を持ったもうすぐ三十になるはずだった青年だったのだ。

生まれ変わったときは驚きもしたが死んだオレが生まれ変わることでできたのだからもしかしたら魔法やオーラなどを使うこともできるのではないかと頑張りまくってきた。

魔法は呪文と修行方法がわからなかったから使うことができなかったけど、HUNTER×HUNTERの念能力なら修行方法は知っていたので生まれた頃からずっと頑張ってきた。

ずっと修行ばかりしてきたわけではないうえに独学ってこともあるからか6年間頑張ってきてやっと精孔が開いてくれたのか最近色々な人の体から流れ出る微弱なオーラを見ることができるようになった。

しかし、だからどうだといわれると全く意味はない。

実際に普通に生きるためにそんな力が必要かといわれれば答えは

NO。

必要ないのだから使うときがくるわけがない、オレがこんなことをやっている理由はただ前世とは違ったことをやりたにできなかったことをやってみたいという理由だけだ。

まああれだ、せつかく生まれ変わったんだから楽しむだけだ。

二度目の小学校生活も将来が期待できそうな美少女をキープしておくかを考えれば楽しくなってくる W W W

ということでオレは明日から私立聖祥大附属小学校に入学することになる。

☆ ☆

前世での小学校の入学式のことなんてはつきりいつて覚えていな

い。

子どもがいればこんな感じだったんだなと思うことができたかもしれないが残念ながら彼女もいない寂しい人生を送っていたのでそんなこともなかった。

……しかし中身が大人でもなんで校長とか役員のお話つてのは眠くなるんだろう……

周りを見渡してみると眠ってしまったている子がチラホラと目に入る。

実に退屈だ、行ってることはほとんど一緒なんだからまとめちゃえばいいのに。

それにしても、この年頃の子達は初々しいものだ。

なんていうのかな純粹という心が綺麗というか、なんだが自分が穢れてるみたいで心が痛むよ……

プログラムからするとあと30分位だし精孔を開くために「点」と「鍊」をやつてよ、早く鍊を覚えて自分の系統を知りたいし。

☆

さて入学式が終われば次は教室に戻り自己紹介となるのが一般的だ。

当然、聖祥も例に漏れることはなくオレ達は教室に戻され自分の名前が書かれた机に座っていた。

当たり前だが最初の席はアイウエオ順か誕生日から振り分けた出席番号順というのが殆どでオレ達はアイウエオ順になっていた。

ちなみにこのクラスの人数は40人、当学校の今学年はだいたい一クラス40〜45人となっている。

小学校最初の自己紹介などはだいたい教師がどんなことを言うのかを指定するのがほとんどだと思う。

少なくとも前世ではそうだったしここでもそのようだ。

実際に担任の教師に指定された自己紹介の内容は『自分の名前』

『好きなもの・こと』『嫌いなもの・こと』といったオーソドックスなものだった。

まあその他に言いたいことがあったら言っていっていいと言っただけが入学したばかりで緊張している子供達にそれを期待するのは可哀想というものだ。

オレもこんな感じだったのかな……もう二度と確認することが叶わない事を考えながらクラスメイトの自己紹介を聞き流していた。

出席番号順の自己紹介と行っても男女で出席番号順が分けられているわけでもないで「ホンダ」のオレの順番は必然的にあの方になるのしばらく瞑想をしようかと持っていたら聞き覚えのある名前が耳に入った。

「アリサ・バニングスです、好きなものは……………」

……………アリサ・バニングス

はて？ どっかで聞いたことがあったような……………

それにこの声って……………くぎゅ？

えっとたしか前世でえーっと、シャナはシャナなんだから違うしガッシュベルはティオのはずだし、ぴたテンもなんかちがったよ
うな……………

ロザバンも違うし、たしか前世で誰かがおすすめアニメとか言っ

てたのにいたんだよな………たしかバーニングなんか？

わからん、だがわかっていることがひとつだけある。

それは………オレが彼女に心を奪われたということだ！！

くぎゅー……サイコー……サイコー……！！

好きなものと嫌いなものはしっかりと記憶したぜ！

よし、当面の目標は彼女を観察しながらお友達にあわよくば幼馴染という関係にもって行くことにしよう。

ん？ オレはどんな自己紹介をしたのかつて？

普通に名前は『本多 仁』好きなものは『平穩』嫌いなものは『退屈』と答えたよ。

平穩と退屈ってセットな気もするから矛盾してる気もするけど所詮は小学生が言うことだから先生も何も突っ込まないのはありがたいことだ。

それで自己紹介が終わってくれればよかったんだがどうやら神様とやらはオレの好きな平穩が嫌いらしい。

自己紹介が終わったあとこれからの授業についての説明とかを保護者と一緒に聞くことになっていたのだが基本的なことはどの学校も変わらないだからこの学校での立ち入り禁止区域などを聞くだけにしてオレのお仲間（転生者）がいないかどうかを面白半分でオーラを見て調べたらこのクラスの中で一人だけ纏を使っていた人間が居た。

名前は確か……『ワタナベ渡辺 トシキ稔誉輝』あの字でどうしてトシキと読む

のかはとても疑問だが、見た目は一般的な日本人の黒髪黒目どっちかって言えばイケメン、今はそんなことはどうでもいいけど。

HUNTER×HUNTERの原作ではビスケが子供の念能力者は実はそうとう居るって言ってたから別に纏をしていることはそんなに問題じゃない、その纏いやあればすでに円か？

それがネフェルピトの円のような形（ぶっちゃけ触手）をして女子に接触しているのが一番の問題なんだ。

それも綺麗に男子を避けて女子のみをとらえている、これが先生とか保護者も含めた“女性”に接触してるんならただの女好きで片付けることもできたのだけど接触しているのが“女子”つまりは小さな女の子のみという時点で口の字の人なんだろう。

おそらく、いやきつと転生者だ。

ぶっちゃけ関わりたくない、あんな気色悪い念に触れるなんて真っ平御免だ。

ただあの念を見たら急いで纏を習得して最低でも基本の四大行を納めないと非常に面倒だ。

実際に話したことはないからわからないけど良くネットに上がってる転生ものだと力を以ているやつって基本的に原作とか事件とかに積極的に介入してくれちゃうからとてもメンドクサイ、自分が巻き込まれるとは決まっていはいないがせめて発が形になるまでは関わらない方がいいだろう。

それまでは彼には関わらずぐゅーの攻略を………と言っても現実でそんなことができるわけないし目標は幼馴染だなやっぱり。

この一週間後、オレは纏を習得し新たな分岐点と出会うことになる………

・

かもしれない

1話（後書き）

えゝ最後まで読んでくださった方々に。

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます。

今まで様々な二次創作を読みながら自分で書いてみようと考えては辞めてを繰り返しやっと初めて投稿まで至りました。

一応11話までストックが有るのですがこの g a u s s 亀のように執筆が遅いつていうか就職活動が始まる現実逃避だったりするので12話目ができたら2話目を投稿しようと考えていますので更新は亀のようにゆっくりとなると思いますがどうぞ気長に待ってやってください。

ちなみにこの小説に出てくるオリキャラの名前は作者の友人たちから拝借しており彼らの能力も本人に考えさせたものです w w w 系統に関しては W O N D E R × H U N T E R さんの系統&性格診断を使わせていただいています。

2話（前書き）

お久しぶりですg a u s sです。

前回の予告通り12話までストックできたので2話目を投稿しよう
と思います。

2話

さて、前回予告した通り一週間が経ったわけだが、オレは特に分岐点と言える出来事にはであっていない。

纏に関しては急がないと命に関わるかもしれないということが影響したのかあの後3日ほどで取得することができた。

気配断ちである絶に関しては成功しているのかを調べる手段がないためクラスメートを驚かすという名目で全クラスメート（渡辺くん含む）の背後を気づかれずに取れるというのが最低条件に頑張っているが渡辺くんの背後だけはとることが出来ていない。

それ以外に何もなかったのかといえばあったとしか言うことはできない。

一週間もすれば基本的に遊ぶ相手話す相手というのは決まってくる。

共通の趣味があったり、家が近所だったりいろいろな理由が存在するがオレのクラスではオレを含めた3人がどのグループにも入らずに孤立している。

原因んは実に単純だ、子供ゆえの素直さ。

自分とは違うものを排除しようとする排他的思考。

当初オレは自分の感覚でそんなのを気にするのはお話の世界だけだろうと軽く考えていたがよくよく考えれば自分の前世は純粋な日本人でその他大勢と同じ多数派だっただけと言うことを忘れていたのだろう。

今のオレは純粋な日本人ではない。

生まれも育ちも日本だが、両親はともにアイスランド人と日本人のハーフだ。

そして幸か不幸かオレは隔世遺伝で茶に近いブロンドの髪に日本人にしては少しだが白い肌、これだけでも子供社会からしたら廃絶の対象になる可能性があるのだ極めつけにオレは瞳の色がグリーンだった。

と言っても人当たりがよくムードメーカー的な存在だったのならば孤立すると言うことにはならなかったはずだ。

前世でも保育園の時もオレはそうして乗り切ってきたが、今回は渡辺くんを警戒するあまり渡辺くんとながりが深いグループやコミュニティから距離をとってしまったのだ。

幸い、いじめの対象などにはなっていない無いがこの状態がずっと続いてしまえばその可能性だって否定できない。

と言ってもおれは男だ、出だして失敗してもそのうち拳で語り合えば分かり合えるやつも多少は出てくる少なくとも前世ではそんなことが多々あった。

オレ以外で孤立しているのは月村すずかさんとアリサ・バニングスさんの二人だ。

月村さんに関して言えば自分から距離をとっているという感じがする。

いつも本を読んでいて話しかけても会話が続かないと言うのが周りの子供たちの本音だろう。

実際に話しかけられれば返事はするし話もする、ただ小学一年生にしては精神年齢が高いのか読んでる本の内容が難しすぎて周りの子が話をあわせたりできないと言うのが孤立していった原因だろう。

それだけなら成長していけば仲良くなることが出来る人もできるだろうから特に心配することはないし、孤立と言うよりはオレのよ

うに特定グループとの関わりを持たない位置にいる傍観者のような
スタンスなのだろう。

問題なのはバニングスさんの方だ。

最初こそオレもクギミィボイスに惹かれてしまったが彼女に誰も
近寄っていかないことに気がついてからは、冷静になって観察した。
何度か見ていてわかったことだが彼女は精神年齢が高い、小学一
年生を相手にするには間違いなく高いと言える（といっても俺には
遠く及ばないが）。

同じ保育園出身の子に話を聞いてみれば『何を言ってるのか分か
らない』『面白くない』という意見が出てくる始末。

別に珍しいことではない。

なにか一つ特別なものを持っている、それだけで十分なんだ、子
供のいじめなんて。

自分たちとは違う綺麗で流れるような金髪、自分たちとは違う白
い肌それに加えバニングスさんの頭の回転が早いのも災いした。

基本的に気が強いと言うことを除けば頭脳も、容姿もトップクラ
スに加え運動もソコソコ子供の嫉妬の対象になるには十分すぎるモ
ノを抱えている。

その上バニングスさんは負けん気の強さが出たのか4日目の放課
後に他の女子たちのリーダー的存在の子とケンカしたらしく（喧嘩
と言っても可愛らしいものだが）クラスの女子から距離をおかれて
いる。

そんなバニングスさんに小学生ができる嫌がらせなんてたかが知
れている。

簡単に言えば女子達がバニングスさんを見殺し始めたのだ。

ケンカした翌日はまだバニングスさんも気丈に振舞っていたが昨
日は女子に触発された男子も見殺し始め、だんだん落ち込んできて

いることがわかった。

どんなに気が強くても、どんなに男勝りだろうが彼女は女の子だ。

『女の子が一人ぼっちで生きていくには、子供社会って言うのは厳しい』

前世でオレが好きだったゲームでとあるキャラが言っていたセリフだ。

その時はそんなことは無いだろうと考えていたけど今ならわかる。オレでさえ、距離をとられるだけでも寂しさを感じるのだ無視され続けているバニングスさんはもっと寂しい気持ちを持っていたても何も不思議ではない。

少人数の男女のグループは高学年になっていくとからかわれやすいからと考えて積極的にバニングスさんに関わろうとしなかったオレをぶん殴ってやりたい。

周りの何を言ってきたてもいいじゃないか、からかわたって気にしなればいい。

なにより泣きそうな顔を必死に隠し、気丈に振舞っている女の子が居るのだ、彼女を笑顔にできるかもしれないオレはその方法を知っているんだ。

それを実行しないで何が男か。

オレは昼休みにバニングスさんを昼食に誘うことを決意した。

昼休みになりバニングスさんを誘おうと思ったら他の子達に昼食に誘われている間にバニングスさんを見失ってしまった。

やむおえず昼食を食べ終わってからバニングスさんを探して校内をうろついているが一向に見つからない。

あれだけ目立つ容姿をしていてここまで見つからないってものある意味すごいな。

すでに昼休みの残り時間も20分くらいしかない、もともと弁当に誘ってそのまま流れで友達について考えていたから見つけたとしても何を話すかは全く決めていなかったがそんなことは見つけて話してみてもから考えればいい。

あーだこーだと考えるのはモノ作ってる時だけで十分だ。

本当にどこにいるんだろう、あれだけ無視されてるんだから人が大勢いるところは避けると思ったんだが、校舎裏にも屋上にも特別教室にもいなかった。

あと探していないのは中庭だけだけどあそこは昼休みは大盛の生徒が食事をしているので可能性はかなり低いと踏んでいたんだけどな

結論から言えば彼女はいた。

正確には彼女“たち”はだが。

食事を終えた生徒たちが教室に戻ったからなのか中庭にはバニングスさんと月村さんがいた。

これで二人が仲良くおしゃべりしていれば微笑ましいなとか考

えながら安心できたんだけどひっくり返したところでそんな雰囲気には見えない。

バニングスさんが月村さんのものと思われるヘアバンドを奪っていた。

——うーん、イジメられたから他をいじめるって思考はわからなくもないんだけどね

月村さんはオレの想像以上に気が弱いのか、『返して』の一言も言えない状態のようだ。

もちろんそんな状況を見てほっとけるワケがない。

オレは迷うことなく中庭に全力疾走した。

上履きのまま中庭には言っではいけないという規則があった気もするがもとよりそんな規則を守るオレではない。

迷うことなく全力で規則を無視し、二人のすぐ近くにまで来て先程の自分の予想は大当たりだったと理解した。

バニングスさんは間違いなく月村さんをからかってバカにしている。

オレは月村さんのヘアバンド（よく見るとカチューシャのようだ）を持っている方のバニングスさんの手首をつかんでカチューシャを素早く奪い取った。

常に動かしていると言っても所詮は小学生の行動だ、ほとんど規則的に動かしていたから手首をつかむのもカチューシャを奪い取るのもそれほど難しくなかった。

女の子特有の細く柔らかなバニングスさんの腕を少し名残惜しいと思いながらも離すとオレは二人の間に入って月村さんにカチューシャを渡した。

「はい、月村さん。大丈夫？」

何か言いたい様子だったが恥ずかしかったのか怖かったのか、コクンと頷くだけだったけどどこか怪我している様子もないし大丈夫だろう。

それより問題なのは背後にいるバニングスさんだ。

非常に嫌な視線だ、まるで親の敵を見るかのような視線はやめていただきたい。

さつきから「なにをするの!」とか「何様よ!」とかそういう台詞が鋭い声となって響いてくる。

まあ怒って当然だわな、だからと言ってそれは間違った怒り、ただの逆恨みでしか無い。

「なにするのはこっちの台詞だろ? なんで月村さんのカチューシヤを取ったりしたんだ?」

「そのカチューシヤを見せてって言ったら嫌だって言ったからよ!」

清々しいまでのジャイアニズムだ。

そういえばこの世界にはドラえもんはあるのかな?

今度調べてみよ……

まあ今はそんなことはどうでもいい。

子どもでも大人でも譲れないものと言うのは存在する。

そこら辺の露天で売っているようなアクセサリーでも愛した人の形見なら誰にも見せたくないと言うのは普通だと思うし、月村さんにとってはカチューシヤがそういった大切なものなのだろう、他の人にいじられたくないほど大切なものなのだ。

大人ならここで事情や背景を察したり、察せなくても諦めたりするのだが如何せん、子供というのはダメといわれると余計に欲しく

なる禁欲と言うものができない、むしろよけいに欲しくなるものなのだ。

それが他人が持っているものであればなおさら欲しくなる。

その場のみの感情だったとしてもそれを抑えることができない、特に気の強いバニングすさんならなおさらだろう。

そして、今日まで観察したバニングさんの学校での態度送り迎えにくるリムジンなどからバニングさんが良いとこのお嬢様だと言うことは簡単に想像がつくし、一人っ子らしいから おそらくとても大切にされ、甘やかされて欲しいものが手に入らないと言うことがなかったんだろう。それが他人のものであっても何が何でも欲しくなる。

これはバニングスさんのせいじゃない、そういった驕をせずに甘やかして育てた親の責任だ。

「人のものを取ったら泥棒だろ？ 月村さんが嫌だって言ったなら諦めなよ」

「カチューシャぐらいいいじゃない!!」

はい予想通りの返答。

素晴らしいぐらいのお嬢様思考だ。

これは一度ご両親と話をすべきではないだろうかという考えが浮かんだオレはおかしくは無いと思う。

「確かに、バニングスさんからしてみれば大したものじゃないかもしれない、そこら辺のお店で売っているようなものかもしれない、でもね月村さんにとってはとても大事なモノなのかもしれないんだ。それこそ誰にも渡したくないって思うほどにね。 もしもバニングスさんが大切にしてるモノをオレに無理やりとられたらどんな気

持ちになる？」

「そんなのムカつくに決まってるじゃない!!」

即答だ、なぜそこまでわかっていながらこんな行動がとれたのか非常に疑問だ。

「それをバニングスさんは月村さんにやったんだよ、月村さんがどんな気持ちだったかわからないわけがないよな？」

「……………」

バニングスさんは何も言わずに黙り込んでしまったが彼女の頭脳ならすでに自分に非があるということは理解しているはずだ。

おそらくそれを認めたくないんだろう。

子供によくありがちな人の言う事を聞いたら負けという思考が働いているのかもしれない。

「バニングスさん、自分の間違いを認めないでそれを否定するのは最低なことだ、自分が何をすればいいのかもうわかってるだろう？」

このまま月村さんとバニングスさんの仲が悪くなったらバニングスさんはさらに孤立することになる。

そうなってしまったらオシマイだ。

だからこそいわなきゃならないことはしっかり言う。

バニングスさんはオレが“最低”と言ったとき少し反応を示した、最低の人間なんかになりたくないということだろう。

もしかしたらただの怒りの感情もあり得るのだがバニングスさんは根元はいいこのハズそうだといいなゝ

じゃないとオレがボコられるフラグが立っちゃうんだよねゝ

「あの、大切なものつつちゃって、その……ごめんなさい!!」

視線を外しながらだったが最後にはすっかり目を見て頭も下げることができたんだ小学生なら上等だろう。

「うん、もういいよ。私の方こそハッキリ返してって言えなくてごめんなさい」

月村さんも微笑みながらバニングスさんを許してくれたが、月村さんは気が弱すぎではないだろうか？

別に月村さんに非は……限りなく少ないけど無いとも言えないか。

「それじゃこれで仲直りだ、もう二人は友達だな」

普通ならここで強制的に握手させるのが基本なんだろうがオレはそれにとどまる気はない。

二人の肩を掴んで引き寄せる、これぐらいすればさっきまでのことも水に流せるだろう………たぶん。

「な、なっ、な………」

バニングスさんの顔が真っ赤だ、月村さんもバニングスさんほどではないにしても十分に赤い。

うん、なんかバニングスさんがプルプル震えてる………これは選択ミスか？

「何すんのよこの変態!!」

「ぐぼおっ!!」

清々しいまでの右フックが見事にオレのみぞおちに直撃した。

いくらなんでもこれは酷いんじゃないでしょうか……………
そんなオレとバニングスさんを見て月村さんがクスクスと笑って
いた。

「何笑ってんのよ!」

「ごめんなさ〜い」

「いいぞバニングス確保しろ!!」

笑いながら逃げる月村さんを同じく笑いながら追いかけるバニングスさん。

まあうまく言ってみたみたいでよかったよかった。

二人が友達になればもう心配はいらないだろう、ひとりでなければ子供社会はなんとかやっていける。

あと何年かすれば周りも成長するしそうなれば二人だけじゃなくもっと大勢と仲良くなることができる。

さてと、先生に見つかる前に教室に戻るとしますかね。

入学して一週間で規則破ったなんて知れたら何言われるかわかったもんじゃない、そう思い踵を返したとき自分に向いているいくつかの視線に気がついた。

二人の相手をしているときは全く気がつかなかったがバレバレなのが一人、その後ろの方にもう一人、ほかはどこからかはわからないけどおそらく二人がオレに意識を向けている。

バレバレな方を見てみると特徴的な茶色のツインテールをはみ出しながら俺たちを覗き見るように柱の影から様子を伺う目。

ワザと視線をあわせてみると慌てて逃げ出してしまった。

「……………えっと誰だっけあれ?」

あの特徴的な髪型はよく渡辺くんと一緒にいる女の子だって言うことはわかっていたけど、自己紹介も渡辺くんとバニングスさん意外はかなり適当に聞き流してたからな

月村さんも孤立するまで名前うる覚えだったし……

まあ何かようがあるなら向こうから話しかけてくるだろう。そう結論づけてオレは教室に戻った。

2話（後書き）

一話に引き続きこのような駄文を読んただきありがとうございます。

この作品5話目辺りまでかなりグダグダと続きます、まあ5話目以降もそんな感じかもしれませんが。

執筆が遅いので一応10話分ストックしているのですが勢い任せで投稿しちゃうべきですかね？

それと当作品に誤字脱字を発見した場合ぜひお知らせください。

一応友人に手伝ってもらって誤字脱字のチェックはしているのですが作者毎回誤字脱字を出すんですよね。

担当役になっている友人には迷惑かけまくりですけどwww

三話目は早ければ今夜には投稿できるかもしれませんが、13話があるとは友人のチェックだけなので。

3話（前書き）

お久しぶりですgaussです。

前回今夜中に投稿できると言っておきながら投稿できずに申し訳ありません。

今回はあれです、またオリキャラ増えます……………

3話

時間は年をとるごとに短く感じるようになるがよく言うが、これは真実だと思う。

実際小学生の頃はとても長く感じていたあと一年“も”あると感じていた一年は大学生ぐらいになってしまえばあと一年“しか”ないと言った感じに変化していく。

正しい原因はよく分らないが、おそらく生活密度の差だろう。小学生の頃は学校の授業に課題をしっかりやっていれば基本的にあとは自由時間と自由な時間がとても多い。

しかし、社会人は半日近く仕事で消費し、それ以外にも仕事に必要な知識を身につけ無ければならない、大学生も同じようなことができる（暇なやつはとことん暇だが）。

そんな中で二度目の小学生をやっているオレはさらに時間が長く感じる。

授業の内容は当然知っている内容ばかりなので授業を聞いている振りをしながら『点』と『鍊』をしながら自分の知識が錆びつかないように図書館などから借りてきた参考書で勉強して授業が終われば友達と話し放課後になれば友達と遊び家に帰ったら念の修業。

これが最近のオレの一日のサイクルとなっている。

それと渡辺くんは間違いない転生者だと思う。

そう確信したのはとある授業でどんなに頭のイイ小学生でも明らかに解けない問題を説いた時だ。

もちろんそれまでも小学生としてはありえないぐらいの頭脳を發揮していたが、その授業で彼が説いた問題は微分積分。

高校で……………それも理系のコースを選択肢なければほとんど見ない問題だ、まず小学生が解けるはずがない。

体育の授業でも様々な戦術を立てて他のクラスメートを指揮して活躍したり入学してわずか一ヶ月でクラスの人気者となった、このまま行けば間違いなくリア充コースだろう。

これで喧嘩が弱ければまだ可愛気があるものだが、彼は自分のことを妬んで絡んできた上級生を簡単にボコボコにしてしまったものだから完全にクラスの男子たちを支配下においてしまった。

そんな中で男子から孤立していたオレと、女子から孤立していたバニングスさんと月村さんはあの喧嘩以降三人で居るのが普通になっ
っていた。

基本的にグループを作って授業をやる場合は俺たち三人で一組となるし、遊びに出かける時も勉強をするときも基本的に三人一緒、もちろんオレは男子たちから女子と混ざって遊んでいることをからかわれたりはしたがそんなのはガキの戯言だし気にする必要もないから完全に無視を決め込んでいた。

何度か渡辺くんがバニングスさんと月村さんに話しかけていたが話が合わないのか少し話したらすぐに二人が離れて言っているのを何度か目撃したことがある。

「なんで、渡辺と話をしないのってこと？」

「うん。渡辺くんは人当たりもいいし、クラスの人気者なのになんであんな感じであしらってるのかなって」

昼休み、食事をしながらオレは二日に疑問に思っていたことを聞いてみた。

二人は少し考えこむ動作をしながらご飯を口に運んでいく。

「確かに渡辺くんはクラスの人気者なんだけど私たちに話しかけるときってなんだか下心っていうのかな？ 何か他のことを考える気がして」

月村さんは少し困ったような表情でオレにワケを話してくれた。

まあクラスでも美少女に入る上に将来間違はなく美人になるであろう二人に唾つけときたい気持ちもわからなくはないけどな、子供って大人が考えてる以上にそういった事に気が付きやすかたりするから。

それで納得しようとしていたオレにバニングスさんがさらに付け加えるようにもうひとつの理由を話してくれた。

「それにアイツ、アンタの悪口を言ったのよ、友達を選んでほうがいい、私たちにアンタは相応しくないって。 何様のつもりよ!!」

「別に気になくていいよ、確かにオレみたいな冴えないやつは二人に相応しくないだろうから」

目立たないために基本的に平均付近の結果しか残していないオレが、容姿端麗、成績優秀、運動神経バツグンの二人と一緒に入れば相応しくないと思っても仕方ないだろう。

まあオレの予想通り彼が転生者だとしたら子供相手に実に大人げないものだが。

「それは何、つまりその冴えないやつに説教された私はそれ以下だということね？」

被害妄想である。

そんなこと言ってないし、むしろ二人を立てるように返答したというのになぜオレが責められなければならんのだ。

「いやいや、そんなことはないって。だってオレが二人と一緒にいるのは偶然喧嘩の仲裁に入ったからであって特別なことなんて何もしてないだろ」

「そんなことないよ、本多くんがいたから私とアリサちゃんはお友達になれたんだよ」

「そうよ、アンタだって私とすずかの大事な友達なんだから馬鹿にされて怒るのは当然でしょっ！」

いや、まさかそんなことを言われるとは。

前世でもこんなセリフ聞いたこと無いよ、前世は長いものには巻かれる主義だったからなのかもしれないけど。

確かに友達がオレの為に怒ってくれてるのにオレが自分を低く見てたらその好意を無駄と言ってるのと同じことになっちまうか……

「わかった、もう言わないよ。二人共ありがとな」
「分かればいいのよ」

懐かしい。

なんとなくそんな感じがした。

前世でも親友と呼べる存在はいたし、そう思ってくれてたと思う。
けどさすがに女子の友達なんて片手で数えられるくらいしかないな
かったし……

彼女たちともなれるのだろうか、親友という関係に。

☆

習い事のあるバニングスさん達と別れて帰宅の途中行き倒れに会
った。

正確には行き倒れがいた。

少し近道するために裏道に入ってしまったら何かくれと言わ
んばかりの視線を向けてくる行き倒れがいた。

「……………」

「……………さて、帰るか」

「ちよっ！！　そこ助けるフラグでしょ！！　　なんで行っちゃうの

「!!」

ええいうるさい!

美女や美少女を助けるならともかく男を助けたってオレに何のメリットも無いだろうが。

金持ちならともかく浮浪者など助ける理由はない!

「ってことでさいなら」

「待て、いや待ってください!　せめて何か食べ物」

小学生の足にしがみついて物乞するってなんて情けない行き倒れだ。

いったいいくつなんだこの行き倒れ。

「離せ!　男助けたってオレには何のメリットもないんだよ!　それに食いもんなんて持ってない」

行き倒れを振り払ってさっさと帰宅しようとしたが次の行き倒れのセリフで足が止まった。

「まて、念をハンターの必須技能を教える!　だから、何か恵んで!」

「……………」

この男は今、何と言った?

聞き間違いでなければ『念』と言っていた。

つまり、この男も念能力だということの証明だ。

だけど、念能力は『HUNTER×HUNTER』の世界での呼び方であって原作を知らなければそんな呼び方をするはずがない。

少なくともこの世界に『HUNTER×HUNTER』が存在し

ないことは確認済みだ。

つまり、この世界にオレ以外の転生者が居るという証明であり目の前で物乞しているこの男がそれである可能性がとても高い。

……確認だけでもしておくか。

「あんたHUNTER×HUNTERって知ってるか？」

「？ なにそれ？ ハンターをハントする人たちか？」

ちなみにこの世界にはハンターって職業は存在する。

と言ってもHUNTER×HUNTERのハンターみたいに冒険者とかそういったものだけではない。

新薬の開発や薬品の素材入手を専門とする薬剤師を薬品ハンター、
新たな治療法を発見開発し治療する医療ハンターなどの医療系ハンター。
メデイカル

様々な分野の科学技術を研究開発する科学ハンター、オカルト系の物事の処理を専門とするオカルトハンター等他にも沢山の種類のハンターが存在する。

もちろんHUNTER×HUNTERの世界にいた賞金首ハンターブラックリストのように犯罪者を捕らえて賞金をもらうハンターもいるがそれは掃除屋と呼ばれることの方が多い。

ハンターになれば公共施設の約95%は無料で利用出来る上に約90%の国に入国できるしハンターライセンスそのものも身分証にもパスポートにもなる上にハンターであることが証明できればビザなしでの入国も滞在も簡単にできるのでハンター資格を取ろうとするものは多い。

ハンターになるための試験には知識を利用する専門分野ごとの筆記試験か精神力と体力を測る毎年形式が変わる実技試験のどちらかを選択できるらしい。

ちなみに筆記試験の合格率は過去すべてのデータを見ても0～0.0000007%しか合格していない一千万人受けて最大7人しか

合格できないくらい難しいのだ、逆に実技試験の方は試験中に死ぬ可能性があるぶん合格者は0の年もあれば二、三十人程合格する年もあるそのためライセンスの便利さ目的の人は大半が実技の方に行くらしい。

「いや、知らないならいい。念を教えるっていったけどオレは独学で十分なんで」

「そ、それなら俺達を作ったアーティファクトとか念具とかもあげるし希望があればどんなものでも作ってみせる！ だからお願い、見捨てないで！！」
アーティファクト

「つまりあんた特殊道具ハンターなの？」

オレの質問を聞き倒れの男は肯定した。

アーティファクト
特殊道具——現代科学では解析不可能なオーパーツの一種であったり、超科学の産物だったりいろいろな言われ方をされているが実際は念能力者が様々な力を持った鉱石や生物の一部を使用したりするなどして作ったアイテムのことである。

特殊道具ハンターというのはそういったものを専門で集めたり作り出したりするハンターのことである。

通常は肉体の治癒力を強化するだけの簡単な特殊道具でも数千万〜数億近い値がはる、企業などではその手のアイテムを作れる人材はかなり優遇される。

つまり、この行き倒れを助けるだけでそれだけの利益が出てくるってことになる。

普通ならここで助けて利益を得るのが一番得することなんだろうが、助ける以前に疑問が浮かんでくる。

「なんで行き倒れてんだ？ 特殊道具を売ればいいだけじゃないか」

そう、ひとつ売れば数千万〜数億もするものなんだからそれを売

ればいいはずだ。

なのになんで行き倒れているのか、その理由として考えられるのは特殊道具を持っていないまたは作ることができないか何らかの事情で特殊道具を売ることができないという状況が考えられる。

前者ならまだいいが、後者の場合考えられるのは犯罪者とかだ。

「俺は契約者がいないと能力の発動ができないんだ」

詳しく話を聞いてみると、どうやらこの行き倒れもとい、長谷川ハセガワ裕平は数ヶ月前まではお抱えの契約者と契約をして契約者が望む特殊道具を作って生計を立てていたらしいのだが。

ちよつとした意見の違いから契約を切られ、やむなく手元に残っていた特殊道具を売りながら新しい契約者を探して旅を続けていたが契約者が見つからないままこの街に行き着き　つい先日所持金も切れて食事も取れず本日ついに行き倒れたらしい。

ちなみに契約者は念能力者でなくてもいいらしく本人の希望としては売買ルートを持っている人物が理想的ということである。

どんなものが作れるのかと聞いてみれば、戦闘用から治療用、補助用と基本的にどんなアイテムも作れるらしい。

その分契約者が必要という面倒な誓約があるらしい。

「それじゃ俺の両親をうまく説得できたら飯を食わせてやろう、もちろん念も教えてもらおうよ」

「しっかり説得してみせましょう!!」

☆

結論からいうと祐平さんはオレの両親を説得することができた。
最初に自分がハンターであることを説明した後現在契約者を探してるということとオレにハンターとしての才能があるなどと嘘と真を織り交ぜて説得をした。

その中でも最も決め手となったのは祐平さんが特殊道具ハンターで契約者を探してうということだった。

今まで宝石商か美術商をやっているとばかり思っていた親父殿は実は特殊道具を基本として商売をしているということで親父が契約者になることでほとんどの交渉は決まった。

こうして祐平さんは我が家に住み込むことになった。

じいちゃん達が死んじゃってからは部屋が余っていたからそのあたりは特に問題はなかったし、念の修行に関しても祐平さんの能力は基本的な能力として一日の時間を延ばせるということなのでオレの予定より早く習得を終えることができるかもしれない。

「それで、祐平さんの能力って結局なんなの？」

晩飯を食べ終わり風呂から上がったあと祐平さんに今後の予定などを説明すると言われて部屋に呼び出された。

「オレの念能力は『永遠の開発者達』クリエイターズっていつて俺と契約者のオー

ラを使って生み出した念空間で何千人って念能力を使える開発者がありとあらゆる特殊道具を開発してるんだ」

「……………は？ それは何千人って念獣ってことか？」

「違う違う、現実を捨てて自らの開発したいものの開発することに同意してくれた人や、何かを作りたいくてもなせなずに死んでいった人達の魂。」

つまりは死者の念を取り込んでるから絶対に俺の言うことを聞くわけじゃないし、面倒なことに彼らは念空間から出ることもできないから俺みたいに外部からオーラを供給してくれる人がいないと発動すらできないし。

念空間内部の時間は外部と基本10倍、最大で100倍近い時間差があるからオーラを際限なく持つて行っちゃうんだ。

ちなみに俺はオーラを供給してるだけだから念が使える人だったら誰でもいいんだけどね」

なんと面倒な能力だ。

いやこれは彼の能力ではないのか、あくまでその念空間というよりははや異世界……………むしろ固有結界に近いかもしれないけど、そこに存在している人達全員の念能力。

グリードアイランドの世界バージョンって所だな。

どおりで一人でチートなアイテムを作るわけだ。

死者の念は何よりも強いって言われてるのにそれを何千人って単位で取り込んでりゃ下手したら死者だって蘇らせるんじゃないだろうな……………なんだろうできそうで怖いな。

外部との時間差は外での1日が念空間の10日になるってことか。

「ちなみにその念空間内部で10年過ごしたら外では1年しかたつてないのに俺は10歳年取ると考えていいのか？」

「いや、開発者達が生きるはずだった時間をストックしてあってその時間分だけ外部から入ってきた者の年齢的成長を止めることがで

きるんだ、まあ初代達はそれは予想外だったらしいけどね」

それって何か問題があるのか？

いくら修行しても年を取らないのに体は鍛えることができるのか
単純に考えて最高だと思うんだが。

そのあたりのことを聞いてみると裕平さん個人としてはそこら辺
は大歓迎らしいのだが中の開発者達はそういった目的でその機能を
作ったわけじゃないらしく納得がいていないらしい。

「まあ俺としてはそこら辺はどうでもいいんだけど」

「それじゃ、まあ明日から修行に入るからね。それと何か欲しい
特殊道具があったら言ってくれ頼んでみるから」

「わかった、高速飛行ができる戦闘の邪魔にならないってかアクセ
サリーとして使えるくらい小型の特殊道具って作れる？」

「さすがにそこまで小型だと難しいと思うけど頼んでみるよ」

3日で一ヶ月分鍛えられるなんてゴンくんたちでもできなかった
ことだ。

練を十分間延ばすだけでも一ヶ月はかかるらしいから念での戦闘
は避けるべきと考えていたがこれだけ鍛える時間があるなら戦闘用
の発を開発しても問題ないかもしれない。

まあ日常を大事にしながら何があっても日常を守ることができる
ように修行をしよう。

オレはそう決めて眠りについた。

.

3話（後書き）

さて定型文になってるような気がしないでもないですが、引き続きこのような駄文を読んでいただきありがとうございます。今回3話目でまた新しいキャラ、長谷川が登場しました。ちなみに彼ただの便利キャラで主役になる予定はございません。空を飛ぶための道具と精神と時の部屋もどきの為だけにだしたんです。

ああ！ 石投げないで！！

ちなみに長谷川は転生者ではありませんのであしからず。

では皆さん、また四話目でお会いしましょう！

4話（前書き）

皆さんお久しぶりです。

gaussです、今回も駄文ですが何卒よろしくお願いいたします。

4話

渡辺稔誉輝は転生者だ。

彼がそれを自覚したのは生まれてまもない頃だった。

まだ自我の目覚めぬうちに前世の記憶をハッキリと思い出したためそれが以後の人格形成に影響を与えたのは間違いない。

とはいえ当初は自分が転生者だと理解しても特に何もする気はなかった。

前世ではオタクだったと自信を持って言える自分が人付き合いなど出来るはずないのだからせいぜい頭脳チートぐらいにしか思っていなかった。

その考え方が変わったのは彼が二度目の3歳の誕生日を迎えてしばらくたったあたりだったと思う。

両親の仕事の都合で引っ越すことになったのだが、その引っ越し先が『海鳴市』と聞いたときはどこのリリなの？

と思ったほどだ。

あまり興味はなかったが前世で大学時代にアホな友人がハマりまくっていたアニメでウンザリするほど内容やキャラクター、世界設定について聞かされていたうえに一度は見たから記憶にはしっかり残っているアニメの世界の舞台の名前だった。

単なる偶然かと思って引っ越しが終わったあとに両親やインターネッットなどを使って調べた。

その結果、『海鳴市』意外にも『翠屋』、『私立聖祥大附属小学校』、『高町桃子』、『月村家』、『高町なのは』と明らかなキーワードが存在した。

その時点で彼はこの世界が『魔法少女リリカルなのは』の世界であると認識した。

そうなるもただの転生とはワケが違ってくる。

母親の話で翠屋の店長には自分と同一年の娘がいてその子の名前が「なのは」ということを聞いた彼はこれはオリ主フラグが立ったか？

と思いつつも前世の頃からの冷静な部分がそれを否定していた、とはいえここが本当にアニメの世界だとしたら自分は未来を知っているというとても大きなアドバンテージを持っているということになる。

どうせ将来はテキストに稼いで前世のようにオタクになる可能性が高かったのだからダメで元々、原作知識を活かしてリア充ルートを頑張ってみるかと思いきその日から彼は行動を開始した。

まず最初に体を鍛えた、大人になってからならともかく子供時代というのは何かと暴力で物事を解決しようとする輩が多いので自分の身を守るためにも体づくりはしっかりやった。

知識に関しては苦手な科目を勉強して他の科目に関しては今の知識が錆びつくことのないように新たに勉強をし直した。

そして一番重要なのが人付き合い。

前世では人付き合いが苦手で一部の趣味が合うやつ以外とは必要最低限のことしか話さないといった感じだったが、それを治すためにもとにかくいろんな人と話した。

近所の子供だったり公園で遊んでる子供たちだったりその両親だったり。

様々な人と話をしているうちにどう話せばいいのかなども分かってきて最終的には人当たりがいい子だと言われるまでになった。

そんなことを続けているうちに彼は念能力に目覚めた。

リリカルなのはの世界で使われている魔導の力ではなかったが十二分に戦える力だ。

さらに彼にとって幸運だったのは両親が念能力者だったということだ。

彼は念に目覚めたあと両親からそれとなく念のことを聞き出し自分に念教えてくれと頼み彼はその後1年半で念を習得する。

それが俺様、渡辺稔誉輝だ。

そんな俺様がいつものように公園で近所の女の子たちと交流を深めに行ったらその公園の砂場に一人だけで遊んでいる女の子がいた。もちろん周りのこと馴染むことができてひとりで遊んでいる子供なんて世の中には星の数ほどいるだろうけど、その子はそんな有象無象とは全く違ったんだ、まず特徴とも言える茶色のツインテールにおそらく砂遊びに使っているビニール袋は喫茶翠屋のものだ。それだけでは確定しづらいが俺様の前世の記憶があの子は「高町なのは」だと訴えている、原作通りなら彼女は現在父親が大怪我で入院して寂しい思いをしているはず。

つまり、今彼女を慰めて幼なじみのポジションを手に入れることが出来れば高町なのはを落とす難易度は格段に下がることになるはずだ、それに人違いだったとしても落ち込んでる女の子を慰めることは俺様にとって決してマイナスにはならないはずだ。

「ねえ君、なんでひとりで遊んでるんだい？」

「……………変質者？」

ハッキリ言って原作のなのは想定して話しかけたことを俺様は後悔したよ。

内気だと言うことは知識としては知っていたがまさか初めてあつた子にあんなことを言われるとはね。

「……………」

「……………」

「えっと、なんでオレ様が変質者なんだい？」

「なのは近づいてくる男は誘拐犯か変質者だってお父さんが言ってたから」

やっぱりなのはちゃんだったか。

そこは今どうでもいい、いや良くないけど横に置いてなのはちゃんのお父さん確か士郎さんっていったよな、あの人とは一度話し合う必要があるみたいだね。

そのあたりの誤解をしっかりといたあとなんでひとりで遊んでるのかをそれとなく聞いてみたら少し前からお父さん（士郎さん）が大怪我で入院してしまってお母さん（桃子さん）は自営業の喫茶店である翠屋の仕事で忙しく、お兄さんもお姉さんもその手伝いで忙しく遊んでくれと言ったら「いい子だから一人で遊んでてね」と言われてしまって仕方なくこうして公園に遊びに来たらしい。

まあ桃子さんや士郎さん達の事情もわからないことはない。

今の翠屋はお世辞にも有名とは言えない、味は確かなので時間と共にリピーターや固定客がつくだろうが今の段階での評価は「最近できたシュークリームの美味しい喫茶店」といったところだ。

そのあたりの事情から今店の経営を片手までやるわけにはいかないということはこの頭脳明晰（転生者のチートだが）な俺様ならこの年でも理解できるがなのはちゃんはまだ幼い子供だ、そんな子にそのあたりの事情を理解しろ言う方が酷である。

「それじゃ俺様と遊ばないかい？」

「え？　なのはと一緒で遊んでくれるの？」

「もちろんだよ、俺様は全世界の女の子の味方だからね」

少なからず未来への先行投資という打算はあるけどね。

今のうちからなのはちゃんに関わっておけば、管理局が出てきたときにデバイスを手に入れる機会もあるかもしれないし、まあ念能力者にリンカーコアがあるのかは分からないし魔導師に念が使えるのかもわからないけどオーラと魔導師が使っている魔力の違いも調べる必要もあるし。

「なのはちゃんは何して遊びたいんだい？」

「えっと、……………砂のお城」

「よし、それじゃおっきなお城つくろうか」

「うん！」

砂場などの細かい砂で大きなものを作ろうとする場合はまず土台をしっかりと作らなきゃいけない、そうしないと大きくなっていくたびに土台が崩れて全体が崩壊してしまうからだ。

それじゃしっかりとした土台を作るためには水が必要だ、水で砂を固めてしっかりとした土台を作ることより大きなモノを作ることが出来る。

俺様が水を汲んできたら何に使うのか聞いてきたなのはちゃんに大まかなことを教えると早速作り始めた。

小さな女の子が思い浮かべるお城と言ったら基本的には大型のレジャーランドなどにあったりする中世ヨーロッパあたりの城だろう、と言っても中世の城にも様々な種類があるし大雑把に中心が一番高いタイプでいいと思うが……………

その日はそのままなのはちゃんと日が暮れるまで遊び続けた。

「もう暗くなってきたしソロソロ帰らないとね」

「あっ……うん、そうだね帰らないといけないもんね」

今まで一人で遊んでいた子が初めて一緒に遊ぶ子ができて分かれるのが辛いといったところだろう。

と言っても明日は普通に平日なんだから幼稚園か保育園に行かないといけないから簡単に遊ぼうとは言えないんだけど。

「なのはちゃんまた一緒に遊ぼうね」

こう言っとならば問題ない。

喜びの顔を浮かべたなのはちゃんに俺様の連絡先を教えるのはちゃんの連絡先も教えてもらった。

この時期から一緒に遊ぶ仲の良い友達がいれば、なのはちゃんは魔王にはならない、ならないと思う、ならないといいな」

☆

それから数年がたって俺様となのはは私立聖祥大付属小学校に入
学することになった。

念の応用までしっかりと習得してあとは独自の発を磨いていくだ
けとなった。

雑念が少ないため子供の念能力者は多いというのは知識としては
知っている、ただ戦闘に向く能力者は数が少ない逆に考えれば戦闘
以外では使える能力つまり日常生活でとても便利な能力者が多いと
いうこと。

そういった念能力者は基本を学んでいなかったりするがオーラを
見ればそれが使い手なのかそうでないのかぐらいは把握できるつも
りだ。

入学式に集まる同学年の子たちの中で念に目覚めている子どもは
確かにいた。

と言っても片手で数えられるぐらいしかいなかったしその中でも
しっかりと纏が出来ていたのは二人だけだった、他に一人もう少し
で纏が使えるようになりそうな子が居たが俺様のリア充ハーレム計
画の障害には多分ならないだろう。

（入学式は退屈だったけど小さい子ってのはいいね、おっあの子は
将来上玉になるな）

円というのはとても便利だ、気配を察知するレーダーだけではな
く集中すれば円の内部にいるものの簡単なデータぐらいは解析でき
る。

円の形を変化させて特定対象を調べることができるようになるま
では時間がかかったけどこれは習得したかいがあったと思える。

入学式のあと一週間ぐらいで俺様はクラスのリーダー的位置を手に入れることができた。

これに関してはこれまでの頑張りが実った形だと思う。

そろそろ、なのはとアリサ達のお友達イベントがある頃だろうか。らなのはの少し後方から気がつかれないように尾行しながらお友達イベントの発生を待っていたんだけど全くの予定外のことが起ってしまった。

なのはがアリサがすすずかのカチューシャを奪ってからかっているのを目撃して現場に向かおうと上履きから下足に履き替えている間に他のクラスメートが二人の間に入ってアリサに説教をしていた、つまりとところなのはとアリサ達のお友達フラグが折れてしまったのだ。

これでアリサが反発して間に入った男子とケンカでもしてくれればフラグを立て直すこともできたのだが間に入った男子（確か本多仁って名前だ）は暴力を使わず言葉で諭すなどしてアリサに非を認めさせずかと仲直りさせてしまった。

その後一ヶ月近くアリサとすすずかの二人をなのはと友達にさせるためにアリサとすすずかの二人と何度か接触を図ったが、いずれも俺様が本多に対する悪口を言ってしまう失敗してしまった。

あのフラグをたたき折ったりすることができてなおかつ小学生にしてあれだけのことができるということは彼が転生者の可能性は高かったし、クラスメートで絶の練習をしていれば念を知っていることは間違いない、かってに念に目覚めた子が絶や鍊を知っているわけがないしその修業なんてしているはずがない。

間違いなく転生者だと考えるとあのフラグを折った理由なんて二人を落とすためとしか考えられないからつい感情的になってしまったということは自覚してるし後悔もしている。

「さて、どうしたものかな」

「トシくん何か考え事？」

「いや、ちよつとね」

俺様のことを心配してくれるのはは実に俺様の希望通りに育つてくれている。

世界の修正力なのかどこか魔王みたいな面を時々見せるがまあ許容範囲内だね、このまま俺様に依存するようになってくれると俺様の欲望的には素晴らしいのだけどそんなことになってしまったら俺様の崇高な目的であるハーレムに問題をきたしてしまうので依存せずでも俺様がいないとダメという形に持っていけないとならない。かと言って原作を完全に無視したりするとこの世界が滅亡してしまうのだからなのは魔法少女になってもらはないとならない。原作開始まで大雑把に考えてあと約3年、念が魔法に通用するのはわからないけどなのはをサポートできるレベルにまでなっていないと原作介入なんてできるはずもないんだから修行をサポートわけにも行かない。

実に忙しい小学校生活だ。

だが、そんなことよりも何とかしてアリサ達となのはを親友……せめて親友一歩手前まで持っていけないと原作にかなりの支障をきたすだろうし何とかしないといけないね。

「なのは、ゴールデンウィークに行く温泉旅行に誰か友達誘ったりとかしないのかい？」

「うん、他の子達は色々と予定があるらしいから」

「そっか、ちよつと残念だね」

うまく行けばアリサ達を誘えるかとも思ったけどそう簡単には行
ってくれないか。

そういえば、アリサって「リリカルなのは」の原作では確か1〜
2年の頃に誘拐されるはず……………

その時にオレ様が助けに入ってお友達にってのが今のところ考え
られる最良の策かな。

こうして俺様は日々の修行に励むこととなる。

4話（後書き）

すいません、駄文ですいません……

今回は渡辺くんの視点から、なのはとの出会いなどを色々とはしよってダイジェストでお送りいたしました。

ちなみにこの渡辺くんですが名前の方は友達からそのまんま取りました。

つまり稔誉輝とかいて「としき」と読む人は存在するのです、決して作者が適当に考えた当て字ではございません。

それではみなさんごきげんよう！

5話（前書き）

皆さんこんばんわ g a u s s です。

前回から約2日ぶりの更新となります。

ちなみに感想をもらえると g a u s s は喜びます。

5話

光陰矢のごとし、少年老いやすく学なりがたし、などのこと諺の通り時間というのはあっという間に過ぎ去っていくものである。

さて、オレが二度目の小学校入学をはたしてからはや一年半がたとうとしている。

この一年間を漢字一文字に例えたとするならオレは迷うことなく「死」の文字を選ぶ、漢字一文字と言わず言葉で表せなんて言われたらそれこそ星の数ほどの言葉が浮かんでくる「拷問」、「尋問」、「苦痛」、「激痛」、「火炙り」、「感電死」、「溺死」、「窒息死」……………最後の方からなんだか死ばかりだな。

まあそんな言葉ばかり浮かんでくるほどに辛い一年だった、もちろんバニングスさんや月村さんたちと遊びに行ったり一緒に課題や宿題をやったりお泊り会をしたりと楽しい思い出が無いわけでは無いけどそんな楽しい思い出が掠れてしまうぐらい辛く厳しい修行の日々だった。

一年ほど前に路上で行き倒れていた現在我が家に居候中の特殊道具ハンター、長谷川祐平さんを助けて彼に念を教わることになったのだが、この先何があるかなんてわからないので成長に影響が出ない程度にでも限りなく急いでしっかりと強くなりたいと言ったのが苦痛の日々の始まりだったんだ。

（もしあの頃に戻れるなら自分をぶん殴っても考え直させるな……………）

修行は辛かった、オレが纏、絶、練までは合格基準に達していると判断されると毎日学校から帰ってきたら「永遠の開発者達^{クリエイターズ}」で創

りだしたらしい“常に一定以上のオーラを使わないと両手両足が拘束されてよくくつついてしまう”修行用特殊道具『修練の枷』とやらを両手両足につけられた。

曰く潜在オーラ量と顕在オーラ量をの両方を鍛えながらオーラの体内最大容量も鍛えられるらしいがオレは僅か2分足らずでオーラが尽きて気絶してしまった（後にこの特殊道具が「堅」の修行も兼ねているということに気がついたが）。

それ以外にも一ヶ月に最低4回は永遠クリエイターズの開発者達の内部での修行だったのでオレの感覚的にはこの一年は20〜30倍近く長く感じているんだけどそのおかげもあってか修練の枷をつけたまま日常生活を送ることができるようになるまで永遠クリエイターズの開発者達内部での時間で約20年、現実時間で4ヶ月かかった。

これは学校をサボることができないので日常の時間以外永遠クリエイターズの開発者達内部にずっと入っていることができたのが夏休みの間だけだったためだ。

まあその段階になってようやく発の修行である水見式をさせてもらえることになり師匠（祐平さんが修行中はこう呼べと言ってきた）がグラスと葉を用意してくれた、最初に発の見本ということで師匠がやって見せてくれた。

水を満たしたグラスに葉を浮かべそれに手を近づけて「練」をおこないそのへんかで系統を見分ける、HUNTER×HUNTERの原作通りの水見式だったがその変化は原作でも出たことのない変化で葉が透けて最後には消えてしまった、それと一緒に水の中に結晶体が出来ていた。

「これは俺のオーラが特質系に属していることを示しているんだけど、オレの特質系としての変化は葉が透けて消える変化でこれは永遠クリエイターズの開発者達を継承したものが水見式を行うと必ず起こる変化なんだ俺が継承する前の変化は水に不純物が出現する、つまりは具現化系。これは俺が後天的に具現化系から特質系に変わったことが原

因だ、ちなみに永遠クリエイターズの開発者達の継承者は強化系でも後天的に特質系に変わるんだなんだったらいずれ継承するか？」

特質系はすごいとかそういったイメージがあるけど永遠クリエイターズの開発者達を継承してまで特質系になりたいとは思わなかったので謹んで遠慮した。

師匠が新らしいグラスを用意してやってみろといったのでワクワクしながら手を近づけて練をおこなうと何も変化が起きなかった、数十秒程練を続けて見たがなんの変化も起きない。

つまりこれは……………

「(変化系か……) 師匠これってどういう事？」

「水をなめてみる」

言われて水をなめてみるとわずかに甘みがある。

水の味が変わる……間違いなく変化系の証だ。

「少し甘いかな」

「水の味が変わるのは変化系の証だ、あと一ヶ月はこれで発の修行を行う」

変化系リエイターズ、どんな能力にしようか考えながら発の修行を一ヶ月(永遠の開発者達の中でだけ)続けて最終的には蜂蜜並みに水を甘くすることが出来るようになった。

発の修行を終えれば念の基礎は習得完了として卒業を言い渡された。

応用はどうしたのと言いたくなかったが思い出してみるとビスケも応用技は基本的に自分で気づかせるようにしていた、おそらく応用技は師匠が直接教えるたぐいのものではないのだろう。

卒業と言われたがそれで納得出来るオレではなかったのもっと

強くなりたんだといったら最初に上げたように、拷問のような修行をやらされた。

堅の説明がされてからは24時間修練の枷をつけることを強制され枷が外されるのは硬の修行の時だけだった。

凝と隠は練と絶を説明されたときに習っていたのでできるように成っていたが隠に関しては堅をしながらそのオーラを纏の状態と錯覚させられるレベルにまで上げると言われてかなり苦労した。

それ以外にも周、円、堅、硬、流の応用技のうち堅以外は習得するのは早かったのだがそれを極めるのには時間がかかった。

そんなこんなで永遠の開発者達内部で6ヶ月現実時間で半月たったあたりで師匠に自分が考えた発は理論的に可能かどうかの確認を取りに行った。

「はあ？ オーラを複数の性質に変化させるって？」

「ええ、大体4〜6種類ぐらいの性質に変化させたいんですけどできますかね？」

「まあ、複数の性質をかけ合わせることもできるんだから理論的には可能だけどなんの性質に変化させるんだ？」

「えっと、風と水と火と土と雷と……」

ここまで言って師匠からストップがかかった。

何でも理論的には可能だけど炎や雷となると拷問のような修行を何年も積まなければならぬらしい、俺的には制約と誓約付けければそこら辺を無視できるんじゃないかと思っていたからそのことを師匠の口から聞き出すためにそれでも諦めたくない粘っていたら師匠が折れてくれた。

修行をつけるという形で………その時の師匠はこう言っていた死なないようにギリギリで回復させるからしっかり耐えろと。

ある時は高圧電流を浴びさせられたり、ある時は超高温で火炙りにされたり、またある時は水の中に大量のおもりをつけて沈められ

たり、またまたある時は竜巻に吹き飛ばされたり、またまたある時は周りの空気をなくされて窒息させられたり、なんども臨死を体験した。

ぶっちゃけ永遠の開発者達の開発者たちがオレが死なないように再生用の治療ポッドを作ってくれてなかったら死んでいた、間違いなく死んでいた。

そんなこんなで昨日やっとへっぽこながら目標の性質全部の性質をクリアしたのであとはイメージの修行と言われ拷問が終わったのだ。

「生きてるって素晴らしいよな」

「あんたとうとう頭おかしくなったの？」

「アリサちゃんそんなこと言っちゃだめだよ」

オレ的に久しぶりの再開だというのになんともキツイお言葉である。

まあバニングスさん達にとっては二日ぶりだから仕方ないんだけどね。

「そういやバニングスさんたちは宿題終わったの？」

「うんちゃんと終わらせたよ」

「当たり前じゃない私を誰だと思ってるの！」

まあ学年でも上から数えたほうが早い二人だしね。

宿題だって計画的に終わらせてるか………オレ？もちろん終わ

らせてるよ、一応研究・開発系の職だったんだから小学生程度の宿題はほぼノータイムで回答できるよ。

ただ修行にかなり時間を取られてたから危うく終わらないところだったけどね。

「そういえばアンタいつまで私たちのことファミリーネームで呼ぶのよ？」

「いや、なんていうか慣れ？」

「ジンくんずっと苗字で読んでたもんね」

そのジンというあだ名ももう呼ばれなれたけどね。

「それを言うならおまえらがオレをジンって呼ぶのと一緒にしろ、そのうち名前で呼べるようにするよ」

「せいぜい頑張りなさい」

「頑張っってねジンくん」

☆

授業というのは基本的に退屈なものだ、授業の仕方がうまい教師の授業ならば授業時間の間興味が惹かれるので面白いと感じるが時間をかけてそんな準備をする教師は残念ながら少数派だほとんどの

教師はマニュアルにそった当たり障りの無い授業をする。

極端に言ってしまうと教科書の内容をそのまま黒板に書き写して
いるようなものだ。

そんな授業なら教科書を読んでしまえば授業内容を理解できる、
これは前世でもそうだった。

特に大学あたりになると授業が面白いかどうかで授業をサボるか
どうか、この先生の授業を取るかを考えたものだ。

それで卒業までの単位が足りなくなりかけて焦ったのもい思い出
だ。

(小学生に取得単位数なんて関係ないしな……)

義務教育である以上時間割どおりに受ければ単位が取れるという
のは楽な気もしないでもないが受けたくない授業まで受けなければ
ならないというのは非常にメンド臭い。

公立じゃないから上の空で授業聞いててもテストができてれば基
本的に何も言われないがあんまり授業を無視してるとさすがに怒ら
れるからそれなりに真面目に取り組まなければならない、と言っ
てもオレは授業の教科書の内側に別の参考書入れてるけど……

「えっとそれじゃこの問題を、本多くん」

「あつハイ、……58です」

「はい正解ですえーここでは――」

答えるように言われた問題は単純な掛け算、証明とかは苦手だっ
たけどそんなのは中学になるまで出てこないから問題ない。

流石に中学後半になったら少し勉強し直したほうがいいのかもしれ
ないけど。

その日はいつも通り上の空のまま放課後になっていった。

「さて、今日はどうするかね」

性質変化が一段落したのであとは自分で頑張れと言われてしまったので、今日からは言われた修行内容をこなすのではなく自分で考えて修行内容も決めなければならぬ。

纏と練は毎日繰り返し返すことは決めているし、あとはどれだけ実用性を上げるかなので基本的に時間は作れるようになった。

かと言って今まで放課後になるとすぐに帰宅していたので一緒に遊びにいく人もいないし………土曜日ってのは半ドンだからかなり時間があいてしまう

「あれ？ ジン今日は帰らないの？」

「ああ、昨日でやらなきゃいけないことは一段落したから今日からは放課後は時間が取れるんだ」

「それじゃこれから私の家でお茶会やるんだけどよかったら来ない？」

月村さんの家でのお茶会はざっと一ヶ月ぶりといったところだろうか。

久しぶりに行くのもいいかもしれないな。

「迷惑じゃないならお邪魔させてもらうけどいいのか？」

「うん、全然迷惑なんかじゃないよ」

「じゃあお邪魔させてもらおうかな」

変える準備を整えて校門まで行くとすでにリムジンを止めて待機していた鮫嶋さんがいた。

「あれ、月村さんの家なのに鮫嶋さんが来てるんだ」

当然の疑問だと思うが月村さんの家でお茶会をやるのなら普通はノエルさんが来るはずだ。

けどあたりにノエルさんの姿は見えず鮫嶋さんしかない、月村さんたちもノエルさんが待っているものだとばかり思っていたのか疑問に思っているようだった。

「申し訳ありませんアリサお嬢様、ノエル様は急なご用事が入ってしまったらしく私が代わりにお迎えにあがりました」

「そう、だったら早めに連絡してよね今日はジンも一緒なんだから」

「申し訳ありません、なにぶん急だったもので」

「ごめんなさい鮫嶋さん、迷惑かけちゃって」

「鮫嶋さん今日はお世話になります」

「いいえ、ジン様がお嬢様たちと仲良くしてくださいってうれし
ゆうございます」

あれ？

なんだろう今なんか違和感が………気のせいかな？

リムジンに乗り込むとオレの両隣バニングスさんと月村さんが来る配置になった。

狭くはないがなんとなく暑い………そんなこと言ったら何言われるんだろうな

☆

月村家は学校から車やで二、三十分の距離にある郊外のお屋敷だ。主に月村さんの姉である月村忍さんが自分の作った警備ロボットなどで屋敷を固めているからうかつに近づいたら不審者撃退用のゴム弾でひどい目にあう。

まあ同じくらい家が離れているバニングスさんも普段から学校に来るときはバスか家の人の送迎となる、高校生あたりならまだ自転車とかで頑張る子がいるかもしれないがオレはそんなことしたくない。

「それでね、すずかったらその時――」

「あっアリサちゃんそれは言わないって言ったのに」

うゝむ、話の流れが良く解らん。

入学してから基本的に一緒に行動してるけどやっぱり女の子の話ってのは容量がつかめない……………

小学生だからなのか、それとも女の子なのかはわからないけどなんとか話の内容がほとんど感情的？なモノばかりでなんでそこでそうなるのという疑問を持ってしまう。

こんな疑問をいちいち持っていたらダメなんだろうけどさ……………
…なんでさっきまで最近買った洋服の話をしてたはずなのに家で買っているペットの話になっちゃったんだろ。

「そうそう、最近また子猫が増えたんだよ」

「また拾ってきたの？」

「違うよ、今までいた子が産んだの」

去勢手術してないのね……………

そうなると際限無く増えていくんじゃないか、ただでさえ何十匹
つて猫がいる猫屋敷のはずなのに。

「それにしても、すずかの家の猫は増えるわね」

「うん、でも里親が決まってる子もいるから」

「全員を飼えるわけじゃないんだからそのほうがいいだろ」

動物はきちんと変える人が買うべきです。

動物好きと動物を飼うのが好きは違いますってね。

「そういえばジンの家ってペットは買ってないのよね」

「ああ、一戸建てとはいえ家の場合は動物好きは多いけど仕事とか
の関係上世話できる人がいないからな」

「そうなんだ、確かに私たちもノエルとかがいるからってところが
大きいしね」

いろいろな話をしながらふと外に目を向けてみると見慣れない風
景が目に入った。

「（あれ？　すずかの家ってこんな廃ビル群近くにあったか？）」

記憶が正しければ月村家の周りはいくつかの住宅と森だったはずだ、少なくともこんな廃ビル群とは無関係なところだったと思う。

「鮫嶋さん道間違えてないですか？」

オレの言葉で外を見たバニングスさんと月村さんは明らかに道が違うことに気がついて鮫嶋さんに正しい道に戻るように指示を出した。

だが、鮫嶋さんから返答はなく、リムジンは道を変えるところかほとんど廃ビル群の奥に入っていく、そんな鮫嶋さんにバニングスさんが突っかかりうとしたが急に動きをきぶらせてガタンっと音を立てて倒れこんだ。

「バニングスさん！！」

「すー……すー……」

「寝てる？」

ガダン、という音が逆の方から聞こえてきた。

「スー……スー……」

「月村さんまで……」

バニングスさんが眠っているだけど確認すると今度は月村さんが眠ってしまった。

明らかにおかしい、そこで気がついたこの二人が眠ってしまったとしたら鮫嶋さんは！！

「鮫嶋さん！！」

「はい、なんででしょうかジン様」

寝て……………ない……………

催眠ガスあたりが撒かれたんだとしたら鮫嶋さんも眠っていないとおか……………しい。

「あ、あれ？」

「どうかなさいましたか？」

「いや、なんか眠気が……………」

「ようやく効いてきたか」

聞こえた、かなり小さなつぶやきだったけど明らかに鮫嶋さんの声とは違う声が鮫嶋さんの口から。

そうか違和感の正体は鮫嶋さんはオレを仁って呼ぶんだったな、ジンじゃないヒトシだクソツすぐに気がつけば。

ある程度こういった薬品に耐性のあるオレにここまで早く影響を与えるのもオレが耐えられない程強力な薬品か、あるいは念能力……………

「あん……………た、鮫嶋……………さ……………んじゃ……………」

……………ない……………な（ダ……………メだ、眠い……………し
体の動きが……………鈍い、ただで……………やられて……………」

…たまるかよ）」

オレはバニングスさんの方に手を伸ばしてバニングスさんに覆いかぶさりながら意識を失ってしまった。

5話（後書き）

やって来ました誘拐フラグ！

リリなのの二次創作にありがちなパターンですよね。

けど個人的にこれは外せんと思うのですよ。

この後目を覚ましたあと犯人たちをボコボコにしてアリサとすずかを助けるのが王道ですよねゝ

自分も好きですよ在り来たりでも面白ければそれでいいのです。

まあこの作品でそんな王道展開を繰り広げられるかはまだわかりませんが……………

ちなみに、15話は昨日の家に出来ていたのですが載つけるの忘れてたんですよねww

でも16話で詰まっているのでしばらく更新はできないかもしれません。

ストックはあるんで更新できないこともありませんが……………

もし早く続きが読みたいという方は感想の方に連絡お願いします。要望が多いようでしたら、そうですね…………9話か10話目ぐらいまでだったら順序良く載っけていこうと思います。

ではまた次回お会いしましょう！

6話（前書き）

先日ぶりの g a u s s です。

なんか実家から戻ってくる電車の中が予想以上に暇で予定より早く16話ができたので6話目を投稿しようと思います。

<< A u さん

ありがとうございます！

どんなに短い感想でも g a u s s はとても嬉しかったです！

6話

薄暗く湿った空気と、氷の様なコンクリートの冷たさでオレは目を覚ました。

「ここは……………（暗いし体の自由が殆ど聞かない、こりゃ動けないな）」

まともに動くのは首から上と言ったところ、それより下はほとんど麻痺している。

何とかして周りを見てみると少し離れたところで縛られているバニングスさんと月村さんを見つけた、騒いでいない様子からしてまだ目を覚ましていないらしい。

好都合だ、体内にの追ってる毒は練で新陳代謝を早めて洗い流せるはずだから早いとこ自由を取り戻してここから逃げればいい、幸いなことに鮫嶋さんに化けてたやつはここにはいないみたいだし麻痺さえ解ければ二人を抱えて逃げるぐらいはできるはず。

というかそういう鍛え方をしてきたはずだ。

（幸い縛り方は甘いし麻痺さえ……………あれ？）

おかしい、もう2〜3分近く練を続けているのに麻痺が解けない。どんな強力な毒物でも致死性のものでなければなんとかあったのに……………そういや、意識を失う前に……………

「念能力の可能性もあるってことか……………」

オレがそうつぶやくと背後から拍手が聞こえてきた。

「正解、君を麻痺させているのは俺の念だ」
「!？」

さっきまで気配なんてなかったはずなのにいきなり後ろから拍手が聞こえてきたかと思ったら今度はあの声が聞こえてきた、鮫嶋さんに化けてオレ達をここに連れてきた可能性が最も高い（この場に入り時点で間違いないだろうが）男の声が聞こえた。

麻痺のせいで背後を向くことはできないのでどの辺に居るかしかわからないが近づいてきていることはわかる。

「あんた、何が目的だ？ バニングスさんと月村さんを誘拐して身代金でも要求するつもりかそれともバニングス達の親の会社に恨みでもあるのか？」

今確認しなければならぬのはこいつの目的。

身代金目的の場合はあの二人が殺される可能性はかなり低い、人質を殺してしまつては身代金との交換が成り立たないからだ、その場合はオレはこいつを下手に刺激しないようにしながら二人の親が金を要するまでの間こいつがバニングスさん達に何もしないように警戒していればいい。

その他の可能性はバニングスさんや月村さんの親が経営する会社に恨みを持つ者たちということ、この場合は会社が傾くほどの身代金の要求か両親が絶望するようなことで会社の経営を傾けようとする二つに傾向が分かれる。

前者ならば子どもを本気で愛しているバニングスの父親とかは間違ひなく金を用意するから特に危害を加えられる心配はない、厄介なのは後者でそういったやつがやることっていったら子どもを陵辱するとか殺すとかそういった方向性になる。

けどさらにまずい最悪の場合が存在する……………それは

「金？ 恨み？ そんなものには興味がないよ、俺はお嬢様二人を好きにすることが目的だからな」

そう、金でも会社への恨みでもない場合考えられるのは女性や少女への異常性欲の暴走。

つまり陵辱するためだけに、女を自分のものにしたいがためだけに行動した場合。

「バニングス達は小学二年生だぞ！ 頭おかしいんじゃないか！！」
「あれで意味のわかる小学生ってものそっちが成熟し過ぎだと思うがね」

じゃかしい！

意識は大人と大差ないんだから当たり前だ！！
しかし非常にまずい。

この手の異常性欲者などには常識がぶっ飛んでいる奴が多いっていうし、オレの体は動かないし……………あれ？もしかしくても大ピンチ！？

「アンタには常識というものがないのか！ もともと性行為というのは子孫を残すためのもので彼女たちのように未成熟の体ではその行為そのものが無意味だぞ！」

だめだ、オレ混乱してる……………

自分で自覚できるんだから相当混乱してるんだろうな

性行為そのものに快楽を覚えてる奴にこんなこと言っただけ無駄なのに、無駄だってわかってるのに……………

「オレは女を孕ませることが出来ればそれでいいから年齢は俺の守

備範囲の6歳から30前半までならいいのさ」

「さてコラ、孕ませるって明らかに無理な年齢が混じってるぞ!」
「そこは俺の念能力でどうにでもなるからね」

……………一体どんな念能力をつくりやがったんだこいつ……………

「さて、だとしてもだったらなんでもっと年齢高くて美人な人はたくさんいるだろうが!」

「……………連続婦女暴行犯『孕ませお兄ちゃん』って知ってるか?」
「えっ? 確か世界中の幼女から人妻まであらゆる女性に暴行を加えたことで全国指名手配されてる凶悪犯だろ、ふざけたことに犯行現場にはメッセージと共にb y孕ませお兄ちゃんと書き残すってニユースでやってた」

なるほど、こいつがそうなのね……………
ってことは明らかに妊娠できない年齢の子が妊娠していたって噂もホントってことかよ

s i d e 孕ませお兄ちゃん

俺には254人の妻がいる。

妻と言ってもあくまで俺が孕ませた女って意味で結婚をしたわけじゃない。

昔から女を孕ませることに強い執着というか興味があった俺は能力を手に入れる前は自分の肉体を鍛えて鍛えて鍛え抜いてその力で行為をしていた。

だがそういったことをすればするほど、もっと多くを！ いろんな女を！ と欲望は強くなるばかりだった。

そんなある時俺はこの力に目覚めた、裏社会で生きていく中でハントーの攻撃をくらって耐えてからこの力に目覚めた俺は力をよく知るためにこの力を使えるが実力は高くないカモを探し出して尋問しこの能力について詳しいことを聞き出した。

曰く、これは念能力というもので基本の四大行の他にいくつかの応用技が存在するという。

俺はカモを脅して念を習得した。

個別の能力というのも自分の系統にあったものをしっかりと考え今までより確実に、大量に女を孕ませることができるようになった。そんなことを何度か続けているうちに女を孕ませるだけではつまらないと思い女を犯したあとは警察たちを挑発するようにメッセーヂを残すようになった。

そうして今も世界中の女性から恐れられる凶悪婦女暴行犯が誕生した。

「そう、俺が孕ませお兄ちゃんことハルちんだ!!」

「自分から名乗るってお前バカだろ」

失礼なガキだな、俺が善意で生かしてやっているというのにバカ扱いとは……………だがまだ我慢だ、恐怖と羞恥による絶望はやるべきの最高のスパイスになる……………

ここでこいつを殺したらあの子たちが味わう絶望が少なくなってしまうからね。

「どうせなにもできないんだ、君はそこでゆっくり見学してるといよ」

「おい！　よせ、やめろオ!!」

誰がやめるものか、今やめたりしたら何のために二ヶ月以上観察と情報収集をやっていたのかわからなくなってしまいうじゃないか。

この街にやってきて将来有望そうなあの子たちを見つけて、彼女たちの家族構成、友人。恋人の有無等すべてを調べたんだ、たとえば神仏が静止しようとも俺は止まることはない。

「さてと、いい加減起きてもらわないとね」

目が覚めた時にはすでにというのもなかなか乙なものだが、今回は彼女たちの恐怖と葛藤を楽しみたいのだから起きていてもらわないと意味が無い。

彼女たちの目を覚ますため、手にオーラを集中させ能力を発動させる。

「オーラを蝶の形状に変化させた？」

「残念、それだけじゃハズレだね」

変化させたオーラを二人の前まで飛ばし、二人を包み込むようにオーラが変化し二人に取り込まれていった。

「霧状に変化させて体内に取り込ませた？」

「人は呼吸してるんだ、極限まで見えにくくしたオーラなら事前に知らない限り防ぎようがないだろ？」

これが俺の念能力『ブラーガバタフライ蝕みを孕む霧』

オーラを霧と蝶の形状に変化させそれを様々な毒に変化させる変化系の念能力。

蝶一匹一匹と糸のように極めて細いオーラでつながっている（糸が切れると蝶は形状を維持できない）、そのため一度に出せる蝶の限界数は両手の指の数の10匹となる。

毒の種類は速効性の神経毒（麻痺）、自然毒、ヘビ毒等さまざまに使い分けることができる。

毒の種類をかけ合わせることで違う毒を作り出すこともできる。

オーラを解除すると毒の効果も消えるが毒によって及ぼされた結果は残る。

「ん……ゲフッゲホッ」

「ゴホッゴホッ」

うん、やっぱりこの組み合わせが気付けにはいいみたいだな。

咳き込みながら目を覚ました美少女達、うん、これがザー○ンで咽たと考えるととても萌える……………

「さて、君たち現状の把握はできるかな」

「えっ？……………誘拐されたってことね」

「家の電話番号は携帯電話に入ってますよ」

……………誘拐され慣れてんのかこいつら
非常に落ち着いてますね、ムカツクことに……………

「いやいや身代金はいらないんだけどね」

「じゃあ何が目的なのよ!!」

「うん、さすがに小学二年生はわからないよねーそれが普通だよ」

むしろそれでわかつちまうあのガキがおかしいだけで。

さてと……………どんなパンツを……………

「なっ何すんのよ!!」

「ゲフツ」

金髪もといアリサちゃんのパンツめくったら顔を蹴られた。

やりやすいように足を自由にしておいたのは失敗だったかな……

……

しかし……………

「ワンちゃんパンツか……………まあ小学生だしキャラ物も普通かな
? なぁ少年」

「オレにふるんじゃねえ!!」

「わわっ見るな!!」

何行ってるのかなこの子はこれからもっと恥ずかしいことになる
のに、これぐらいで恥ずかしがってたらこれから子どもなんか作れ
ないぞー

……………ってまてまて、あのガキが成熟だからといってこの子た
ちが子どもの作り方(性行為)を知ってるとは限らんじゃないか、
どうもあのガキにペースを崩されてるな。

新しいの買おうかな」

「おいコラ!! アリサとすずかに何しやがった!!」

「んゝアーティファクトで性行為の意味とそれに関する羞恥などを学習させてるだけだよ」

これが終わればまあ女子中学生から女子高生あたりの反応をしてくれるようになるだろう。

過去に何度か試しているので間違いない。

ついでにうるさいガキが何度か毒の解毒に挑戦しているのでガキの周りだけ”濃度”を上げてこっちに集中できないようにした。

――6分後

「「あっあう……………」」

小刻みに震えながら火照った表情のアリサちゃんとすずかちゃんが出来上がった。

急激に頭の中に叩き込まれた知識に頭が一時的にオーバーヒートを起こしてるんだろう。

何はともあれ、これで当初の目的を実行できる。

ひとりずつ確実にやるためにすずかちゃんにはもう一回眠ってもらうでしょう。

「完成だな……さてと、始めるとしようか」

side out

side アリサ

目が覚めたらずかと一緒に縛り付けられていた。

何かあったときの対処法として誘拐された場合の対処法も教わっていた私たちはできる限り犯人を刺激しないように携帯電話の中に家の連絡先が入っていることを教えた。

お父さん達は私が誘拐されたらいくらでも払うから絶対に犯人を刺激するようなことはするなと教えられていたし、私だってこんなところで死にたくはない。

だけどこいつは身代金なんていらないと言ってくる。

それじゃ何が目的なの？

おとうさんは私たちが誘拐された場合犯人の目的は家のお金を狙った身代金目的の誘拐かパパたちの会社に恨みを持っている人たちの感情的行動で、どちらも基本的にお金を要求するって聞かされている。

「じゃあ何が目的なのよ!!」

「うん、さすがに小学二年生はわからないよねーそれが普通だよ」

犯人のどこか馬鹿にしているような言葉に怒りがわき上がってくる。

（何よ！ 私は学校の成績はトップなのよ！）

バカにされたという感情が渦巻いてハッキリ言って手が自由なら殴ってやりたい気分になるが縛られているんだからそんなことは出来ない。

そう思って我慢しようとしてたら犯人が私のスカートをまくりあげてパンツを覗いてきた。

「なっ何すんのよ!!」

「ゲフッ」

スカートめくりと称して上級生の男の子がそんなことをやっているところは何度か見たことがあるけど、スカートをめくられるなんて隙を今まで作ったことなんてなかった私は反射的に犯人の顔に自由だった足でケリを入れてしまった。

近くにあったこともあってそれなりの威力があったと思う。

「ワンちゃんパンツか………まあ小学生だしキャラ物も普通かな？
なあ少年」

「オレにふるんじゃねえ!!」

「わわっ見るな!!」

今まで気がつかなかったけど犯人のななめ後ろにジンが倒れていた。

あの位置からだとき男にスカートをめくられたときジンに間違いない見えていたはずだ、そう思うと恥ずかしさのあまり顔が赤くなってしまう。

「まあいいや、君たちは子どもの作り方は知ってるかな？」

犯人がいきなりワケの分からないことを行ってくる。

子供の作り方なんてまだ習ってないし、そういえばパパ達にも聞

いたことがない。

「？　　すずか知ってる？」

「ううん、知らないよ」

どうやらすずかも知らないらしい。

ジンにも聞いてみたいけどそんなことが聞ける雰囲気でないことはわかる。

「テメー、アリサとすずかに何するつもりだ！！」

「落ち着け、まだ本番はやらんよその前にこいつで必要な知識を身につけてもらわんと楽しめないからな」

「必要な知識？」

焦っているジンを見る限りジンは子供の作り方や、こいつが言っている必要な知識というのは知ってるみたいね？

勉強で負けたみたいでちょっと悔しい気もする。

「アリサ！すずか！　逃げろ！！」

あまりにも必死に叫ぶジンの言葉に反応してすずかと一緒に立ち上がろうとするがなぜか力が入らず立ち上がることができない、そんなふうには必死にもがいている私達を嘲笑うかのように犯人と私達との距離は縮まっていく。

そして目の前まで来た犯人は動こうとしてもがいている私達の頭にかチューシャみたいなものを取り付けてスイッチのようなものを押した。

「「きゃあああああああああああああああああつあああああ
あああつあああつあああつああああ！！」」

犯人がスイッチみたいなのを押した瞬間私の頭の中に何かが大
量に流れこんできた。

まるで頭の中に激流の川があるみたいいろいろな知識と見たこ
ともない映像が流れこんでくる。

「機能的……………け……………な、
新……………な」

「お……………アリ……………か……………った！！」
「……………性……………する……………」

な……………だけ……………だよ」

犯人とジンが何か言い争っているような気もするがそんなことを
機にしている余裕は今の私にはない。

自分が知らなかったこと。

これから先知ったであろうことを無理やり頭に詰め込まれてわず
かだが吐き気する気がする。

こんな状態が続いたら私が壊れてしまうそう錯覚しそうになる。

「「あっあう……………」」

しばらくして何かが流れこんでくる感覚がなくなったと思ったら
犯人が私達につけたものを取り外していた。

体が熱い、汗をかいているのがわかるし何よりも無理矢理に送り

込まれた知識がこれから私達が何をされるのかというのを自覚させる。

――性行為

子供を作るための行為で恋人同士が互いの愛を確かめ深め合うもの。

基本的にこんなことが知識として送り込まれている。

だけど、それができるのはもっと体ができた子のはずだ、少なくとも送られてきた知識には私達の年齢でそういったことはできない、負担が大きくやってはいけないといった知識ばかりだった。

それ以前にこんな誘拐犯が初めてなんて絶対にゴメンだ。

「完成だな……さてと、始めるとしようか」

巫山戯るな、何がなんでも逃げてやると思いながら私は逃げようともがき続けた。

side out

ハルちゃんと名乗った変態が能力を強めたのかどうかは分からない

が、あと少しでそれなりに動けるレベルまで解除されかけていた麻痺がさらに強くなってしまっていた。

このままだとオレは何もできずにアリサとすずかが陵辱されていくさまを見ているしかなくなってしまう。

（そんなのはゴメンだ!!）

念は感情によって出力が変動する、心の動きに左右されやすいと誰かが言っていたがいくら出力が上がったからと言っても地力に差がありすぎる。

ハルちゃんは間違いなく何年も念を修行している、それは今までかなりの前科があるにもかかわらず捕まっていないことから推測することができるが、あいつの能力はおそらくオーラを蝶と霧の形状に変化させてなおかつそれに様々な毒の性質を再現するものだろう。

そうでないとオレの麻痺や、アリサたちを解毒したことに對する説明がつかないしその能力からしておそらくは変化系の念能力者。

だけど、オレに對するオーラの遠隔操作などは放出系や操作系に属する能力だ、相性の悪い系統の力もバランスよく取得している時点でかなりの実力者だ。

第一になんとかしたくてもこの呪縛を解くことができない以上オレにはなにもできない。

ハルちゃんがアリサ達に近づくのをただ見ていることしかできない……………オレは、無力だ……………

絶望し、諦めかけたその時、

「そこまでだ!!」

部屋の扉をぶち破って誰かが現れた。
それが救いを与える人であることをオレは心の奥底から願っていた。

6話（後書き）

さて、出て着ちやいましたね誘拐犯。

実はこの次の話して表現的にこちらに乘せていいのかどうか悩んでいる描写があるんですよね……

皆さん読んでダメそうならご連絡ください。

そこをちよいと修正するので。

それでは皆さん、また次回お会いしましょう！

ちなみにこの小説にできているハルちゃんは実在しますがこの小説のハルちゃんとは何の関係もありません。
あくまで名前使わせてもらっただけです。

7話（前書き）

お久しぶりですg a u s sです。
5日ぶりの投稿となります。

＜＜赤地に金飾のパラドキサさん
貴重な意見ありがとうございます。

ノクターンに載せようかとも思いましたがめんど……………ゴホンゴ
ホンッ！

えゝまあ一応自主規制っぽいことをしてみました。

それでも駄目と思う方はご連絡ください。

7話

「そこまでだ!!」

そう言ってドアをぶち破って部屋に入ってきたのはクラスメートの渡辺稔誉輝だった。

だけどオレは彼よりも彼の周りを浮遊している物体の方に気を取られてしまった、漏斗ろうとのような形の物から板二枚がコの字型で接続されているものなどぶっちゃけた話オレが前世で結構好きだった国民的口機動戦士アニメ、機動戦士ガンダムシリーズに出てくるオーレンジ攻撃兵器のファンネルやフィン・ファンネル、ドラグーンらしきも果てにはGNビットらしきものが合計11基彼の周りを浮遊していた。

「ファンネル？ いやドラグーンシステム？ GNビットもあるし」

……………いや確かにこっちの世界にもガンダムは存在するけど確かOOのはまだ放送されてないし、やっぱり転生者かこいつは。

だけど助かった、転生者ならきつとテンプレ通りのチートな能力とか持っていてそれを使って助けようと思ってたはずだ、とりあえずは危機から脱出できそうだな。

俺はこの時完全に忘れていた、オレも転生者の一人だってことを

……………

いつもどおりに学校が終わってからのはと遊びに行こうと高町家に行く途中、近道をしようと思道を通って行くと人間の足が生えていた。

いやこれは正確じゃないな、正しくは建物と建物の間から人の足が出ていたが多分正しい、まあオリ主として見捨てるのは論外なので助けようとしてビックリ。

（この人いつもアリサとすずかを迎えに来る鯨嶋さんじゃん！！）

けど確かに今日もアリサ達はリムジンに乗って帰っていった、その後にでも襲われた？

とりあえずアリサの家に……番号知らないし、仕方がない恭也さんに知らせれば月村家経由で伝わるだろう。

高町家には今なのはしきないだろうから俺様は喫茶翠屋に電話をかけて現状を詳しく説明した。

――10分後

目を覚ました鯨嶋さんに話を聞くと、今日アリサとすずかを迎に行く途中で急にリムジンのエンジンがかからなくなって修理しようと車の外に出たらいきなり後ろから鈍器でなくられ薬か何かをかがされたらしい。

すぐに連絡しようとしたが、麻痺性の薬だったのか体はうまく動かず携帯電話も取り上げられてしまい連絡もできなかった人のこと。そのことから今日アリサ達を迎えに来た鯨嶋さんは誘拐犯が変装

した姿ということになる。

アリサ達がリムジンに乗ってからおよそ20〜30分、誘拐犯が月村家に向かったと勘違いさせようとしているならすでに目的の場所についた頃合いだ。

となると時間的な余裕もない、アリサの持っている携帯のGPSで探してみようという話になったが子どもの俺様はやっぱり詳しいことを教えてもらえずなのはと家でおとなしくしていると言われてしまった。

実に失礼な話だね、俺様は念能力者なんだから確かに体術では戦闘民族に勝てる気はしなけど念を使った戦いなら一般人に負けるほど弱くないしなにより俺様の念はこういったとき搜索とかにも応用できるんだ。

まあ行っても信じてもらえないだろうから、自分の制御できる限界数である11基のビットを出現させて学校から月村家方面の郊外に的を絞って調べ続けると郊外にある廃ビル群の近くに見慣れたリムジンが止まっているのを見つけた。

（みんなはまだ分かってないみたいだし、俺様がアリサとすずかを助けてフラグを立てろって言う神の啓示だね！！）

俺様は高速起動型のビットに乗って飛び出した。

この高速起動型のビットなら現場まで最速で10分もかからないはずだ、ただ急ぎすぎると俺様が振り落とされちまうから俺様が落ちないスピードでけど限りなく急いで現場に向かう。

廃ビル群についてからが問題だった、せいぜい廃ビルなんて5〜6個あれば多い方なんだがここは開発途中で予算不足で開発を中断

したので大量の廃ビルがあるって言う結構予想外のことに参ってしまった。

俺の円の半径は大体25メートル、発の練習に気を取られていたから現状じゃこの程度しか調べられない、ビルの高さが約50〜60メートルと仮定しても一つ一つ調べて言ったら相当な時間を消費してしまう。

そう思っていたときあるビルから女の子の叫び声が聞こえてきた。それがアリサとすずかの叫び声だと確信した俺様はその声が聞こえたビルの部屋のドアをファンネルでぶち破ったら見事にヒット、縛り付けられたアリサとすずかに床に転がっている転生者らしきものの本多だったかな？

そいつが床に転がっていた、俺のビットを見てファンネルとかドラグーンシステムって言うことからガンダムが好きなもの達で同士になれるかもしれないけど、GNビットはまだ公開されていないことを知っているということはOOが公開されてからの世界から転生してきた転生者だろう。

俺様は犯人にファンネルの銃口を向けた。

よっし俺様今輝いてる！！

side out

side 孕ませお兄ちゃん

今回は一体全体どうなってる。

あのガキだけでも結構厄介で時間を取られたってのに、またガキの念能力者かよ。

確かに子どもの念能力者は相当いるが戦闘に向いた念能力者が二人もいるってのはなかなか無いことだぞ、この街は何か呪われてんじゃないだろうな。

「アリサ達を開放しな！ でないとこいつらの砲がお前に向かって集中砲火をするよ」

こいつは一体何を考えてんだろうね……………このガキしかここに入ってこないところを見るとこいつは正義感な何かに駆られて一人で突っ込んできている所だろうな。

オーラの流れもぎこちない、おそらく念をしっかりと習得してから実践などを積んだことがないのだろう。

こんな奴が俺の計画を……………ムカつくわあ

「君は操作系だな」

「……………放出系かもしれないよ」

「それほど多くの物体に大量のオーラを送り込んで操作する、しかもすべて正確に俺にさらに女の子たちに流れ弾が当たらないように操作するそんなことができるのは操作系ぐらいだよ確かに放出系も大量のオーラを出すという点では当てはまるがさらにそれをそのままで正確にそして精密にコントロールするのは操作系じゃないと無理だ」

「……………」

図星みたいだな、おそらくあのビットはほとんど彼の意思でのマ

ニユアル操作だろう。

オート操作にするにはあのサイズじゃ使用できる機械とかはないだろうし、オートで操作してるとしたらあまりにも精密に動きすぎている。

「俺もお楽しみをこれ以上先に延ばされるのはゴメンなんだよ、だから君には退場してもらうよ」

そう言っただけに彼に向かって蝶を数匹飛ばす。

「シールドビット!!」

「ほう、攻撃のほかに防御にも使えるのか、なかなか応用力のある能力だね」

「はっ、お前の能力は俺様には通用しないよ」

ふむ、あのガキンチョの動きを封じていたのは正解だったね。

麻痺が強すぎて声が出せないみたいだ、俺の能力は蝶と霧と毒。

蝶を防がれたところで、それが霧となり吸収される、呼吸を封じるとかしない限り防ぎ用はない。

「だけど、君の能力は範囲攻撃などには弱い」

「それがどうし……………た……………なんだ、しびれて」

おや、あのガキンチョに比べて効き出すのが早いな。

纏の状態ならそれなりの速さで効き出すってことか、これは貴重な情報だ。

「君はそこでおとなしくしている」

やっとお楽しみを始めることができるよ…………

side out

side アリサ

意識がはつきりしない……………
頭がボーっとする、なんだろう宙に浮いてる感じってこんな感じを言うのかな。

———ゾクッ。

え？

なにコレ……………いやなんでこいつは私の胸を触っているの

「……ハアハア、……うーん、やわらかいなあ。アリサちゃんのおっぱい、ぺったんこだけどそれとなく膨らんだ柔らかさ、いいね」

うそ、なんで？

私まだ小学生だよ、これはもっと大人になってからやることじゃないの？

「……どう？　アリサちゃん気持ちいいかい？　……気持ちいいかい？」

「やっ、いやあ」

やだ、ヤメテヤメテヤメテヤメテ！

さわらないで！　さわるなあ！

なんで！！　うそでしょ！？　なんでこんなことするの！！

「ああ！　いい、ホント素晴らしい！　ほらわかるかい、おなかもスベスベだよ」

「……………っ！」

……………ゾワッワッ

（ヤダ、嫌だ！！）

直接、肌に触れられただけそのはずなのに服の上からよりも何倍ももうん、何千倍もキモチワルイ。

——前に海に行ったときに偶然ジンに触られたときはこんな感じはしなかった！！

——恥ずかしかったけどこんな感じはしなかったのに！！

制服をたぐられ胸をさらけ出されるだけで意識が飛びそうになる、自分の体を目の前の男が視姦しているそう思うだけで吐き気がしてくる。

助けに来てくれた人もすぐに押さえつけられてしまった、誰も助けになんて来てくれない、そんな思いが心の底から絶望を呼んでくる。

（怖い、コワイ、こわい、何されるの、何をするつもりなの!!）

与えられた知識から何をされるかぐらい分かっているはずなのに、そんなことを考えることもできないくらい恐怖が体を支配している。

「ハアハアハアハア、いいよ、ようし、よ、スベスベのプニプニだよ」

「ひぐっ、やあ……………」

「おや、アリサちゃんお漏らしかい？ イケない子だな〜あとでお兄ちゃんがペロペロしてあげるね〜」

とうとう私は我慢できずに涙を流してしまった。

恐怖と羞恥、それに声が出せないみたいだけどジンにも見られちゃった。

その羞恥と男への恐怖で失禁してしまったらしくパンツのあたりが生あたたかい感じがする。

体が震える、鳥肌が立った。

「ハアハア、ハアハアもう我慢出来ないよお」

男が自分のズボンのジッパーを下げてみたくもない【自主規制】を取り出して私にの目の前に持ってくる。

臭い、息が詰まりそうなすえた臭いでさらに吐き気が込み上げてくる。

「いやあッそんな汚いもの近づけないでよ!!」

「そんなに嫌がるとすずかちゃんを先にしちゃうぞ〜いいのかな〜」
「だめ!! すずかにヒドイことしないで!!」

こんな気持ち悪ことを気が弱いすずかがされちゃったら絶対大変なことになっちゃう。

せめてすずかだけでも守るんだ。

あたしが守るんだ！！

「だったらいい子になろうね　ほらちゃんと口を開けて……っ」と
「ちょ何を——んぐっ」

男が私の口を無理矢理に開くと勢いよく私の口に汚い【自主規制】を突っ込んできた。

まだキスすらしたことがないのに、先に汚されてしまった。

「んっんっん　おうえっ！！　んぶうっ」

吐き出したいのに男は無理やり口の中に突っ込んでくる。

息ができない、苦しい！　気持ち悪い！　こんなのいやだ！！

「ぎゃあああああああああああああ！！！」

「おうえっ、ゴホッゴホッ」

気がついたときには男の【自主規制】に噛み付いて食い千切ろうとしていた。

男はその痛みに私から一気に離れた。

一時的とはいえその苦しみから逃れることができた私は気持ち悪いもののすべて吐き出そうとした。

「せっかく優しくしてたのに、よくも俺の【自主規制】を食い千切ろうとしてくれたねアリサちゃん」

まるで地獄の底から響いてきたかのような暗く重い声が聞こえた。

嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも
嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも
嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも
嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも
嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも嫌痛いのも

ヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤ
 ダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤ
 ダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤ
 ダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤ
 ダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤ
 ダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤ

「いやあッ、助けてえ！！」

恐怖に駆られた私は行っても無駄だと分かっていることを叫ばずにはいられなかった。

「助けるって」

その叫びは、私の思いは届いたらしい。

Side
out

助けに来たと言っていた渡辺はハッキリ言って役に立たなかった。ファンネルの能力もその応用性も確かに高いとは思うが油断して凝をおこたりあっさりと体の自由を奪われていた。

(使えねー！ー！！ 自分が使ってる能力の弱点くらい予測しとけよ！！！)

状況を引っ掻き回しただけに思えたけど渡辺はほんの僅かだけ希望の光を持ってきてくれていた。

(非常にマズ……………イ？あれ？ 麻痺が弱くなってる？)

今まで全力で練をしていても指一本動かせなかった体がわずかだが動いている。

それに練でなく、纏の状態でだ。

あいつの能力は常に強力な麻痺を起こす毒の霧をオレの早めた新陳代謝と練の密度以上の速度と密度で送るように念でコントロールしてるはず。

ハルちゃんが意図的に力を弱めるには理由がないしそんな事をして俺が自由になったら二対一でさすがに不利なはずだ、なんでこんな事を……………

(待てよ、もしもこれが意図的じゃなくて必然的にこうなってしまうもののだとしたら？)

ハルちゃんはオレの記憶にある限りでは「大量のオーラを体から離し、それを操作するのは操作系」と言っていた。

放出系でも同じことはできると言っていたが精度の差が出る、けどアイツは変化系……………放出系も操作系も相性は悪い系統なんだ、アイツが渡辺をすぐに操作系と断定したのはオーラの流れに対して

操作能力が高かったからそう判断したと取るべきだ。

となるとアイツの能力は複数の対象に遠隔で毒を与えるにはそれに集中するとかもしくはできないんじゃないか？

そういう考えがオレの中に浮かんできた、オレの麻痺が解除されていない事からおそらくは前者。

集中しなければならぬタイプだ、そして今アイツはアリサで楽しもうとしている。

（アリサに手を出している途中で必ずもつと力が緩む瞬間があるはずだ、耐えろ、それまで耐えるんだ）

その一瞬を狙わなければオレはきつとアイツに勝つことはできない。

そして、解除してからまた麻痺にならないようにするには何らかの方法で防御しなければならない、オレにはその方法が、その手段がある。

修行中の発を今ここで形にする。

あとはイメージの問題だと言っていたんだからイメージさえ出来ればいいんだ、その一瞬に備えて力を貯め、強くイメージする。

——イメージするのは常に最強の自分だ

某錬鉄の英雄の台詞が思い浮かぶ……

——現実でできないことなら想像の中で幻想し現実にする

そうだ、オレに固有結界なんて使えない。

けど、イメージを現実にとってくる、その考え方は念能力のすべてのようなもの、とくに具現化系はその最たる例だなら、隣の変化系だって。

物理法則という現実には自らのイメージを持って世界に固定する。

——余計なことを考えるな

今はただ動き出す一瞬それに備えてイメージを固めろ、ありえない空想を現実にするんだ。

思い出せ、自分がこの世界に生まれ変わる前を、その時の痛みを、苦しみを……………

あの赤い世界を……………思い出すんだ

紅蓮の炎がこの身を焼き尽くした時のあの痛みを、苦しみを、そして、あの炎の力を思い出すんだ！！

——炎はすべてを焼き尽くす破壊の力、すべてを灰に帰す終焉の焰、すべての命を動かす命の炎

アリサが泣いている、アリサが苦しんでいる、アリサが怖がっている。

助けにいとオレの中のひとつ感情が駆り立てる。

（まだ駄目だ！！　今突っ込んだって何も解決しない！　耐えろ、耐えるんだ！）

まだ、イメージは完成していない。

まだ、その一瞬ではない。

我慢しろ、その一瞬のためにその怒りを、気持ちいを、力に変えるんだ。

そして、その一瞬はやってきた。

アイツがアリサから離れた瞬間アイツがオレを縛り付けてきた呪縛がほなくなった。

（いま！！）

全力の練、それはオレを縛り付けていた毒の呪縛を完全に取り除いた。

アイツはアリサへの怒りでまだオレに気がついてない、チャンスは今この一瞬。

オレは自分のオーラを炎に変換してオレを縛っている縄を焼き切り、アイツとアリサの間に……………

「いやあッ、助けてえ！！」

ゴメンな、怖い思いをさせて。

すぐに助けられなくて……………

助けるから、絶対に助けてみせるから。

オレはそれを誓うように、自らに誓いを立てるようにその言葉を口にした。

「助けるって、絶対に助けてみせる」

.

7話（後書き）

まず謝っておきます、申し訳御座いませんm（　　）m

実はまだ17話が完成しておりません。

半分まではできてるっていうか話的には17話完成でもいいんですけど180行ちょっと容量も8KBと短いんです。

原作の流れで書こうとすると毎回こうです。

いっそ原作をブツ壊したいところですけど少なくとも無印が終わるまでは大きく流れを変えるのはとてもまずいわけでして……………

すいませんもししたら8話目はもっと期間が開くかもしれません。
いや載せろと言われれば載せますが。

ちなみに今回のお話で主人公が某錬鉄の英霊や正義の味方みたいなことになっていますがあれ主人公が勝手に真似してるだけです。
そこら辺も時間があったら書こうかと思いますがとりあえず今はこんなもんで。

では皆さんまた会う日までノシ

8話（前書き）

お久しぶりです。

g a u s sです。

もうすぐ夏期休暇（夏休み）も終わり、就活が本格的に始まるのでストック云々言ってられないので完成している17話までは適当な感覚で載せていきます。

その後のお話は就活の合間に息抜き程度で書き進めるのでとても更新が遅くなると思いますがご理解ください。

8話

オレにとって炎は恐怖の対象そのものだった。

自分がこの世界に生まれ変わる前に地獄のような世界でこの身を焼かれたその痛みと苦しみ……………

それを思い出すだけで体が震え上がって動けなくなった。

生まれ変わったばかりの頃はライターの火を見るだけでも発作を起こしてなんども病院に担ぎ込まれていたしそのことがあって父さんもタバコを止めた。

オレにとって炎は弱点でしか無い、けど人は炎の恐怖を知ってもなおそれを利用して進化してきた。

——何かを恐怖する、その恐怖が大きければ大きほど乗り越えたときより大きな力となる

誰が言ったのかなんて覚えていない、もしくはオレが知らず知らずに自分で考えた言葉だったかもしれない。

だけど、何かを乗り越えたら強くなれる気がした。

だからオレは自分の力に炎も考えたのかもしれない。

俺のイメージは現実となった。

理屈なんてどうでも良かった、ただ自分の大切な友達を助けたい。その一心で俺はイメージを現実にとってこれた。

「今度はこっちの番だ」

現状を把握したハルちゃんと名乗る変態が動き出す前に、先手必勝で突っ込む。

右の正拳突きから左の腕刀を中段にその勢いを利用して後ろ回し蹴り……………

すべての攻撃に「凝」でオーラを込めているのに、その尽くをハルちゃんは紙一重でかわしてみせる。

「あちっ！」

だがいまのオレにとっては紙一重でもオーラが触れさえすれば十分だ。

「オーラを炎に変化させるって、ガキンチョいったいどんな生活してきやがった」

「なくに、ちょっと他の人よりキツイ修行を積んだだけさ」

オーラを炎や電気に変化させることは理論上可能だ。

だが、それはあくまで理論上の話で実際に変化させようとしたら拷問のような強力な電撃や炎を浴びなければならない、そうしないと変化させたオーラで自分がダメージを追ってしまうし十分なイメージが出来ないから中途半端にしか変化させられなかったりする。

オレの場合は祐平さんの拷問というか処刑というか、まあそういう

ったキツイ修行でイメージや電撃に対してある程度耐えることはできるようになってる。

だけど、どれほど修行しても火に触れば火傷する、人間として当たり前なのは克服することはできないのだ、できたとしても今まですり火傷しにくくなる、熱いところでも気にならなくなる程度……つまり

「自分が火傷してるってことはまだうまくコントロール出来ないらしいな」

そう、変化させたオーラを直接触ればオレ自身が火傷してしまう。かと言ってオレがこれ大きな炎への変化を成功させたのは今さっきだし腕から少し離れたオーラを変えるなんてことはできない。

それがどうしたのかというと、長く戦うと火傷で拳すら作れなくなっちゃうのさ。

「そんなもんすぐにお前を倒せばすむことだろうが!!」

あいつの能力は強力な高密度のオーラさえまもっていれば防げる、あとはあいつを倒すだけなんだけど筋力、体術ともに負けてる以上正面から突っ込んででも負けるだけだ。

どうすべきかと考えていたらオレの中にとある考えが浮かんだ。た。

——勝つ必要はない、アリサとすずかを守りきれればいいのだから

Q…今のオレの目的は？

A…アリサとすずかを守り切ること。

Q…そのために必要な条件は？

A…ハルちんを追い払う、または助けが来るまで時間を稼ぐ、ハ

ルちんの目的を達成できなくする

ハルちんを追い払うのはおそらくオレの実力じゃ無理。

かと言って助けが来るまで時間を稼げるかと言われたらそれも無理、第一に助けが来てもその人達がハルちんに勝てるとは思えない。ハルちんの目的を邪魔するだけなら今この場でアリサとすずかを殺すなどしまえば解決する、けどそれじゃ本末転倒だ。

「(だったらせめてこの場所で出来なくしたらどうだろう?)」

例えばこの建物に火をつけるとかすればとりあえずは時間稼ぎは出来るはずだ。

「とりあえず、ファイヤー!!」

「なぬっ!!」

とりあえず燃やしてみようと思って炎を噴射してみた。

間合いを取っていたハルちんにはすぐに避けられてしまったが何かに着火すればいい、そう思っていたが収束させたわけでもない炎は拡散して火の粉となって消えてしまった。

「……………君は馬鹿か?」

「黙らっしゃい!! 間違えたただけだ!」

まずい、非常にまずい。

炎を収束させるなんてことはオレにはできない。

何か燃えるもの、俺の弱っちい炎を強力にしてくれるものを探さなければならぬ。

(何か、何か無いか……)

必死に何か無いかと探していると、ゴンッ！　という何か重たいものがぶつかる音が聞こえそのワテンポ後にビシャッ！　と液体が溢れる音と共に床に何かの液体が広がってきた。

（この臭い………灯油か！）

なんでこんな所に灯油があるのかは知らないけどこれはチャンスだ。

俺は迷うことなく広がってきている灯油に炎を飛ばして灯油に着火させた。

「なっ、正気か！　このままじゃお前たちも焼け死ぬぞ！」

いや、その前に脱出すればいい。

これだけの炎はオレの動きを隠す壁にもなってくれている、わずかに一瞬だがハルちゃんは炎の発する光で目がくらんでいた。

「でえりやあああああ！！！」

その一瞬でも十分、オレはハルちゃんに突っ込み右拳を硬で強化して全力でぶん殴った。

とごっ、とまるで鋼鉄の壁でもぶん殴った時のような音が燃え盛る炎の音の中に消えていく。

「がっあ………クソッ、こりゃ分が悪いな」

「はあはあ（キツッー、頼むからこれで撤退して！　オレのオーラはもうスツカラカンです！）」

分が悪いと思ってくれたんなら早く撤退してくれとオレは心の底

から祈っていた。

周りは火の海一步手前、自分のオーラはもう戦闘できるレベルも残っていない、ここからの脱出に使う為のオーラは残しておかないとみんな焼け死んでしまう。

ハルちゃんはオレと距離をとると窓から飛び降りていった。

飛び降りた窓から外を確認するともうそこには誰もいなかった、念のために円も使って気配も探ったがもう気配もない、ハルちゃんは撤退してくれた。

あとはオレがアリサ達をこのビルの外に運び出すだけだ、オレはアリサとすずかを縛っている縄を切り二人を背負った……

「ぐっ！　クソッ！！」

さすがに力を使いすぎたのかオレは二人を背負ったはいいいが立ち上がることができなかった、自分の感覚から背負って動くことができるのはひとり分だけ。

たとえ一度一人を運んでから戻ろうとしてもその前に力尽きる、つまりどちらか一人を見捨てることになってしまう。

（ここまで、なのか……）

「ゴホッゴホッ」

「ヒュー……ヒュー」

まずい、オーラで身を守っているオレと違って二人は生身だ。

起きているアリサはなるべく煙を吸わないようにしているけど、まだ意識が戻ってないすずかの呼吸が何かおかしい。

煙を吸い過ぎてるのかもしれない、急いでここから出さないと焼け死ぬ前に呼吸困難か一酸化炭素中毒でお陀仏だ！

「ジン、私は歩けるからすずかを背負って」

「バカ言うんじゃない、お前が一番傷ついてんだ離せと言われても絶対に離さん!!」

「それじゃみんな死んじゃうでしょう!! 離しなさい、私は一人でも歩けるの!」

「断る!! たとえ死んでもお前は離さん!!」

これは意地だ、傷つけることなく助けることが出来なかったオレが意地になっているだけでしかない。

アリサが本当に一人で歩けるならアリサをおろしてすずかを背負って外に出ればいいだけだ、そのほうが確実に生き残れる。

だけど、今アリサを離したらもう二度とこの手を掴めないような気がする。

だから離さない、離したくない。

意地になっているとふと背負っていた重量が軽くなった気がしてふと顔を上げてみると。

「渡辺、お前起きてたのか!？」

「さつき毒を洗い流した、俺様がすずかを運ぶからアリサは君が外に連れていけ」

「ああわかった、眠ってるから重いけど大丈夫か？」

「なに、君と違って俺様はほとんどオーラを使ってないから問題ないよ、それより急がないと灯油のタンクに引火するすぐに出るよ」

渡辺にすずかを渡してアリサを背負いなおしてオレ達は一気に階段を駆け下りた。

火は基本的に上に向かっていくので降りてしまえばあまり問題はないのだが、こんな廃ビルだと下手したら崩れてくる可能性がある以上ゆっくりなんてしている暇わない、全速力で階段を駆け下り外に飛び出す。

飛び出した直後、後方で爆発が起きた。

どうやら灯油以外にもガソリンが混じっていたらしい、するとその爆発を聞きつけたのか遠くの方から誰かが近づいてくるのが分かる。

「もう大丈夫だ」そう思った瞬間、緊張の糸が切れたのか、オーラを使い果たしたのかはわからないがオレはアリサに向かって寄りかかるように意識を失った。

☆

――同日 PM7:25

――海鳴市 月村家

あの後オレは月村家の客室で診察されているところで目が覚めた。診察してくれていた先生によると、倒れたのは極度の疲労によるもので主だった外傷は特にないらしいが毒物を使用したものでそれに対する中和剤や解毒剤を使った治療をしばらくの間は続けるということだった。

「怪我が少なかったのはよかったけど、日頃の拷問のような修行のおかげと思うとなんか複雑だ……………」

ボヤきながら月村家のメイドさんのノエル・綺堂・エアリヒカイトさんに連れられながらみんなが待っているという部屋に向かうが、何故に病院じゃなく月村さんの家で治療を受けていたんだろう？ 普通は病院に運ばれるものなんじゃないかと思いいながら頭の片隅にはバニングスさん達を心配してるオレがいた。

部屋に着くとその中で待ってたのは月村さんのお姉さんの月村忍さんとその恋人の高町恭也さんの月村家組？とバニングスさんのお父さんのデビットさんに恭也さんの妹の美由紀さんとお父さんの士郎さんに月村さんのお付きのメイドさんのファリンさんが居た。

(……………医者がいないな？)

「それじゃあ早速だけど、詳しいことを教えてもらえないかしら」
「あっはい」

オレは今日あったことを出来る限り細かく話した。

放課後に鯨嶋さんに化けたハルちゃんがオレ達を誘拐したこと、オレの動きを封じてアリサとすずかを犯そうとしていたこと、犯人が巷で孕ませお兄ちゃんと呼ばれている連続婦女暴行犯ということ、オレと渡辺でなんとか追い払ったことなどしっかり話した。

さすがに念については少し言葉を選んだが二人の家族にとってはそんな事よりも大切な家族がそんな目に合わされたということの方がずっと重要なことだ。

忍さんたちの話では月村さんはまだ目が覚めていないらしいがバニングスさんは胃の洗浄などの治療を受けたあとは医者とも話そうとせず部屋にこもっているらしい、渡辺はあの後気を失って治療中だそうだ。

「バニングスさんはオレ達の中でも一番傷ついているはずですが、そのなんというか……………」

「ああ、さっきの話で分かっているしそのことについてだけはしっ

かしと話してくれたよ」

だとしてもあんなことをされたんだ、男性不信どころか男性恐怖症になりかねない。

今ならまだ話せる可能性があるんだからダメもとで話してみるしかないな、そう思ったオレはバニングスさんと話したがしたいというのを伝えてバニングスさんが休んでいる部屋まで案内してもらった。

「アリサお嬢様、仁様がお話をしたいとのことですが」
「……………ジンだけ入って」

拒絶はされなかった。

だけどドア越しに聞こえてきた声は弱々しく普段のバニングスさんだったら考えられないような声だった、それがオレの力不足を表しているような感じがして悔しさを感じた。

いや、オレに悔しさを感じる資格なんかないのかもしれないオレは結果的に助けることはできたとはいえとてもじゃないが間に合ったとは思えない、デビットさん達はよくやってくれたと言ってくれたがあの時すでに発が完成していたらバニングスさんにあんな思いをさせないで済んだはずだ。

「バニングスさん？」

部屋に入ると毛布の塊がベットのの上に鎮座していた。

彼女があれに丸まっているというのは明らかだったけどオレはそれを無理に剥がすきにはならなかった。

あれは――

「（傷つかないように自分の身を守ろうとしているのか）……………」

そのままでもいいから話できないか？」

「……………このままでもいいのね？」

「ああ、そのままでもいい」

ある種の防衛本能、あの毛布から出てこようとしなのはその象徴みたいなものだ。

「バニングスさん、オレ達のこと全部話さなかったんだな」

「……………」

士郎さん達はオレたちが念を使ったことを知らなかった。

オーラそのものが言えていなくてもバニングスさんはオレの体から炎が吹き出ていたのを見ていたはずだ、そのことを保護者達に伝えないでいてくれたのはそのことを話したくなかったのかそれとも覚えていないのかはわからないけど念は基本的に資格を持ったハンター以外に教えるのは禁じられている。

オレや渡辺みたいな例外はあるけどそれでも基本的には知られないようにされている。

「……………」

「？ バニングスさん？」

「……………なんで名前で呼ばないのよ」

いやいや、もともとオレは名前で呼んでないだろ。

「あの時はアリサって呼んだじゃない……………なんで名前で呼んでくれないのよ!!」

「えっいや、それは……………」

あの時はあくまで勢いで言っちゃったただだから落ち着いた今は

普段通りに話してるだけなんだけど……………

「私が汚れたから！ だから名前で呼ばないの！？ 汚れたこの名前なんて呼びたくないってことなんでしょ！！」

「違う！！」

「っ！！」

オレが名前で呼ばないのは怖かったからだ、オレなんか名前で呼んでもいいのかという気持ちがあったからだ。

名前で呼んで拒否されるのが怖かった、だから名前で呼ばないようにしていた……………

「お前は汚れてなんかない！！ たとえ汚れたとしてもオレは絶対にお前を、アリサを拒絶したりしない、望むならずっと一緒にいてやる！！」

「……本当に、ホントにずっと一緒にいてくれるの？」

「ああ、ずっと一緒に居る」

おこがましいということは分かっている、だけど今は……今だけは……………

オレがそう言うときアリサは毛布から出てきて、

「ぐぼお！！」

見事なアッパー気味の右拳がオレの鳩尾に吸い込まれた。

な、何故に！？

悶絶しながらアリサを見上げてみると、なんか普段のアリサがいた。

あの高飛車な感じがふつふつと感じるあのアリサ・バニングスがそこにはいた、腕を組んでベットのの上に仁王立ちしてた……………

「あの、アリサ………様？」

「よっし！！ すっきりしたわ……ジン！！」

「はっハイ！！」

「これからはちゃんと私のことを守りなさい、これは命令よ！！」

「サー！！ イエッサー！！」

「ママよ！！」

「イエスマム！！」

怖かった、とっても怖かった。

さっきまでのお淑やかなアリサはどこ行ったのかと心の隅っこの方で、本当に隅っこのほうでそう思いながらもオレはアリサが元気になってくれたことを喜んでいた。

まあこれから先、今まで以上にアリサに振り回されていくことになるような気もするけどそれぐらいで済むなら安いもんだ。

一方その頃

「今回は運良く助かったから良かったものをなんでするか達の間所がわかったのに連絡をよこさなかったんだ!!」

「一歩間違えば死んでいたかもしれないんだ！それが分かって
いるのか！」

月村家の客間の一室では稔誉輝が高町家や月村家の面々に見事説教をされていた。

まああたりまえだが……

「すいません、自分ひとりでどうにかするだろうって……がつ!!」

「調子にのるのも大概にしろ！ 子供一人でどうにかなるはずがないだろう！」

見事な拳骨、戦闘民族高町家の拳骨はとても痛いらしい。

その後5時間にわたり説教が続いた。

それが終わった時の稔誉輝くんは……

[illegible]

もうしませんもうしませんもうしませんもうしませんもうしません

8話（後書き）

さて、一応誘拐編も終わりました。

そろそろ原作に入ってくる時期となりました。

と言っても原作は基本的に流れを変えるつもりはないのでおそらくは原作と違う部分とかを適当に書いていくことになると思います。感想の方にも書きましたが設定や自分への質問はいつでも受け付けておりますので遠慮無く質問してください。結構です。

では皆さん、また会う日までーノシ

9話（前書き）

日付が変わったのでさっさと次を投稿しちいます。
なんとなく大学が始まってからだ投稿している暇すらなくなる気がするので。

9話

誘拐事件から半年、オレ達は三年生になった。

あの後、すずかと稔誉輝が目を覚ましてから二人に俺達の力のことを秘密にしてもらおうとしていたがそこである問題にが発生した。すずかの精孔が開いたらしく纏をしていた、普段ならこのままほっといても問題はないんだけど面倒なことにすずかがオレたちが纏を使っていることから普通は見えないものも見えているということがわかっていた。

おそらくはハルちんの念の影響だろうということだ。念のためにアリサも調べてみると完全に開いてはいないが精孔は開きかけていた、そのままほっとくと面倒なことになりそうだということと最悪の場合ハルちゃんがまたやってくる可能性があることなどから自衛の意味も込めて師匠にアリサとすずかに念を教えてもらえないかと説得してみた。結構あっさり許可が取れた、俺達も含めた4人に自分の作るアーティファクトの実験をさせるという条件付きでだったがまあそれぐらいならいいだろう。

この他にも精神的な治療を兼ねて同世代の子供とのふれあいを作るためという名目で恭也さんの妹の高町……………たかまち……………なんとか？

名前は忘れてしまったが高町妹（仮）がアリサとすずかの友達となったことぐらいかな……………

「そうして、オレ達は今学校に向かっている……………」
「アンタ誰に話してるのよ」

そりゃ、こんな駄作を呼んでくださっている読者の方々に……：
…なんか電波飛んできた……………
いかにいかに、こんなことやってるとまたアリサにどやされちゃう。

あの事件あとアリサ達は今まで使っていたバス通学は出来る限り減らして送り迎えはリムジンでやっていた（その時約束したからと言って毎朝拉致られてオレも同行することになった）が、それでは学校の友達と遊ぶ機会も少なくなってしまうのではないかということで師匠命令でオレが二人の護衛をすることを条件にバス通学が許可された……………

稔誉輝は高町の護衛らしく俺ひとりで二人を守ることになるので師匠がそのための修行と言ってオレは一週間学校を休んで地獄の修行をつまされた約70日に及ぶ修行で何度死にかけたことか……………

「今日は塾があるからジン君と一緒に帰らないんだよね？」

「そういえばそうね、アンタも塾に通えばいいのに」

「ハハハッ、オレに塾なんて必要ないからね」

すでに一度は大学をでたのだから小学校で塾に行く必要など全く無い。

ハッキリ言って行ったとしても寝てるかゲームやってるかで金の無駄である、一度『塾は学校の勉強だけじゃ理解出来ないバカが行くところだ』とバカにしたらアリサに殺されかけた。

本気でそう思っていたわけではないが、アリサはからかうととても面白いので調子に乗りすぎた自覚しているし反省はしているが後悔はしていない！！

「おはようございまゝす」

「おれ斉藤っす」

そんな話を話していると稔誉輝と高町がバスに乗り込んできた、それと一緒に見事なネタを繰り出した稔誉輝も乗り込んだ。

稔誉輝のネタのほとんどがエロゲやギャルゲからきてるのでクラスでわかる奴は基本的にいない。

あの事件以降同じ転生者だということを確認し合いこの世界でまだ無い作品について語り合ったりした、けど最近原作がどうこうつぶやいているのがとても気になるどころだが気にしても仕方が無いことなんだろう。

「なのはちゃん」

「なのは、こっちこっち」

「あっ、アリサちゃんすずかちゃん」

さてと、あとは女同士仲良くしてもらうとしてオレは退散するかね……………そう思いながらオレはひとつ前の席に移動した。

そしてオレが移動して開いた席に高町が座りオレの隣に稔誉輝が来る。

「おれ斉藤っす」

「代打バース」

後ろから何いってんのかという声が聞こえる気がするがそんなのは気のせいだと思い込むことにする。

学校まで話すだけと言うのはとても暇なので基本的にバス通学の時はオレと稔誉輝でゲームをやるのがテンプレ化してきた。

まあオレが格ゲー苦手だったりするのでほとんど稔誉輝に手伝ってもらう形になってるんだけど……………普通の人って極める前に飽きるよね？

オレの場合は格ゲーなら6コンボくらい出せるようになればそれ

なりに戦えるからそれで十分と思うタイプなんだけど、稔誉輝はデスコン見つけて極めるまでやるから今まで一度も勝ったことがない。

「今日の授業ってうるさいのいたっけ？」

「さあ、とりあえず出るだけ出れば良くね」

「そうだな………とりあえず体育以外は出なくてもいいだろ」

今日はどの授業もテストはないはずだから問題無いだろ………

☆

学校とは入学したばかりのことはワクワクドキドキの連続で楽しいものであるが、慣れてくると授業は退屈な上にめんどくさいものだ。もちろん、教師の腕がいいのならその限りではないが今の世の中でより授業を面白く仕様などと考える教師はいたい何人いるのだろうか………

小学校までならまあ集中力のない子供にしっかりと授業に参加させるために面白い授業を考えるものだが中学、高校となるとかはほとんど教師がマニュアル通りの授業しかなくなる、大学まで行くと教授によっては面白い講義があったりするが今のオレには関係ない。

私立聖祥大付属小学校は私立だけあってまあ授業のレベルは高い

のだがすでに大学まで出ているオレと稔誉輝にとっては退屈を通り越して時間の無駄にしか感じる事ができなくなっているちよつと前までは自分で勉強することで暇を潰していたが一度教師にバレてから目をつけられて教室で自習することができなくなってしまうたので稔誉輝は教室で眠ることが多くなりオレにいたっては教室にいるのすらめんどくさいので体育の授業以外はテストの時を覗いて基本的に屋上のハシゴを登った貯水タンクのある辺りという特等席で寝転がりながら空を見上げている。

もちろん本日も晴天なので例に漏れずサボタージュしながらのんびりと空を見上げていた。

優雅にサボっていたはず、だった……………

「見〜つ〜け〜た〜わ〜よ〜」

……………な

んでしようこの地獄の底から響いてくるような声は。

見たくはなかったけど一応振り向いてみるとハシゴを登り切ったアリサがそこに居た、物理法則を無視して揺らめいている髪がまるで悪魔のような雰囲気有助長している上にその表情も非常に恐い。

先生に言われて授業の最初の十分間だけオレのこと探し回ってって聞いたことはあつてけど今まで見つかったことはなかったから油断していた、いや以前にも屋上には来たことがあつたがうまくやりすごすことができて以来一度もやってこなかったのもう来ないだろうとゲームをやっていたのが原因かもしれない。

「あの〜一応聞いときますがなんでわかったの？」

「あんたのそのゲームの音に決まってるでしょ!!」

やっぱりか、イヤホン忘れちゃったからな〜

ってアリサ？ いやアリサ様、なぜオレの耳を掴んでいるので…

…イダダダダダッ！！

「痛い！ アリサ、いやアリサ様痛いです！！ 耳引っ張らないで！！」

「いいからとっとと授業に行くわよ！！」

「わかりました出ます出ますから耳引っ張らないで！！」

そのまま教室まで引きずられ教室についたときにはオレの耳は真っ赤になっていた。

その日の放課後はアリサ達が塾に行くので朝に行っていたようにオレはアリサ達の護衛から外れ同じ塾に通っている稔誉輝が護衛をすることになっている。

「さて、いったいどうするかな」

久しぶりに暇な時間ができたが特にやることがない。

修行もメニューはサボってる時にほとんど終わらせてるし、型の修行は師匠達の見ているところでやらないと変なくせがついても困るし。

「そーいや裕平さんが新しいアーティファクト作ったって言ったな」

しばらくしてオレは裕平さんの研究室で目が覚めた。

「大丈夫か？」

「そう思うならあんなトラップ仕掛けしないでください」

「連絡も入れないで入ってきたほうが悪い、それで今日はなんのようだ？」

「いや、暇だったから前に言ってた新しいアーティファクトを見に来たんだ」

そう言うのと裕平さんは目を輝かせ「ちょっと待ってろ」と言って研究室の奥に行ってしまった。

まるで新しいおもちゃを自慢したがる子供だ……いや、技術者や研究者なんてそんなもんか。

前世の自分も似たようなものだったと思うとなんとなく彼女もできなかった理由がわかるような気もしないでもないのが悲しいところだが治そうと思って治るものでもない……まあ個性だよな

そんなことを考えていると奥の部屋から長谷川さんが大量のアーティファクトを持ってきた。

パッと見で20以上あるがどう持っているのだろうか？

「いや、最近アリサちゃんやすずかちゃんの護衛ばかりしてるから試してもらえなくてデータが取れなかったんだよ」

「確か、最後に来たのはアリサ達が発の修行を終えるまでだったから一ヶ月くらい前だよな？ 一ヶ月でこれだけ作ったのか」

「なにクリエイターズにこもってたから一年ぐらい期間あったからね」

「……………このラ〇トセイバーみたいなのはなんだ？」

一見ガラクタの山にも見えるアーティファクトの山の中から30

？程の金属の柄のようなものを手にとってみるとその見た目に反してほとんど重さを感じなかった。

その見た目はまんま映画の『スター・ウォーズ』に出てくるジェー・カイの騎士のライ・オーセイバーとかガンダムのビームサーベルだった。

「もちろんその柄から光の刃ならぬオーラの刃を発生させる、その名も『オーラセイバー（Aura Savior）』！！」

「パクリじゃねえか！！」

「ちなみにこっちは使用者のオーラをエネルギーにビームみたいにオーラを発射する『オーラライフル（Aura Rifle）』でな——」

「ビームライフルですねわかります」

このノリだとファンネルも出てきそうだ………………

「ちなみにファンネルなんだが——」

あるのか？ あるんだな！

「サイコミューの再現ができなくてな、稔誉輝の能力を解析もしたんだが失敗した」

「そうですか、残念でしたね」

流石に無理だったか、確かに操作系の稔誉輝だってあの卓越した空間把握能力があって初めて完成した能力だしな。

「だが量子通信技術は確立したからドラグーンシステムの完成はもうそこまで来ている、あとは操作系以外の能力者が使う場合を考えてエネルギー効率をどう上げるかが問題点なんだが……………」

「そ、そうですか……………」

なんでその技術を毎回毎回兵器に持っていくのかね……………
気持ちはわからなくもないし『ロマンだ!!』と言われたら納得し
ちやいそうだしな、けどその技術を携帯電話とかに応用すれば一般
的にも名が知れるっていうのに、変なところでこだわるからなこの
人は……………

その後、それらの武器のテストを頼まれたオレはその性能に驚愕
することになる。

まず、最初に実験したのはオレの系統に合わせて変化系能力補助
を目的として作られたオーラサーベルの性能実験だった。

概要的に言うところオーラサーベルは変化系の能力であるオーラを刃
に変化させる補助を行うもので柄についているスイッチを押すか発
動に必要なオーラを送り込むことで発動して適正なオーラ量があれば
大体90センチ〜1メートル位の長さにビーム状のオーラが伸び、
剣の姿になり使用者が変化系、または変化系に近い能力者の場合そ
の刃の形状もある程度自由に変化させることができるらしく長さも
送り込むオーラの量で自在に制御できるということからある程度の
実力があれば戦い方の幅も広がるだろう。

「けど、これってオレみたいな能力者には不要だと思っただが？」

オーラを送り込んで1メートルほどの青い刃をいろんな形状に変
化させて遊びながら思ったことを率直に述べてみる。

「確かに、そういった能力を持ってる人には不要かもしれないけど
それにはまだ応用性があったね、いつも能力を使う容量でその刃を
炎に変えてみなよ」

「おお！！ 炎の刃だ！！」

なるほど、これを使用していても普段どおり能力も使えるしこいつを介して能力を使うこともできるのか……………確かにこれは応用性が高い……………けど

「これ、結構オーラを消費するな……………実践だと結構差が出るレベルだぞ」

「よく気がついたな。実は他のも相性が良い系統でも消費量は大差ないけど、それに関しては考えがあつてな……………これを使ってみろ」

そう言って取り出してきたのは自動車のバッテリーのようなものに給気口みたいなのが取り付けられた装置だった。

これなんてエネルギーパック？

とツツコミを入れたくなったが我慢した、使い方を聞いて言われたとおりに使ってみると自分のオーラをほとんど使わないで炎の刃を作り出すことができた。

「そいつには最近発見された『E・クリスタル』^{エーテル}という新種の宝石を利用した『Eドライブ』^{エーテル}が搭載されていてな。

その星に棲む星も含めた生物の生命エネルギーを集めて蓄える性質を持つてる宝石なんだがオーラを集める機能で1個、集めたオーラを圧縮して蓄えるので1個とこれだけで2個のEクリスタルをつかっているんだ。

Eクリスタル自体はルビーとかダイヤモンドとかに自然界のオーラが影響してできたものだから人工的につくることは出来るんだけどね」

「起動するのにオーラを使うぐらいであとは自動的にオーラを作り出してくれるって考えていいのか？」

「ちよつと違う、あくまで外部のオーラを常集めるだけであつて

それ単体で作りに出してるわけじゃない、単体でオーラを生み出すEクリスタルも発見されてはいるけどこれは人工的につくるには技術的な面でまだ問題が多くてね。

他のクリスタルが宝石の周りにオーラを充満させて飽和状態にすることで自然のバランスを取るために一部の宝石がオーラを吸収するようになるってことから生み出されているのに対して、単体でオーラを生み出すクリスタルは人工的には作れないんじゃないかと言われてるぐらい謎が多いんだ」

曰く、単体でオーラを生み出すクリスタルが発見されたのはオーラが充満していた土地ではなくオーラが枯渇した土地で少量発見されたらしい。

そのことから他のクリスタルと同様に擬似的に発見された環境を再現してそこに宝石を設置したが現在のところクリスタルになった宝石はないらしい。

「ふーん、ちなみにそのクリスタルのお値段は？」

「一つで数億〜数百億かな」

いくらスポンサーがいるとはいえ金使いすぎだろ……………

「ちなみに、かかった金額は人工的につくるための装置を購入した初期投資分とどのレベルがいいかを比較するために購入した最初の1個分の金額だけだから完成したアーティファクトを売っていけば採算は取れるよ」

「ちなみに製品化が決定してるのはどれ？」

「出力の安定性の問題とかから製品化が決定してるのはこのオーラガンだけ」

そう言って渡されてのはオートマチックのハンドガンもどき、形

状況にはグロックの17とか18ポイ気がする。

ただ、本物と明らかに違うところとしてグリップ部分にエネルギー残量を表すメーターのようなものが埋め込まれていた。

「これは、オーラライフルとどう違うんだ？」

「オーラライフルは基本的に単発式だけど、これは元になったグロック18の特徴の一つでもあるセミオートとフルオートの切り替えによって最大33発まで連射可能なんだ、その分威力的にはオーラライフルよりも劣るけど携帯性も高いし使用者のオーラが尽きない限りは弾切れしない上に、最大の特徴として変化系能力を応用したフルメタルコーティング機能で実弾位の大きさに圧縮された念弾をギルディング・メタル（真鍮）の性質を再現したオーラで包むことで本物の弾丸みたいに跳弾させることもできるし並のオーラなら突き破ることができる」

「……………それってさ、普通のハンドガン強化するのと何が違うの？」

弾切れのことを除いたらもはやただの銃じゃね？

オレのその疑問の答えについては笑いながらはぐらかしつつ普通の弾薬も使用できるということの説明してくれた。

つまりこの銃は念弾と弾丸を使い分けることができ、使用者が自分の系統にあった使い方をすればいいということを教えてくれた。

その後以前頼んだ飛行用のアーティファクトの試作品を見せてもらったところ、フリーダムガンダムやストライクフリーダムガンダム、デスティニーガンダムのような翼を装着するタイプとバーニャやスラスターがついたシューズを見せられたので改良を依頼して家に帰った。

.

9話（後書き）

ハイ、今回はこれでおしまいです。

どうにもご都合主義っぽいアイテムが登場してきましたがそれは置いて。

今回は原作に入る前のワンクッションと考えてください。

話が面白くないのは自覚しています。

次回から原作が始まりますが、このSSではアンチになるのかならないのがとても微妙です。

個人的にはなのはの考え方には同調できませんがそれもひとつの考え方だとは思うので否定する気はないですし。

話の流れ的には第三機関を設立中立をとかでもいいんですけど……

……………

管理局が出てきてからそのへんのことは考えるとしましょう。

それではみなさんまた会う日までノシ

多分今日中にあと数話投稿するかもしれませんが
WWW

10話(前書き)

ちよつと予約掲載機能を使ってみたくてやりました。
後悔はしていない(・ω・) b

10話

走った、力のかぎり走った。

つか走っている、この命が尽きるまで走るのでは？

そう思えるほど勢い良く走り続けた。

「ヘルプミーーーーーーー！！！」

巨大な毛玉のような化物から必死に逃げ続けていた。

（なぜだ！？　なぜこんなことに！！）

長谷川さんの研究所から家に帰る途中のすっかり暗くなってしまった道で両親になんて言い訳をしようかと考えながら最悪の場合は長谷川さんに責任押し付けてしまおうかという考えを思いつきその考えに笑いながら早く空をとぶためのアーティファクトが完成しないかという考えも浮かんできた。

いろいろ考えながら自分の家への最後の曲がり角を曲ったところに巨大な毛玉のような怪物がいたのだ。

（あの時、なんでオレは来た道戻らなかったんだよ！！）

毛玉を発見したオレは、あっけに取られて呆然としていた。

1分くらいほうけていると毛玉がいきなりオレに向かって突っ込んできたので現在必死に逃走中というわけだ。

かれこれ10分くらい走っている気がする……………

「ぬおおおおおおおおお！！……………ってあれ？」

ふと後ろから追いかけてくる音が聞こえなくなったと思ったら毛玉がいなくなっていた。

どこに言ったのだろうと探して見ると道の向こう側から高町さんが走ってくるのが見えた、ついでにその後方50mぐらいに稔誉輝がいるところも確認できた。

（そういや、稔誉輝から原作開始確認とかいうメール来てたな……………やっぱりこの世界が漫画家何かに近い世界ってことか？）

まあたとえこの世界が創作の世界に近いとしても、オレや稔誉輝がいる時点で全く別物なんだから気にする必要はないな……………株当てられないかな……………株漫画でもない限り無理か。

そんなアホな思考をしている間に何があったのか近くの動物病院の壁が内側からトラックにでも突っ込まれたような音を立てて吹っ飛んだ。

当然このあたりが危険と判断したオレはすぐにここを離れようと思ったけど、それと同じぐらいどうなるのか気になるという感情もあったのだ。

簡単にいえば好奇心に負けた、好奇心に駆られたオレは少し離れたところから状況を見ようと思ったが、動物病院から出てきた高町は何を思ったのかこっちに走ってきた。

（あつまずっ！）

——ヴォオオオオオオ

立ち止まって小動物に向かって何か話していた高町に向かって上空から毛玉が落ちてきた。

比喩でも何でもなく落ちてきた。

（それにしても……高町のやつマジでイタチ？ と話してないか？）

落ちてきた毛玉を尻目に高町は何か魔法少女的な呪文とポーズをとると高町を中心に力の奔流して光りに包まれた、遅れて到着した稔誉輝がなにやら複雑そうな表情でそれを見ている。

光が収まると聖祥の制服をモチーフにしたと思われる白を基調とした魔法少女の衣装とメカメカしい杖を持った高町がそこに居た。

突然のことで呆然としている高町に見かけによらず機敏な動きでジャンプした毛玉が襲い掛かろうとしていた。

「ファンネル、やれ!!」

そんな毛玉に横から攻撃を加えたのは複雑そうな表情で見守っていた稔誉輝だった。

お得意のオールレンジ攻撃用のファンネルビットを叩き込んで毛玉を弾いたように見える。

高町は突然現れた稔誉輝に驚いていたが、仮にも敵の目の前であれだけ隙を見せるのはどうかと思う、それに対して稔誉輝は簡単に事情を説明したのか一言二言話したあとは毛玉の周りに5〜6基のビットを展開しながら残りのビットで毛玉の体を削っていった。

「型にはまると強いなあいつ……………（念バラしたのはどうかと思うが……………）」

敵の周りで待機させているビットで動きを誘導しながら他でダメージを与え残りで守る。

攻撃から防御まで効率よく行うことができる能力だ、それにあいつの能力は急激な方向転換も可能なので撃ち落そうとするとかなり苦勞するし油断していればあいつ自身が近づいて攻撃してくる。

現に今だって毛玉は切り離された体の回収が追いつかず半分程度の大きさまで小さくなってしまうている、稔譽輝はさらにスピードを上げたが飛び散った毛玉の体の一部が電柱に当たり高町に向かって電柱が倒れこもうとしている。

（おいおい、またうつかりなのか）

あれさえなければ最強にもなれるだろうに……仕方がないな。ストックしておいたオーラの形態から弓矢を選択して出現させ、今にも倒れ込もうとしている電柱に狙いを定める。

「オーラ充填、威力は電柱を破壊できる程度に留める……………」

倒れこみ始めたところで呼吸を整え高町に被害が出ないタイミングを図る。

——電柱が折れ倒れこみ始める。

——稔譽輝が電柱に気がつく。

——遅れて高町も電柱に気がつく。

——稔譽輝がビットを移動させ始める。

——電柱がポイントにかかった。

——今！！

「駆ける風の矢!!!」

オレの放った矢は正確に電柱を撃ちぬき、破壊した。

だが、高町は電柱に対してバリアを張っており邪魔だったかもしれないと思いながらそそくさと姿を隠した。

side 稔誉輝

魔法少女リリカルなのはの世界に転生して、アリサ達の誘拐事件で彼女たちを自分の力で助けることができなかった時からこの世界が別の世界だと理解はしていた。

だけど予測情報として役に立たないかと思って原作の開始時期はしっかり見極めようと考えてたし、あわよくば大切な幼なじみのなのはが闘いに巻き込まれないようにしようと思っていた。

いずれ戦わなければならぬ時が来るそういった前提でジンとともに修行を繰り返した。

天才である俺様にはかなわないとはいえ同世代で同じくらい念が使えるのはジンだけだったからともに修行することはとても良い影響を与えてくれた。

そういった生活が続けながら今日、塾へ向かう道の途中でなのはが傷ついたフェレットを発見した、これで俺様達が存在していたとしても原作と同じような事件が発生する可能性があることが判明した、念のためにジンにそのことを伝えたがあいつはリリなのを知らないのだから俺がどうにかするしか無い。

高町家から飛び出したのはを尾行してなのはがレイジングハートを起動させる前にジュエルシードを封じようと思っていた。

「間に合わなかったか……………」

気づかれないようにと離れすぎていたのか俺が追いついたときにはすでになのははレイジングハートを起動させていた。

それでも魔法を使わせないように、なのはがこの事件にかかわらないようにと思い俺様はバレることなんて気にせずに念能力を使った。

普段から身につけている核にその外装を具現化し、強化する。

なのはを襲おうとしている化物を吹っ飛ばすにはどこに当てればいいのかを一瞬で算出して正確にファンネルビットを命中させる、射撃は苦手だが直接打撃にえば十分当てることができる。

ジンにはファンネルの意味あるのかと聞かれたが、もともとオーレンジ攻撃は牽制になればいいのだから気にする必要はない。

相手の動きを制限して誘導するためのビットを展開して残ったいくつかのビットで攻撃と防御を繰り返す。

ライフルビットで化物の外側を削り、そこにできた隙にソードビットで斬りかかる。

「ぐっ、重いね……………」

化物の攻撃は単調なので避けやすく防ぎやすいが故にその一撃一撃が重い攻撃となっている、俺の防御力ではそう何度も受けられないと思います防御を受けるのではなく逸らして弾く方に切り替える。

攻め、守り、攻めそれを繰り返す続け、やっと核であるジュエルシードが現れそれに手を伸ばそうとしたとき後ろの方から聞こえた破壊音に気がついた。

振り向いてみると俺様がそらした攻撃によってぼろぼろになって

いた電柱がなのはに向かって倒れ込もうとしていた。

「しまっ——（ビットが間に合わない!!）」

なのはに直撃する。

地面に横たわるなのはが見えた気がした。

だがそれは現実になることはなかった、電柱がなのはにぶつかる前に中心から爆発するように壊れたおかげで2つにわかれた電柱のちょうど間になるのはが来る様になった。

それをしなくてもなのはは自分でプロテクションを張っていたようだけど。

（今は、ジンか……………）

何かが飛んできた方にジンがいたような気がする。

そのことが気になって俺様は致命的なミスを犯した。

「ぐふおっ！」

——ヴオオオオオオ

油断していたところに化物の突進が直撃し、俺様は4〜5メートル程吹っ飛びまるでトラックが突っ込んだかのような音を立てて壁に激突し、まるで巨大なハンマーか何かでブツ叩かれたような衝撃が体を襲った。

だが、それでも勢いが収まらずもう5メートルほど壁を擦るように吹っ飛び続けようやく止まった細かい凹凸が沢山ある壁に俺様の左腕は皮膚が裂け、肉がえぐられ、まるでひき肉のような状態になっている、正直言ってかなりグロいし直視したくなくなる。

「ゴフツ、がふぁっ……俺様としたことが油断とはね、しばらく肉

は食べられそうにないな」

あんなものを見たあとで肉を食いたいとは思えない。

しばらくは菜食主義で行くかと場違いなことを思いながらもすぐに体制を立てなおしてジュエルシードをつかもうとするが動きが極端に鈍くなっているのがわかる。

「クソッ（こんなことなら、防御力上げる修行をもっとしとけばよかったかな）」

当たらなければどうということはないと思って防御の修行は比率が低かったせいもあってか予想以上にダメージが大きい。

（というより、ジン見てるんなら助けに入れよ!!）

まあ念の存在を隠さなかった俺様が悪いんだけどね。

けど援護射撃ぐらいしてくれてもいいと思うんだけどね……………

……

そう考えながらギリギリで攻撃をさばいていると後ろの方から飛んできた光の帯が化物を拘束した。

「これって……………」

《Stand by Ready》

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル21、封印！」

《sealing》

やっぱりなのは魔法……………結局俺様は何もできなかったわけだ。

なのはがジュエルシードをレイジングハートに格納するのを俺様は黙ってみていることしかできなかった。

バリアジャケットが解除されフェレットになっているユーノが倒れて遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

「マズイな、逃げるよなのは」

「あっうん、えっと……とりあえず、ごめんなさ〜い」

☆

その後、少し離れた公園まで走ったあとなのははフェレットと自己紹介を終わらせていた。

もちろん俺様も名乗りはしたけど結局なのはを戦わせてしまったことへの罪悪感が残るだけでなんでなのはが動物病院に行く前に引き止めなかったのかという自責の念に囚われかけていた。

「そういえば、あなたが使っていた力はいったい何なんですか？

魔法とも違うようでしたけど」

「……………」

「そういえばトシくんにあんな力があるなんてなのはも初めて知ったよ」

聞かれることは分かっていた、それも覚悟で力を使ったのだから。だけど、話してもいいのだろうか。

魔法を使えるとはいえないのはもユーノも一般人でしか無いしアリサ達みたいに止む終えない事情があるわけでもない、魔法と念が別物だということはユーノの台詞からはっきりした。

もしもオーラと魔力が同一のものならユーノは魔法と勘違いするはずだし、そうでないとしたらオーラと魔法が別物だということしか考えられない。

実際教えることそのものは構わないような気がする、けど問題なのは後にやってくると思われる管理局だ。

彼らは魔法至上主義と言えるほど他の力を否定している。

彼らの言う質量兵器っていうのはこの世界の科学の産物も当て嵌まるし当然のことながら非殺傷設定なんてものが存在しない念も含まれる可能性が高い。

具現化系なんてオーラで質量物質を作り出しているのだから間違はなく管理局は目を付け管理する、またはその力を利用しようとするだろう……………

（そんなことをハンター協会が許すわけがない）

話すことはできない、ユーノはわからないがなのはと嘘を付けないそれを悪いことと認識してるので嘘を付こうとしない。

管理局、特にリンディさんの様な雰囲気を持つ人に尋ねられたら話してしまうだろうし……………ごまかすしか無いか……………

「超能力みたいなものだよ」

「超能力……レアスキルみたいなものなのかな？」

「トシくん超能力が使えるの！？　　っていうか超能力ってあったんだね！！」

大丈夫、嘘入っていない。

詳しく説明しなければいいんだから超能力で片付けたほうがいい、

超能力は一点物だと言っておけばそうそう問い詰められることはないだろう。

俺の能力については、特別な物体を核にして自分が操る対象を召喚する能力という説明にしておいた。

嘘入っていない、真実を多少ねじ曲げているだけであって嘘じゃないんだから俺様に非はない。

ある程度の説明を終えたあとなのはを家に送ってサヨナラした。

さてと……………

傷の治療もしなくちゃいけないけど、その前に彼のところに言っ
て馬車馬のように働いてもらうとしよう……………

.

10話（後書き）

始まった、始まったってしまった………原作が
はあ、原作に添うように書こうとすると毎回短くなっちゃうのが悩
みです。

もともと長くないのにこれがさらに短くなってるなら、お
しまいですよ。

まあ18話が出来なくてヤケクソ気味に投稿しまくってるgaus
sが言えたことではないですが。

よし、ネタ探しにギャルゲーでもやるか！

ではみなさん、御機嫌よう！

11話

高町なのはが魔法少女となってから一晩が明けた日の朝、いつも通りに起床したなのはは異世界の少年ユーノ・スクライアから魔法を使用した遠隔通信、通称「念話」の使い方を教えてもらい念話での会話をしながら授業を受けていた。

教えてもらっているのは昨晚に封印したジュエルシードのことやどうしてジュエルシードが自分の家の近所にあるのかなどの説明を聞いていた、その話を聞きながら今日は学校をお休みしている幼なじみが昨晚使用した力についても聞いてみた。

『彼の力は少なくとも僕らが使ってるような魔法とは根本的にちがうとおもう』

『そうなの？』

もともと魔法なんてものを知らなかったなのは的には幼なじみの稔誉輝が使用した力と魔法の区別などつかなかったのだ。

『うん、僕らの魔法は術者の精神エネルギーを使って魔力素を操って魔法というプログラムを発動させることで自然現象を書き換えるんだけど彼の力は魔力素を使っていなかったし使ってた力は全く別種のエネルギーだから』

ユーノが言うには魔法の扱いがうまくなれば魔力素、つまりは魔力が使われているかがどうかはなんとなくわかるようになってくるとのことだ、と言ってもなのははすでにその片鱗を見せているらしく、自分の放った念話に気がつけたことがその証拠でもあるらしい。

そのまま話を続けたまま授業が終わりなのは魔法使いになっても急に日常が変わるわけじゃないかとどこか拍子抜けた感情をいっていた。

もちろん、何か騒動が怒って欲しいわけではない、なのはが思っていることは子供なら……いや、大人でも思うことがある平凡で退屈な日常からの脱出を求める冒険心、好奇心の類のものであり魔法という特別な力を持ったことで自分にしかできないことがあるという感情が芽生えているだけだ。

（そういえば昨日トシくん怪我してたみたいだけど大丈夫だったのかな………）

普段のなのはだったら大丈夫かどうかの確認を取るまで確認を続けるのだが、昨晩はいろんなことがあって混乱していたこともあって大丈夫かどうかを確認するのを忘れてしまっていた、今思えば助けてもらったお礼もしていない。

あれだけ体をぶつけていたのだからそれなりの怪我をしているはずと思ったのはお見舞いに行こうかと思ったが、ふと自分が穂誉輝の家を知らないということを思い出した、いつも遊ぶときは自分の家か近所の公園だったのだ、アリサ達と仲良くなってからは彼女たちの家でお茶会などもしたが彼の家に行ったことは一度もなかった。

（……………なのは、トシくんのことよく知らないんだっけ）

一番の親友だと思っていた子のこともよく知らないということを理解すると悲しい気持ちに押し潰されそうになった。

『なのは？』

『何でも無いよ、けどさっきまでの話を聞いてるとジュエルシード

が散らばっちゃったのって全然ユーノ君のせいじゃないように思うんだけど』

『だけど、あれを見つけてしまったのは僕だから……全部見つけてちゃんとあるべき場所に返さないとダメだから』

そんなユーノの気持ちが何となくではあるがなのはにはわかった、ユーノ・スクライアは真面目な子であるということそして彼が体力がもどるまでほんの少し休ませて欲しいだけだということなのは彼が考えていることが予想できた。

一人で行く気なのだ、彼はおそらくなのはを巻き込んだことすら自分の罪として捉えるだろう、だけど彼を助けに行こうとしたのはなのは自身の意志であり彼はあくまで助けを求めたに過ぎない。

第一、だれだって命の危険が迫っていれば助けを求めるものでありそれを攻める権利は誰にもない、むしろ自らの声を聞くことができたのがなのはしかいなかったの言う状況のほうが哀れに思える。彼だってできることならもっとしっかりした大人が助けに来てくれたほうが良かったし、戦闘経験があればなお良かった。

しかし蓋を開ければ呼び声に応えてやってきてくれたのは戦いなど何も知らない小さな女の子だったのだ、膨大な魔力を持っていたからあの場を乗り越えることはできたがあんな幸運がなんども続くはずがない。

だからこそ彼、ユーノ・スクライアは力が戻り次第なのはから離れようと考えていた。彼女がまだ日常に戻ることが出来る範囲に居るうちになのはの元から居なくなろうとしていた。

だが、そんな事を正義感の塊とも言える高町なのははそれを許さなかった。いや、昨晚の体験だけだが、自分を魔法少女と呼ばれるものにした昨晚の経験だけが資料だったが彼が一人で集めようとしているものの危険性は分かっていた、分かったつもりになっていた。そうして彼女は彼の手伝いをすることを決めた。

☆

放課後——いつもどおりアリサの家のリムジンに乗せてもらって三人で話をしながら帰宅する。

最初にずかど別れ、家に付く前に降ろしてもらって商店街を通って帰る途中で何か大きな力が動いたのを感じ取った。

ユーノに確認を取るとそれはジュエルシードが発動していることを感じ取ったらしく、すぐに現場に向かう事になった。力が感じられる方角には海鳴市でも有数の神社、八束神社がある方角だった。八束神社に到着したなのは待ち受けていたのはどこかのゲームにでも出てきそうな化け犬っポイ、モンスターだった。

「現住生物を取り込んでる！」

「どうなるの？」

「実態がある分手強くなってる」

「大丈夫、多分」

そう言うとなのはは一步前に出た。ユーノはなのはにレイジングハートを起動させるように言うが。

「えっ？ 起動ってなんだっけ？」

「えっ」

なのはのあまりの予想外の返答にユーノは一時的にフリーズを起こしかけた。

あたりまえだが、目の前に敵がいるのにそんなことをしていればただの的である。化け犬もその例に漏れることなくなのは達に突っ込んできた。

化け犬が突っ込んでこようとしているのに気がついたユーノはすぐになのはの肩に乗りレイジングハートを起動させるように言う。

「我は使命をから始まる起動パスワードを!!」

「えっ、あ、あんな長い覚えてないよ!!」

起動できなかったことですら予想外だったというのに、ここに来てなのははさらに予想外なことを言い出した。

しかし、自分の力が戻っていないこの状況ではどうしてもなのはの力を借りるしか無い。

「もう一回言うから繰り返して!」

「わ、わかった」

だが、化け犬はそんな事情はお構いなしに突っ込んできた。

魔法の力を得たと言っても昨日まで普通の小学三年生だったなのはは恐怖で「ビクッ!!」と体が硬直してしまった。

《Stand by Ready》

《Set up》

化け犬に吹き飛ばされるだけとなるはずだったなのはを救ったのは昨晚ともにジュエルシードを封印したユーノ・スクライアがこの世界に持ち込んだ魔導器、レイジングハートだった。

高度な自我を持つAIを搭載した魔導器だからこそできることである。

なのはに突進を仕掛けようとしていた化け犬もレイジングハートが急に光りだしたことに本能的に警戒を抱いたのか足を止めなのはがどう出るかを警戒している。ユーノもなのはがパスワードなしでレイジングハートを起動させたことに驚いていた。

化け犬が突っ込んでくるのを見てユーノが防護服を装着するように言うと、なのははレイジングハートを突き出し眼を閉じた。

《Barrier jacket》

レイジングハートがそう言うとなのはを中心魔力の膜が展開され、化け犬の突進を防いだがその衝撃でなのはは石段の平らな所まで落とされ座り込んでしまった。

鳥居の上から飛び降りた化け犬の攻撃を防ぎきると封印魔法を発動させてジュエルシードを封印した。

「えっと、これでいいのかな」

「うん、これ以上無いくらいに」

そうなのはに返答したユーノだったが、なのはの才能とその危うさを心配していた。

（なのはにはすごい才能がある……けど、とても闘いに向いてるとは思えない）

もともとただの小学生でしか無いなのはに戦闘技術を求める方が間違っているのかもしれないが今回の戦いでもなのははなんども目を閉じていた。

これは戦闘において絶対にやってはいけないコトということをや

ーノは部族にいたときに護身のための技術を学んだときに教わっていた。

もちろん魔法の才能で言えばなのはユーノとは比べものにならないほどすごい才能を持っているが、あくまで彼女は自分とは関係ない世界の一般人なのだからそんな戦闘技術は身につける必要がないのならそのほうがいい。

（やっぱり魔力が戻ったら僕が一人でジュエルシードを探すべきだなのはだってまだ日常に戻る………）

こうして高町なのはが魔法少女になってからの長い一日が終わった。

☆ ☆ ☆

side 仁

稔誉輝が学校を休んだことから昨晚、あの後何かがあったのかと思つて放課後に稔誉輝の住んでいるマンションに行つてみたがいつの母親が出てきて昨日、裕平さんのところに行くと言つて連絡があつてから帰つてきていないらしい。

（なんで裕平さんのところに行く必要があるんだ？）

色々と疑問は残つていたが一応裕平さんの工房に行つて、稔誉輝が居るかどうか確認をとるとのことだったので様子を見になかにはいるとそこは地獄絵図となつていた。

裕平さんに話を聞くと昨晚あの上に腕を怪我した稔誉輝がやってきて治療と新しいアーティファクトを作れと言つてきてさっきまで作り続けていたらしく徹夜でもう限界とのことだった。

工房を見渡してみると作業台の上に生前某リングのマークのメーカーが発売していたスマートフォンそっくりな電子機器が置かれていた。

何か仕掛けがしてあつても困るので一応「凝」で警戒しながら手にとつてみるが特に仕掛けがあるようには見えない、技術者として起動させてみたい衝動に駆られたがそれで壊したら何言われるのか分かつたもんじゃないので二人が起きるまで新しい技の開発をしようと思ひタイマーをセットして地下の鍛錬場に行くことにした。

鍛錬場に入ってまずは基本的な柔軟体操をして体を解して出来る限り怪我をしないように注意をする。

以前は柔軟体操をやらなくて修行してたのだが、そのせいか体がとても固くなってしまっていて武術の修行でかなり苦勞した経験があるのでこの柔軟は毎回しっかりとやっている。

柔軟が終わると「修練の枷」を付けた状態で型の稽古と攻防力の高速移動、つまり「流」と「凝」の修行に入る。

「やっぱりオレは才能ないな……………」

自分の動きを裕平さんや稔誉輝の動きと比べるとハッキリわかるがオレに格闘技全般の才能は全く無い以前師匠にも言われたが「戦うものとしてはどんなに頑張っても三流、良くて二流が限界」とハッキリ言われた。

言われたときは俺Tueeee!! できないと思ってちよつと引きこもった。

けど、そんな師匠にも「物づくりとか新しいものの開発とか今あるものの改良とかに関する技術はたいしたもんだ」とほめられたことがある、戦闘では役に立たないけどなと一蹴されたけど……

「けど、せめて能力の出力をもう少しあげないと話しにならないよな」

アリサとすずかの誘拐事件以降、ツポコながら一応形になったオレの能力だが、出力的にまだまた弱い。

例えば火の性質変化だったら収束放射でもせいぜいガスバーナーレベルが限界だし、風の性質変化も扇風機の中……頑張って強つてところだ、昨晚に高町を助けるために使った矢だってオーラを貯めこむ時間があったからこそできたわけだし……………

「やっぱりオーラの総量が圧倒的に少ないってのが問題なんだよな」

オーラ使用の効率を上げてもいい加減限界がある。けど、せっかく何の誓約もかけていない能力を誓約で縛って応用性を下げる必要性はないっていうか制約と誓約を付けたくない。

考えるのもめんどくさいし……………

一番の候補としては自然界、つまり外部からオーラを得る方法。

HUNTER×HUNTERの原作でもアベンガネっていう除念能力者が森に住む生物の生命エネルギーを集めるってやってたからできないってことはないはずなんだよな……………

この方法の問題点はどうやって自然界の生命エネルギーを集めるかという方法、仮に集められるとしてそれは戦闘時に使用できるほど高速化できるのかという問題点。

第二候補としてはこの前裕平さんが言っていたEクリスタルを使って事前に溜め込んだオーラを携帯するって方法。

この方法は第一候補と違って方法が簡単だってこと問題点は溜め込んだオーラを開放すると言ってもあくまで建材オーラを一瞬水増しするしかできないうえに、確かあのEクリスタルって一つで億の値がつくシロモノなんだよな……今オレが考えている方式で作ると使い捨ては避けられない……………数億を使い捨てか

……………
……………
……………
……………

かが知れてるんだから……………」

そうと決まったらこんなところで考えてたって仕方がないまず理論的に前例がないか資料を検索して似たようなモノがないか調べて、有ったらそれを元にしてより効率的にして無ければ一から考えていくしかない。

理論は分かんないけど感覚的にはオレが知ってる漫画の知識が流用できる可能性はかなり高いし……………」

そんなことを考えていたら事前に設定したアラームが鳴り響いた。

「おっと、もうこんな時間か」

いい加減起こさないと稔誉輝は二日続けて工房に泊まりこむことになるからさすがにマズイだろう。

そう思い調べていた資料を整理して作業室に入るとふたりはまだソファで眠っていた。

「おい、いい加減起きろよ」

「ああ……………」今何時？」

「午後6時過ぎ、昨日連絡もしないで泊まりこんだんだろ？ 今日
は帰っとかないと親が心配するぞ」

「うん、ん？ ちょっと待て午後6時？」

まだ頭が寝てるんだろうか稔誉輝が時間を聞き返してきたのでもう一度午後6時過ぎだと教えると稔誉輝は頭を抱えながら何かブツブツつぶやいていた。

ぶっっちゃけキモイ……………」

昨日の晩になのは達と別れてから俺様は長谷川さんことマダオのところに行ってジュエルシードのことを話して（すでに記憶を読み取るアーティファクトでマダオには俺たち転生者のこととかはすでにバレちゃってるからね）ハンター協会にオカルト系のハンターを派遣してもらうように交渉してから封印魔法を持たない俺様達がジュエルシードを封印することができるよう封印のための装置を開発してくれとお願いした。

ちよつと秘密を盾に誠意を込めてお願いしたからマダオは泣いていたけどうれし泣きだろうね。

封印以外に日常的に持っていて違和感がないように某スマートフォンに似せて様々な機能も付け加え普通の携帯電話としても使用できるように作ったけどクリエイターズ使っても流石に時間がかかってクリエイターズから出たときにはもう昼になっていた。

今日は原作では神社で子犬がジュエルシードを発動させてなのはそれを封印するはずだから仮眠をとってからの達より先にジュエルシードを封印してなのはがもうこっちの世界に関わらないようにしよう、なのはみたいな女の子はこんな世界に関わるものじゃない。

まあ、そんなこんなで仮眠を取っていたんだけど……………

ジンに起こされたときあいつが時間を午後6時過ぎと言ったのを聞いたときは自分の耳がおかしくなったのかと思った。

まあでも何度聞いても変わらないわけで……………
つまり、寝過ごした。

やってしまったああああああああああああああああ！！！！

11話（後書き）

すいませんすいません。

なのはの視点って苦手なんです。

なのはって倫理観が子供なのに考え方がやけに大人びてるところがあるんでどこまで現実と理想を擦り合わせればいいのかわからないのです。

アリサやずかはある程度大人びていても違和感ないのですがなのはの場合原作上の考え方にちょっと面倒なところがありまして……

この後無理やり変えてしまいうか原作に合わせるかで結構悩んでいるんですよ

まあとりあえずは16話までは上げていく予定なので本日今回と夜にあと一回ぐらい更新するかもしれません。

12話（前書き）

本日最後の更新と思われます。

12話

おはようございます、渡辺稔誉輝です。

平凡な転生者の小学三年生をやっていますが……………

ドォーローンという大きな音が聞こえてきましたね、現場に行ってみるとしましょう。

☆

爆発があつた場所に行くと俺様の幼馴染みの高町なのはが尻餅を付いていた。

「また魔法の失敗かい」

「にやはは、また失敗……」

なんで俺様達がこんなことをしているのかといえは話は数日前まで遡る。

異世界からやってきた小さなフェレットと言うことになっているミッドチルダの魔導師ユーノとなのはの出会いからなのはの魔法使いとしての日々が始まり俺様はその手伝いをしている。

最初はなのはが魔法に関わることを認めたくなく原作を改変することになったとしてもなのはをジュエルシードに関わらせず、俺様がジュエルシードを回収しようと思っていたんだけど俺様に魔導師としての資質がないということなのはが俺様抜きでいちどジュエルシードを封印してしまったことからなのはをこの世界に関わらせないようにするってのはもう無理だろうからせめて自分の身は守れるようにと、毎朝なのはの魔法の練習に付き合いながらユーノと一緒になのはの育成方向に関して話したりしている。

「なかなかうまくいかないね」

「でもすごいよ、たった数日でここまで出来るようになってるんだから」

「そうそう、基本的な戦闘は俺様がやればいいんだからそんなに焦る必要ないよ」

確かに、今まで魔法のまの字も知らなかった女の子がここまで出てきていれば十分すごい。

天才の俺様だって念を覚えるまでに何年もかかったのだからそれだけなのはの資質が大きいということを示しているんだろう。

「けど、何度見ても稔誉輝のレアスキルって不思議だよね」

「そうかい？ 俺様は特に不思議とは思わないんだけどね」

どういう理論で動いてるか分かってるからね。

「だって、魔力を使ってる痕跡もなければ古代魔法系でもないそれなのに物質をコントロールしてエネルギーを放出するんだから僕たちの理論では説明できてないのかな」

「まあ世の中にはいまだ未知の世界が沢山あるってことさ」

念能力のことを教えてもいいけど俺様がユーノに念のことを教えたのが原因でハンターが念を使えるってことが管理局に知られたりすれば管理局がハンター協会に干渉しようとするのは間違いないだろう。

念能力はミッド式やベルカ式と違って非殺傷設定なんて存在しないし才能による大小はあるとしても魔法と違ってやろうと思えばすべての人が使うことが出来る力ってのは管理局の最高評議会にとっては許すことができない力だろう。

彼らは自分たちが選んだ優れた統治者によって世界は管理運営されるべきだっていう考え方である以上縛られることなく自由気ままなハンターたちが管理局と共感することができるとは思えない。

いろいろなことを考えながらなのはとユーノと話しているとのはが設定していた携帯のアラームが鳴った。

「そろそろ朝ごはんの時間だね」

「そうだね、それじゃ帰ろうか」

俺様はコンビニに行って朝ごはんを買ってこないとね。

親は両方共働いてるからこの時間はもういないんだよね、昨日はおかずも残らなかったし。

「それじゃまた学校で」

「うん、また後でね」

魔導師じゃない俺様は念話を使うことはできないけどそのかわりなのはたちと連絡をとるために作ったmPhone（見た目はまんま○Phone）に念話を受信する機能をつけてヘッドセットを使って送信する機能を付けることで一応俺様も念話に参加できる。

このmPhoneはもともと封印魔法を使えない俺様がジュエルシードを封印するために作ったんだけどそれだけじゃもったいないからいろんな機能をつけまくったらすごいことになったんだよね。

「さてと、今日は何にしよう昨日は焼肉弁当だったし今日はあっさりめのパスタにしようかな」

俺様が向かうのは近所のコンビニ、最近はなのはの練習に付き合ってるってこともあって家で朝食を取れないからコンビニ弁当で朝食を済ませることが多い。

コンビニで買物を済ませるとさっさと家にかえって食事を済ませ軽くシャワーを浴びて制服に着替えて学校に行こうとして机の脇においておいた水着が目に入って今日の放課後にみんなでプールに行く約束をしていたことを思い出して慌てて水着をしまう。

（イケないイケない、俺様としたことが美少女との約束を忘れるところだった）

けど、この世界だとまだ土曜日は半ドンで授業があるってのがめんどくさいね。ハッキリ言って分かりきったことを聞くのって結構苦痛なんだよね。

ジンは遠慮無く授業サボってアリサに説教されてるけど………いつも通りにバス停で暫く待つとなのはがやってきてバスが来るまでの時間を話をしながら時間を潰す。

できることならジュエルシードのことを忘れてこんな平和な世界から出ないようにしたかったがすでに遅い、それに神社の封印に参加できなかったのは俺様に非があるから強く出ることもできない。実際に戦闘すれば間違いなくなのはに勝つ自信はあるけど魔法の才能は間違いなくなのはの方がうえだし、なによりなのは魔法を手放す気はないだろう。

☆

「それで俺様はどうしたらいいとおおもう？」
「いきなりなんだよ」

これから先どうしたらいいか、俺様一人では考える限界が来たのでジンに頼ることにしてみた。

「いや、これから先なのははより深く魔法に関わっていくことになるそうならばいずれ念に辿り着くかもしれない」
「だからって念を教えたりするんじゃないぞ」

言う前に潰された……………

「確かに身を守るレベルの魔法を教えとくつてのは間違いじゃない、アリサとすずかだつて最低限四大行までは教えることになってんだからそれを止めろとは言わないけど念なんか教えたりしてみろ狙われたとき高町を守るのはお前の役目になるんだ」

ジンは高町に関してオレは手を貸す気はないぞとハッキリいった。確かにジンはリリカルなのは知らないし教えようとしたときも「変な先入観を持ちたくないこの世界はオレにとって現実以外の何でも無いんだ」って言ってたし協力してもらえとは思ってなかったけど。

「まあそのジュエルシードとやらに関しては興味あるな……………
…オレも探してみるか」

「……………その集めたジュエルシードは俺様達に渡してもらえ
るのかい？」

「バカいえ、おまえたちに渡したら研究できないだろ全部回収した
いんならオレより先に回収するんだな」

敵が増えた……………

ジンが敵に回るとものすごくめんどくさい、こいつは卑怯上等で
来るから何しでかすか分かったもんじゃないし。

何よりも俺様とジンの勝率は5・6で俺様が負け越してるんだよ
ね……………負けのほとんどが超遠距離からの奇襲だったけど、ジュ
エルシード探しでそんなことされたら防ぎ用がない。

なのは達のバリアジャケットやシールドをオーラで貫くことがで
きるのは俺様が証明済み……………ここはあれだね。

「それじゃジン研究が終わったらジュエルシードはもういらんのかい？」

「研究結果にもよるだろ、その先も必要なら使い続けるし必要ないなら捨てるし」

「必要なかったら俺様達に譲ってくれないかい？」

「なんでおまえたちに――」

もちろんタダで譲ってもらえるとは思っていない。

「俺様秘蔵の美少女写真集でどうだい？」

「それを先に言えよ！」

そう言っただけ俺様の肩をしっかりと掴んでサムズアップをするジン、実に分かりやすい。

「ちなみに必要なときでも譲ってくれるって言うんなら俺様調べ、今後3年間の株式市場の上がる株と大人向け俺様秘蔵の美少女写真集を……………」

「俺達は友達だろ研究が終わったら間違いなくお前にお届けしよう！」

扱いやすくて助かる。

まあ男の子の夢が詰まったものだからね、だけどジン早いとこ鼻血止めてくれないかいキモイよ。

「おっとスマンスマン、けどこいつそんなに高機能にしていたのかよ」

ジンは自分のmPhoneをいじりながら至極当然なことを聞いてきた、たしか説明したとき一緒に工房にいたよね？

「あの時いったい何を聞いてたんだい？」

「いや、封印のこととかあんまり興味なかったから他の機能のことばかり考えてた」

ハハハと笑って誤魔化そうとしてるけど結局は人の話を聞いてないだけだね。

さらに問い詰めてやろうと思ったらジンはいきなり立ち上がって貯水タンクの裏に隠れた、あっそうそうちなみにここは屋上、今は放課後。

俺様達が授業をサボって話し合ってたんならわかるけど、なんでいきなり隠れる？

——コツコツ

聞こえた、恐らくジンはこの音に気がついたから隠れたんだ。

教師辺りが階段を登ってくる音が近づいてきている、それに気がつく俺様も隠れることにした。

もちろんジンと同じ所に隠れたりすると見つかったとき面倒なのでジンとは違い屋上の片隅に積み上げられているダンボールの中に隠れる。

ダンボールに内側から覗き穴を作って屋上に登ってきた人物を確認するとそこには、サラサラとして金髪を風になびかせた白い肌の女の子なのは友達のアリサ・バニングスだった。

（そういえばジンがサボってる時はアリサが探しに行ってたね）

アリサは屋上を見渡すとなんとビツクリ、「円」をやってみせた。

——「絶」

絶で誤魔化しきれるとは思えないけどジンはアリサが「円」をしてるってことに気がついてないんだからなんとかなると思いたい。

「いた、貯水タンクの裏に隠れるなんていい度胸じゃないジン」

アリサに言い当てられたからか貯水タンクに頭をぶつけたのか鈍い音が響いた。

もちろんそんな音が聞こえればアリサはそっちに向かうのは当たり前前、俺様はアリサがハシゴを登り切ったのを確認して屋上から撤収した、後ろのほうでジンの断末魔が聞こえた気がしたが気のせいということにしておこう。

☆

side アリサ

授業終了を告げるチャイムがなって今日の授業が終わったことを

私たちに知らせてくれた。

「さて、授業終わり」と私が言うと「準備オッケー」とさすがが続きなのはが「それじゃ待ち合わせの場所に」というそして最後に三人で。

「「「しゅっぱーっ！」「」」

息ぴったりで教室を出ようとする私とその親友のすずかとなのは。今日は以前から約束していた新しくできたプールにみんなで行くことになっていた。

「午前中授業だと楽でいいわね」 放課後いっぱい遊べるしさ」

「そうだね」 今日のプールも楽しみ楽しみ」

「ちゃんと水着持ってきた？」

「もちろん」

色々と話しながら私たちはすずかの家のメイドさん、ノエルさんとファリンさんが待っている場所に着いたところでどこで何かが足りないことに気がついた。

「ちょっと待ってジン達は？」

「あれ？　そういえば……」

「さっき授業が終わった時にはもういなかったのに」

授業始まるまでは間違いなくいたから授業終わった後に居なくなっただけだと思っただけであいつら途中で授業抜けだしてサボってたわね………

私はノエルさん達にジン達を連れてくるから少し待っていてもらうように頼んでジンがいますと思われる屋上に向かった。

「バカと煙は高いところが好きって言うけどいい加減屋上にも飽きないのかしら」

ちょっと前までは校舎裏とか中庭とかいろんなところに移動してたから探すのにも時間がかかってたけど最近は屋上で空を見上げることが多くなってる。

黄昏てても似合わないって分かってないのか分かってやってるか、それとも無意識で空を見上げてるのか、そのあたりはわからないけど探す方としては場所が特定しやすくて分かりやすいんだけどその分隠れる技術を身につけたみたいでまるで忍者みたいに身を隠しまくってる。

今だって屋上を見渡したただけじゃジンの姿は見つからない。

こんな時どうしたらいいのか長谷川さんに聞いたら念の基礎「纏」と「練」の応用技の「円」を教えてください、気配を探る技術らしいけど私は10mが限界だけど屋上を調べるだけならこれでも十分。円を使いながら屋上を調べると貯水タンクの裏手の方から気配がした。

「いた、貯水タンクの裏に隠れるなんていい度胸じゃないジン」

確証はなかったから鎌かけてみようと思って適当に行ってみただけ貯水タンクに何かをぶつけたような音が聞こえた。

貯水タンクまで続いているハシゴを登って行くとそこには頭を抱えて悶えてるジンがいた。

「ジン、今日の約束のこと忘れたわけじゃないわよね？」

「ま、まてアリサ今日はオレじゃなくて稔誉輝が話があるからって」

そう言われて屋上をもう一度見渡してみるけど渡辺の姿は見えない

いし気配もしない。

「あら渡辺はどこにもいないけど、どういう事かしら」
「なっなにー!!逃げやがったなー!!」

まあ逃げたとしてものはたちのところに向かつてるでしょうし、
ジンにお仕置きしたら急いで待ち合わせ場所に行かないとね。

「さてと、ジン時間もないから一発で許してあげる」
「へっ?NOoooooooooooooooo!!」

☆

ボロボロになったジンを引きずって待ち合わせ場所に向かうとジンの荷物を持ってすでに待ち合わせ場所に着いていた渡辺がいた。
まあ自分から待ち合わせ場所に来たみたいだし、なのはにこつてりと絞られたみたいだから私からのお仕置きは免除してあげるとしますか。

ジンを見てファリンさん達が心配していたけど大丈夫ですよと言
って車に放り込んだ。

「美由紀さんは現地集合なんですか？」

「はい、ユーノ君と一緒に」

「なのはユーノとすっかり仲良しね」

「ユーノ君賢くていいよね」

数日前に私たちが怪我をしているフェレット、ユーノを拾ってか
らなのはが預かってるけど最近はずっと一緒にいるのよね」

けどユーノはほんとに賢いし、いい子よね」

プールは楽しみだけど私は泳げないからノエルさんか美由紀さん
に泳ぎを教えてもらおうと。

☆

その後私たちはプールで歌を歌ったり競争をしたり、みんなでた

くさん遊んだ。

＊詳しくは魔法少女リリカルなのは サウンドステージ01で確かめてねゝそこにジンと渡辺が追加されただけだから。

途中でちよつと眠っちゃってちよつとアレな夢をみた気がするけど久しぶりにジンたちと思いつきり遊べたからよしとしましょ。

12話（後書き）

とりあえず今日はこれぐらいにしておきます。

一応次の話から新キャラってかホントならもっと早く出てくるはずだったキャラが出てきます。

13話(前書き)

今回から新キャラが登場いたします。

13話

《Standby Ready》

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル?? 封印!!」
《Sealing》

なのはがジュエルシードの封印を終え、なのは達は5つ目のジュエルシードを手に入れた。

封印を終えて家に帰る途中なのははレイジングハートを待機状態に戻すのも忘れて引きずりながら歩いている。

「なのは、大丈夫?」

「大丈夫なんだけど、ちょっと疲れた」

ユーノがなのはを心配して話しかけるがなのはの返事にも覇気がない。

小学生が毎晩こんなことをしていたら疲れるのもあたりまえだが
.....

「なのはあんまり無茶しないようにね、俺様だっているんだからなのはは封印に集中してくれればいいんだ」

「そうだよなのは、僕だって攻撃系の魔法は苦手だけどこれでも補助魔法はそれなりに得意なんだから」

人の話を無視したりしないのはには珍しく、返答がない。

「……………」

「なのは？」

流石に様子がおかしいと思ったユーノがなのはに声をかけるとなのははパツタリとうつ伏せに倒れこんでしまった。

「うわあ！　なのは！　なのは！　大丈夫！？」

「あちゃゝあ、今のは痛いぞ」

見事に頭から倒れこんだからね。

それにしても稔誉輝くんすっごい他人ごとですね。

まあそんなことを言いつつも稔誉輝はなのはをおぶって高町家まで送り届けた。

（最近恭也さんの視線が厳しいものになってきたのはやっぱり俺様がなのはを連れ出してるって思われてるってことなのかな）

まあ傍から見たらそう見えるんだろうね。

☆

さて、日付変わって高町家では昨晚の疲れが出ているのはを心配したユーノが今日はゆっくり休んだほうがいいと助言して今日のジュエルシード探しはお休みということになった。

本日はアリサとすずかと一緒になのはの父、高町士郎さんがコーチ兼オーナーをしている翠屋JFCの試合を応援する約束があるらしくみんな河原のグラウンドにお出かけです。

「そういえば本多くんは？」

「ジンは知り合いのところに用事があるらしいわ、渡辺も駄目だったんでしょ？」

「うん、アリサちゃんよく知ってるね」

「だってジンは渡辺も一緒だからって言ってたし」

アリサとなのははジンと稔誉輝も誘ったみたいですけど断られちゃったみたいだね。

まああーだ、こーだ言ってる内に試合開始。

と言っても作者はサッカーの細かい描写などできるはずもないのでこの部分は魔法少女リリカルなのは第三話をDVDか何かで確認してください。

それではタイムスリープ！！

さて試合も翠屋JFCの勝利で終わり、なのは達は翠屋で軽いお茶会です。

ユーノの品評会みたいにも見えませんが

「それにしても、改めて見るとこの子フェレットとはなんか違うくない？」

アリサの鋭い指摘、中身魔法使いだしね。

「そういえばそうかな、動物病院の医院長先生も変わった子だねって言ってたし」

「あゝえっとまあちよっと変わったフェレットって事で、ほらユーノ君お手」

そう言ってユーノにお手をさせるなのは、ユーノもバレないようにするためとはいえ必死ですね。

注）普通のフェレットにお手を覚えさせようとしたら根気よく長い時間をかけないと無理です、拾ってきたフェレットがいきなりお手をするなんて普通はありません。

まあそんなことを知らないアリサたちからすればユーノはとても賢いフェレットに見えることでしょう。

まあどうなるかと言ったらユーノはアリサとすずかに頭を撫で回されている状況ですね普通のフェレットなら逃げ出してるでしょうに。

『ごめんねユーノ君』

『だ、大丈夫』

さすがに悪いと思ったのかなのは念話でユーノに謝罪をしています。

しばらくして、翠屋JFCの子達の食事も終わったらしく士郎さんが解散宣言をしていた。

なのははさっきの試合でゴールキーパーをやっていた子からジュエルシードの気配を感じ取ったみたいです。

(気のせい……………だよね)

☆

ところ変わって長谷川の工房。

「さて、今日来てもらったのはほかでもないこの前穂誉輝に頼まれてたオカルト系のハンターがこの街に到着してなお前たちを紹介するため呼んだんだ」

そう前置きをしてから長谷川が呼び出したのは大体二十代後半の年齢の青年だった。

見た目まんま某飛天御剣な流派を使う人が出てくるやつの悪一文字を掲げる左○助さんですね。

「初めまして、清水夏流です。 オカルトハンターをやっています」

この見た目でオカルトハンターってギャグですかね？

「オレは本多仁です、一応ライセンスは持っています」

「渡辺稔誉輝、俺様もライセンス持ってるよ」

「君たちがライセンスを？」

いったいいつの間にとったんですかね？

いくらなんでも見た目9歳児がライセンスを取れるとは思えないけど。

「俺様達はそのマダオの推薦でライセンスを取得したからね」

「そうか、こいつ一応三ツ星だっけ」

えゝHUNTER×HUNTERの原作でも推薦があればライセンスが取れるって設定なかったのに……………

まあライセンス取得編を書くのがメンド臭かったってのが理由だろうけど、ご都合主義って便利な言葉ですねゝ

「あっそうそう、ここにいる奴らは全員知ってるらしいから言っておくよオレも転生者だ」

「……………」

「ああ一年生の頃のフラグはジンが叩き折りやがったんで、それ以外にもアリサ達がマダオに念を習ってるってことも違うね」

「えっ、アリサ達念使えるの？」

「まだ「練」の修行中でもう時期「発」の修業に入るらしいね」

「それじゃアリサたちも戦力として数える？」

「いや、アリサ達が自分の身を守るために念を覚えることには賛成したけど戦力として数えようとしたら間違いなくジンは反対するね」
「なるほど、それじゃジュエルシード集めはあくまでなのはが中心でやってるんだね？」

「そうだね、あくまで俺様が攻撃と防御をになってユーノが補助、なのはが封印ってとこかな本当は原作壊すことになってモノのはを魔法とかかわらせなくなかったんだけど間に合わなくてね」

結構物騒な会話ですね。

まあ仕方ないことかもしれないけど出来るんだったらもうちょっといい方向に物事を考えられないものかな」

ホラホラあんまりふたりだけで話してるもんだからジンが暇を持て余してm P h o n eでゲームやってますよ」

何のゲームやってるのかな………て、テトリスですか……えっ何？ 自分で作ったの？

よく作るね、それ以前にそれってOSなんなの？ W i n d o w s？ それともM O c？ えっ？ A n O r o i dを元にしたオリジナルOS？ うわ、クリエイターズ使って開発時間作ったとはいってもよくやるわ」

あっ向こうは話がまとまったみたいだね。

「よし、現状は理解できたけどそうなると小学校に潜入してたほうが状況を掴みやすいな……裕平、使えそうなアーティファクトってある？」

「あるよ、この前作った年齢詐称薬、使用者がイメージした年齢

に変化可能」

どっかの10歳の魔法先生のペットが勝手に購入してたやつそっくりなのが出てきましたね。

一粒しか無いみたいだけど……………

「それじゃそれ使わせてもらおうわ」

ちよつと確認しないで飲んじゃっていいの!?

なんか後ろのほうで黒い笑みを浮かべている人がいますよ

あゝ飲んじやった……

――ボフンツ

ゲホゲホ、なんでこの手のモノだと毎回煙が出るんですかね?

「うん、しっかり効いてるな、これならどう見ても小学生だ」

うつわゝあんな怪しい薬でほんとに効果あるんだ……………

「なるほど、あの薬はしっかり聞くと……………」

今とっても危ない台詞が聞こえたんですけど……………

気のせいってことにおきましよう、しかし知り合いを実験に使うか普通?

「そんじゃ小学校への転校手続きをしないとな……………あそうだ裕平、元に戻るための薬は?」

「そんなもんじゃない」

「パ、パードウン？」

「だから元に戻る薬など無い」

「なんだとおおおお！！」

やっぱりこんなオチですか。

「ちょっと待てなんて薬作っておいて解除薬がないんだよ！！」

「作ってないからな」

「だったら今すぐ作れ！！」

まあ薬の成分表さえあれば解除薬だって作れるだろうね。

「無理だってさっきの薬は偶然できたものだから成分表も何も無いからな」

「だったらなんでそんなの飲ませるんだよ！！ 飲む前に言えよ」

「言う前に飲んだのお前じゃん」

確かに説明される前に飲んだのは夏流ですね、長谷川は止めようとはしてなかったけど。

夏流がコ○ン君になってしまいましたね、あの見た目のまま縮んだのでずいぶん凶悪そうなガキンチョですけど。

流石に小さいままだとコ○ン君みたいに戸籍とかパスポートの問題とかいろいろあるから必死ですね、まあ戻れないとしてももう一

度子供からやり直すだけ……………あつ結構嫌だ。

「仕方ない、ちょっと待ってろ」

いくらマッドといえど人の子あれだけ必死になられるとかわいそうに思ったんですね、薬の成分でも調べに行っただけでしょうか？薬を作ってもらえると思っているのか稔誉輝とジンは良かったなと夏流の肩を叩いてますけど、あの長谷川がしっかりとつくるんですかね？

また面白薬品を作ってきそうで怖いところがあるんですが……………あつ戻ってきた。

「今ハンター協会に連絡してお前の戸籍とか9歳児に書き換えてもらったからさっきの問題は心配しなくていいぞ」

「……………」

予想の斜め上に行く行動ってこういう事ですかね。
三人とも（。D。）って顔で固まってますけど。

——ゴゴゴ……………

おや？ 地震ですかね？

「……………おい稔誉輝」

「すまんマダオ今なのはから連絡入った俺様は行くよ！」

そう言って外に飛び出していく稔誉輝。
ビットに乗ってるのかとても早いですね……………

「裕平さんどうしたの？」

「今ジュエルシードが発動した、場所は市街地でっかい大木が出て根っこがあちこちに被害を出してる」

「分かったmP h o n eの通信同期させとけよ」

ジンも行きましたね……………さて本職さんは何やってんでし
ようか。

ってまだ固まってますよ。

「おい夏流お前も行かなくていいのか？」

「……………」

「……ジュエルシードに願えばもどること出るんじゃないのか？」
「！」

あっ覚醒した。

「よし、俺も向かうとするよ」

「ああ、ちよつと待て」

飛び出していこうとする夏流を呼び止めて取り出したのはmP h
o n e……………いったい何機作っただろ。

mP h o n eについての説明を聞き終わると弾丸のように飛び出
していききましたね……………

あっ今壁にぶつかった……………

三人が大丈夫かどうかちょっと心配ですがどうなるかに関してはまた次の機会にということだ。

それではアディオス!!

13話（後書き）

ついに原作の第3話まで話が進みましたよ。

まあ原作の流れってのはどうにも合わせにくいんでこれからも書くときは原作の裏でこんなことが有りましたよという感じに書いていく書き方がメインとなると思います。

と言ってもさすがにKY執務官とかがやってくるところとかはどうにかして介入させようと思っっています。

誰かオラにアイディアを分けてくれ〜！

14話（前書き）

皆さんお久しぶりです。

大体一ヶ月ぶりの更新となります。

すいませんリアルで就活やらゼミナールやらで忙しくて、少なくとも就職が決まるまでは1ヶ月に一回の更新が限界かもしれません。本当に申し訳ありませんがどうか見守っていてください。

>あっぷるばいさん

自分に文才なくてすいません、けど仁はまだまだ空気が続くかもしれません。

構想の段階で仁は活躍する予定だったんですけどね！

14話

side 仁

さて、映画を少しぐらいは見ると人ならわかると思うがどっかの地底世界とか、ジャングルが映画の舞台になったりするとほぼ確実に言っているほど出てくるのが食人植物である。

とお前そんなもの海鳴市にはあるはずもないのだが、ただいま現在進行中で増え続けているこの大木達はその食人植物よろしくのごとく根っこが広がり続けている。

行く先を見渡せば地面から飛び出してきた根っこに車をひっくり返された人達や根っこに弾き飛ばされた人達が避難しようとしている。

「こりゃ普通に走っていったら間違いなく足止め食らうな……………」

人ごみをかき分けていく時間はないと思って近くの民家の屋根に登らせてもらった。

衝撃でちよつと瓦が割れちゃったけど……………」

「さてどうするか、アリサ達は発信器持ってるわけでもないからな」

確か、アリサがお父さんと買い物で、さすがが忍さんと出かけてるんだったな。

買い物……………デパートの方か!!

そう考えてデパートの方を見ると大木が広がり続けているその進行方向にデパートがある、っていうかこのまま大木が広がり続けると見事にデパートを丸飲みする位置。

非常にマズイ、俺がいくら急いでも4?以上離れたデパートまで1時間はかかる。

『稔誉輝聞こえるか! 稔誉輝!』

『聞こえてるよ、どうしたんだい?』

『大木の広がる速度から海鳴のデパートに到達するまでの時間を計算できないか?』

全速力でデパートに向かいながら、稔誉輝に通信で間に合うかどうかを計算してもらう。

到達まで一時間以上の差があるなら間に合いようがないが30分程度なら体への負担をある程度無視すれば縮めることはできる。

『おいおい俺様だって早くなのはのところに行ってやらなきゃいけないんだけど』

『時間がないのはお互い様だ! 早くやってくれ』

『ハイハイ……………速度目算、毎分17m目標到達まで…………あと58分!』

58分ギリギリだけど間に合う!

とにかく急がないと、アリサ達が間違はなくデパートにいる保証がない以上周辺も探す必要があるんだ。

あれから40分近く民家の屋根を伝ってデパートに向かっているけど……………

（まいったな……木の根が屋根にまで伸びてるせいで思ったより速度が出せない）

高層ビルとかにも道ができてるのはありがたいが、木の根はコンクリートと違って脆いから力を入れすぎると足場が崩れることになっちまう。

なんとか間に合うだろうけど周辺を探す時間があるかどうか………

そんなことを考えながら走っていると、下の方に見覚えのある車と人影が見えた。

「あれって、すずか？」

すずかもデパートにいたと思ってたけどどうやら違かったみたいだ。

それにしてもビックリなのは忍さんのドライビングテクニックだ、左、右、上、下と四方八方からやってくる木の根を紙一重で華麗に避けて進んでいる。

だけどその先、木で行き止まりになってますよ……………あっ止まった車から降りて走って逃げるのか、ってマズッ後ろから木の根が来てるのに気がついてない！

オレは走りながらオーラを溜め、ストックしてある形態からこの状況で使えるものを選択する。

（距離300〜400、形態は弓矢、性質は火）

溜めたオーラを矢に集中させ、引き絞る。

——中るんじゃない、中イメージを持ってくる

——イメージを持ってきたら後はそのイメージの通り

——弓を引き絞りタイミングを測る

（距離修正250→300、横風が強い為照準を修正……完了）

イメージとオレの動きが重なった瞬間矢を放つ

——イメージ、現実と一致

この瞬間オレは引き絞っていた矢を放った。

放たれた矢はオレのイメージ通りに宙を駆け、すずか達の背後から迫ってきている木の根に向かっていく。

——忍さんが木の根に気づく

——避けきれないと判断したのかすずかを安全圏に突き飛ばす

——木の根が忍さんに襲いかかる

——それより少し早くオレの放った矢がイメージ通りに命中する

矢が命中した瞬間、木の根は燃えて灰となった。

（忍さんに怪我はないみたいだな……うまく中ってよかったわ

〜

一応他にけが人がいないか聞くためにすずかの元に向かう。

side すずか

今日はなのはちゃんたちと翠屋JFCの試合の応援に行ったあとお姉ちゃんとお出かけしてたのですが急にあちらこちらから木の根っ子が出てきて街がパニックになってしまいました。

私たちはお姉ちゃんの運転技術でなんとか木の根を避けていたんですけど、道が塞がれていて仕方なく車を降りることになりました。

「お姉ちゃん早く！」

こんな状態を作り出せるとしたら念の使い手の可能性が高いということはジンくんや長谷川さんに教えられています。

車から降りた私はすぐに「纏」を使って念からの攻撃に身を備えます。

今の私ができるのは「纏」「絶」「練」の三つ。

お姉ちゃんも念の存在は私とアリサちゃんが念を教えてもらうことになったときに聞いて知っていますが特に修行をしているわけではないので念は使えません。

けど、お姉ちゃんは私たちの一族の力を十分に使えるので今の私よりもきつとずっとよく動けると思います。

「すずか！　ポーっとしないで、早く逃げるわよ！」
「うん！」

ちょっと遠くを見れば大きな木が沢山生えているのがハッキリと見えます。

えっと確かこういう物体を操作するのは操作系の念能力者？

それにしても木の根にオーラが宿ってるように見えないんだけど………私の修行不足なのかな？

「すずか！！！」

お姉ちゃんにいきなり突き飛ばされてどうしたのかとそっちを見ると大きな木の根がお姉ちゃんに襲い掛かろうとしていました（木に意志があるかわからないけど）。

「お姉ちゃん！！！」

木の根がお姉ちゃんに当たるそう見えたときに私の後方から大きなオーラの塊が木の根に当たり、その瞬間に木の根が急に燃え上がり根っこは灰になってしまいました。

弓道やアーチェリーで使う矢にも見えなくなかったけど………

「今のってオーラでできた矢？」

「正解だ、すずか」

自分の考えを口に出してみると夜の飛んできた方から声が聞こえた。

振り向いてみるとそこには私とアリサちゃんの親友、本多 仁くん……ジンくんがそこに立っていた。

ってことはさっきのはジンくんの念能力、今まで見せてもらったことなかったけど遠距離系の能力なのかな？ ……………ってそうじゃなくて！！

「ジンくん、どうしてここに！？」

「話はあと、すずか、怪我はないか？」

「うん、私は大丈夫だよ」

私がそう言うとジンくんはお姉ちゃんのところに行って怪我がないか確認していました。

お姉ちゃんに怪我がないということを確認したのかお姉ちゃんとジンくんは戻ってきました。

ジンくんにこれは念能力者の仕業なのかということを知ると、ジンくんはこれは念能力者の仕業じゃないと答えてくれました。

「とりあえず避難しよう、こんな状態じゃ木を処理しても車を移動させることもできない」

「そうね、街がこんなことになってるんだから避難所くらい作られてるでしょうしそこに行きましょう」

「それじゃ、すずかオレはアリサの無事確かめに行く、避難所に着いたら裕平さんの方に連絡を入れてくれそれでオレにも伝わるから」

「分かったよ、ジンくんアリサちゃんをお願いね」

私がそう言うとジンくんは「任せとけ！」と言って走って行ってしまいました。

とりあえず、安全なところに避難しないと……………

side 仁

すずかと忍さんの無事を確認したあとオレはアリサを探すためにデパートに向かいだした。

おっと、一応すずか達の無事を確認したってことを報告したほうがいいな……………

『こちら仁、すずかと忍さんの無事を確認した二人には避難所に行ったあとに連絡を入れるように言っておいたから連絡が入ったら教えてくれ』

『了解、それとこっちからも連絡がある。ついさっき夏流がアリサとデビットさんを助けた高町家や翠屋は範囲外だから後は原因を取り除くだけだ』

『オッケー、稔誉輝からの連絡は？』

『高町と合流して今、街を見渡せる高いビルに向かってるそうだ』

高いビル……………まあ高町に関しては稔誉輝に任せるとするか。それじゃオレはこのウザイ木の根を処理するとしますかね。

side 夏流

よっす！ 俺は清水夏流、転生者でハンターだ。

傭兵、潜入、破壊工作色々やってるがメインはオカルト系の事件の調査や処理。

と言ってもオカルト事件の大半は念能力者の暴走だったりするんだがな。

今回もこの海鳴市で原因不明の事故や事件が発生しているということをお得意様であり俺の武器や道具全般を扱ってもらってる友達から連絡を受けてやってきたんだが……………

「さて、面倒なことになったもんだ」

裕平のいろんな実験に巻き込まれることはよくあることだったけどまさか解毒薬作ってない薬を飲まされるとはな……………

この場合寿命ってどうなってんだろう？

普通に考えたら元の年齢＋って計算だろうけどあいつの作る物って結構常識から外れてるもの多いからな、下手したらこの見た目の年齢（9歳）からの計算になるかもしれない……………それならまあ一から鍛え直せると考えられなくてもない……………かな？

どっちにしても子供の姿のままじゃ今までとリーチとか腕力とかに差が出ちゃうんだから戻るんなら戻らねえとな。

元に戻るなら面白半分でこんな姿にされても笑い話で済ませることができると、元の姿に戻れないとなったら非常に深刻な問題になっちまう。

アイツから海鳴市で原因不明の事件が発生してるって連絡もらったときに動物病院が被害にあったということを聞いて原作が始まったのかとしか感じなかったし、実際ほっといいてもなんとかなるだろうなとか考えてたけどさ。

「他の転生者が居るっていうからきてみれば9歳の子供だしよ」

確かにいつ転生するかなんて決まってるしそういうこともあるだろうとは思っていたけどよ。

この件が片付いたあと俺はどうしたらいいんだ………さすがに子供の姿じゃ依頼もこねえぞ。

色々と考えながら力の起点を探してみるけど、木の根の内部にも魔力が通ってるのか探索用のアーティファクトが全く役に立っていない。

（木の根がチャフみたいな役割を果たしてるって事か………こりゃ素直になのはと稔誉輝に任せたほうがよさそうだな）

情け無いという気もしないでも無いが、アーティファクトが使えなかったら探索のしようがない。

「円」の達人にもなればそれだけで自分の領域に何があるのか分かる人もいるらしいが俺の「円」じゃせいぜい気配で位置を正確に捉えるってレベルが限界だし……

一応、稔誉輝達と合流するか……

『祐平、こちら夏流。木の根が独立して魔力を出してるせいかな探索用のアーティファクトが全く使えないこの近くで合流できそうな奴を教えてくれ』

『了解了解、その近くだとデパートの方向にジンが居るな。稔誉

輝は離れすぎて今から合流しても間に合わないだろうな』

『分かったそれじゃけが人の救助をしながらジンと合流する』

デパートの方角ね………木がいっぱいだ！

道路からでは木が邪魔で普通に見ただけじゃ何も見えないので木に登って上から探そうと思って上に登ったがデパート方向にジンではなくて別のものを発見した。

というか向こうから向かってきている。

（へーかなりの高級車だな一体どんなのが乗ってるんだ？）

まあ海鳴であそこまでの高級車に乗ってるってことはさすがカリサあたりだろうな。

いや、原作に出ていない金持ちってことも考えられるか………聖祥大附属小はかなりのお嬢様学校で保護者にもそれ相応の金を要求するはずだったし。

さてとどんなツラしてるのか確かめてやるとしますかね。

足にオーラを集め一気に高級車のところまで跳ぶ、方向転換はできないがとりあえず真っ直ぐ行くだけなら十二分な速さを得ることができる。

そのままの勢いを利用して今度はオーラを右腕に集中させて木の根に俺の取っておきをぶち当てる。

「二重の極み……もどき……！」

前の大人の体だった時もそうだが、俺の今の技術だと二撃目がほんの少し間に合わないので一撃目のコンマ数秒後にオーラによる打撃を与えることで二重の極みを再現しているので「もどき」なのだ。もしオーラを使わないで「二重の極み」ができるようになったらこれは「三重の極みもどき」になると思う。

まあ未完成とはいえ結果的には同じ効果を出せるのだから問題ないだろ。

現に俺の一撃を受けた木の根は粉々になって散っていった。

まあ着地の時に目標の高級車の天井をちつとばかし凹ませちまったが命が助かったのだから安いものと……………やつっぱ弁償しねえとマズイかな。

「おい、無事か？」

「ああすまない、助かったよ」

「いやいや、俺の方こそ天井凹ませちまって悪かったなすこし着地に失敗しちまってよ」

車の中にいたのは予想通りアリサとその父親だった。

稔誉輝が言ったとおりアリサは念が使えるみたいだな非常事態を察してちゃんと「纏」をしている。

まあ欲を言うなら「堅」でいられたらほっといても死にはしないと思うが水見式も終わってないような初心者だしな、念を習って半年でこれなら充分天才のレベルだ。

俺は「纏」から「練」まで行くのに一年ぐらいかかったしな、まあ「纏」や「練」よりも「絶」の方が難しくて絶だけで半年ほど使っちまったんだけどよ……………

「俺はオカルトハンターの清水夏流だアンタたち名前は？」

「私はデビット・バニングス、こっちは娘の――」

「アリサ・バニングスよ、あんた念が使えるのね！？ この事態はどう言うことなのよ！！」

そんな俺に言われてもね、それにこれ念能力者の仕業じゃないし。

まあ原作知らなかったら同じ様な行動を取らなかったと言い切れ

無いだけに下手なことを言えない……………祐平たちが何とかしてくれるか。

「落ち着け、おれだって今日この街についたんだ。君のことは祐平から聞いている、現時点でわかっているのはこの現象が念能力者の作業じゃないってことだけだそれ以外はまだ不明」

「念じゃないってじゃあなに、自然現象だって言うの！！」

「いやいくらなんでもこの状況を自然現象と捉えられるほど鈍くねえよ、そんなことよりも避難するぞ。またいつ来るか分かったもんじゃねえんだ」

さて、避難させるにしてもここからだどの避難所が近いんだ？
……………聞いたほうが早いな。

『祐平、バニングス親子を救助した俺達のいるところから一番近い避難所を探してくれ』

『あいよ、そこから一番近い避難所はと……………海鳴臨海公園に造られてる避難所があるな』

海鳴臨海公園、地図データは……………近いけど結構木の根があるな、付いて行ったほうがいいかもしれないな。

『場所はわかったんだが結構木が出てる、一応俺も付いて行くわ』
『分かった二人にも伝えておく』

よし、それじゃ避難所に行くとするか。

「なあおっさん車はまだ動くのか？」

「ああ天井のヘコミ以外はどこも壊れてないからね」

「よし、それじゃ俺が上に乗って邪魔な木を消し飛ばしてやるから

海鳴臨海公園に向かってくれ。そこに避難所が作られてる」

「ああ分かった……………」

ん？　なんでそんなに俺を見てんだこのおっさん。

デビットのおっさんにジロジロ見られているような気がして自分の見た目を見なおしたが特におかしいところはない。

木を消し飛ばした時も特に汚れなかったし。

「おっさん俺がどうかしたか？」

「あっいや、さっきは気にならなかったんだが……………君みたいな子どもが本当にハンターなのかい？」

「……………っあ」

そういやそうだ、俺は今9歳児相当の見た目になってるんだった

……………

いやホントにorzしちみたい気分だ、いや気持ち的にはすでにorzしてるんだけどよ。

まあこのおっさんは祐平の関係者みたいだし話して問題ないだろ。

こうして俺は避難所につくまでの間バニングス親子に事情を説明するはめになった。

それと同時に何としてでも一時的にでもいいから元の姿に戻る方法を考えなければと改めて心に決めた。

.

14話（後書き）

さて、今回は少しは仁も活躍しましたね。

ちなみに補足ですが、仁はエミヤのように百発百中の命中力等持っています。

これについてはこの先説明する描写を入れるかもしれせん。

それでは皆さんまた会う日まで！

15話（前書き）

お久しぶりです。

約2ヶ月ぶりの更新となります。

何があったのかまあ細かいことはあとがきでノシ

15話

先日の大木出現及び消失事件が嘘のように穏やかな……………

「このお待ちなさいよジン!!」

「待てと言われて待つやつはいませ〜ん」

「なら待つな!!」

「許可が出たので全速で逃げるゼイ!」

え〜つと穏やか?

「いい加減にしなさい!」

「チョッそれって実銃!？」

穏やかとはちょっとかけ離れているが、周りはいつものこととアリサとジンのある種の漫才を見守っていた。

ってかアリサはどうやってあの銃を手に入れたんだか……………

ちなみに此処は長谷川祐平ことマダオの工房の第一層。 学校が終わったあとに先日のことを説明するため及びアリサたちの初めての水見式を行うということで俺様達マダオの工房に集まっていた。

「お〜い、作業台の上に置いておいた改良型のオーラガン知らないか、っておう!!」

そう言いながら部屋に入ってきたマダオの顔の横を流れ弾が飛ん

でいった。

なるほどあの銃はアンタが作ったヤツか……………なんで実弾入れてたのかは聞かないでおこう。

聞いたら厄介ごとに巻き込まれと本能が告げてるからね。

どうやら今ので実弾は弾切れらしくアリサは自分のオーラを使ってジンに攻撃をしかけていた。それにしても錬まで覚えてれば使えるって便利なもんだな……………

「あんぎゃあああああああああ！！」

あっどうやら今回もジンの負けで決着がついたらしい。

「はいはい、今日もアリサの勝ちだね。　　ってことで賭けは俺様と
すずかの勝ちだね」

「ちつくしゅー！！　　おいジンお前たまには勝ってみせろよな」

「ごめんね夏流くん」

バカめ、リターンが大きいからって大穴に賭けたりするからそんな事になるのさ。

賭けは常に状況を把握して的確に判断しないと身を滅ぼすだけなんだから。

「まったくいつもいつも、今日はこの前のこと教えてくれるっていう約束でしょなんで逃げようとするのよ」

「いや、なんかお約束はやっておかないと行けない気がする」

ちなみにこの前のこととは先日の大木出現及び消失事件のことである。

原作を知ってる俺様からすれば大木の出現はジュエルシードが原因で消失はなのはがジュエルシードを封印したからと分かりきって

いるけど、原作を知らないアリサとすずか、それとジンは最初にあるを見たときは念能力を疑った。

ジンはすぐに木の根に人為的なオーラが干渉している様子がないと言ったことを見切りすぐにアリサたちの救出に向かったけど、今日水見式をやる予定の二人はそんな事はさっぱりわからなかった。

アリサだって俺が説明するまで確実に念能力者のせいだと考えてたしね。

「さて、それじゃジンとマダオが来たことだし授業を開始するのでしょうか」

授業と言ってもさっきも言った事件の説明とアリサとすずかの「発」の修行に入るというだけだけど。

まあアリサがまた爆発してもたまったもんじゃないし、とりあえず事件の方から説明しようかな。

俺様はリモコンを操作して壁に収納されているモニターを出して電源を入れる。

流れる映像はもちろん先日的事件でマダオがモニターしていたときに録画していた映像だ。

「さて、もうすでにこれが念能力者の仕業じゃないと言うことは話したけど、仮にこれが念能力者の仕業だとしたら何系の念能力者の仕業だと思う？」

最初から答えを教えてもいいけどされじゃ何時まで経っても成長しないからねなのは利用するようで悪いけど二人の成長のためにちょっとこの前に事件を使わせてもらおうとしよう。

しばらく考えていたすずかが遠慮気味に手を上げた。

「はい、それじゃすずか」

「えっと木の成長を操作してたから操作系じゃないかなって思ったんだけど……………」

「うん、考え方としては間違ってるよ。アリサはどう思う？」

「私もすずかと同じだったんだけどもう一つ強化系でも同じようなことってできない？」

ほう、強化系ね……………なんでそう思ったのか非常に興味深いね。同じような疑問を持ったのか俺様がアリサに聞く前にマダオがすでに質問していた。

「だって強化系って物の持つ働きを強化するんでしょう。木の成長だって木が持っている働きの一つなんだからそれを強化すれば同じようなことができるんじゃないかなって思ったのよ」

なるほどね、確かにできなくないだろうね。
だけどそれだけじゃ少し足りない。

「まあ二人共50点かな」

「えっ？」

「なんでよ!!」

「仮に念能力者だとして操作系か強化系って予想はおそらく正しい、けど能力の系統的には強化系と操作系の複合能力……………能力者が離れたところから操作していたら放出系も必要になる」

まあそういった能力の特質系だったりするとさっきまでの予想はあまり意味ないものになるんだけどね。

特質以外だとしたらあれは強、放、操の三系統をバランスよく習得している必要がある。

「さて、此処で問題。ジンや夏流が木の根を吹き飛ばしたあと木

の根はすぐに襲ってきたでしようか？」

「ううん、襲ってこなかったわ」

「うん私達が移動してからまた木の根っこが出てきたけど」

「それじゃまれも踏まえてあれが能力とした場合、その能力はマニュアル操作とオート操作のどちらでしようか」

「「マニュアル！」」

早！！

「なんでそう思ったんだ？」

「だってオート操作だったらすぐにでも私達を襲ってこなきゃおかしいじゃない」

「そうだよね、それにさっき能力者が離れたところからつても言っていたからそれなら壊れたことしか認識できないとか制限があるんじゃないかなって」

俺様ほどではないけど二人もれっきとした天才だったってこと忘れてた……………

「それでどっちなのよ」

「わからない」

「はあ？」

「だから俺様たちにもわからないからどっちかなんて答えようがないねグフッ！！」

ナイスブロー……………でもアリサ最近暴力に頼り過ぎでは……………もちろんこの後俺様達はアリサとすずかにこつてりラーメンのごとく怒られた。

魔法の産物を念能力に置き換えようとしたのが間違いだったのか
もしれない……………

俺様達は話の流れを変えることも含めてさっさと水見式に入ってしまうおうとマダオに準備をしてもらった。

side 仁

祐平さんが水見式用のグラスと葉と水を持ってきて、水見式の準備をしている間にオレ達はアリサたちにもう一度オーラの系統について説明することにした。

「さて、今日からやってもらうのは「発」の修行でこれをマスターすれば念の基礎は終了だ。あとは基本を磨いてそれぞれが独自の能力を作ればいい」

「それで、「発」って言うのはオーラをどうするのよ。あのコップ使うんでしょ？」

まああれだけ堂々と準備してたらわからない方がおかしいんだけどさ。

確かに修行にはあれ使うけど発ってのは……………そういや発って練と何が違うんだろ……………

「まあとりあえず聞け「発」ってのは念能力の集大成、オーラを自在に操る技術のことだな。オーラはそれぞれ強化系、放出系、変化系、操作系、具現化系、特質系の六つに大別されるってことは前に話したな」

「ええオーラに系統があるって話は効いたわ」

「そう、念ってのは基本だけだったらどの系統でも差は殆ど無いから系統を気にする必要はそんなにない。でも独自の能力つまりは「発」を創りだそうとしたら自分の系統を知っているといけないでは大きく違う」

俺は系統を示す六性図をモニターに映しだして説明を続ける。

「念能力ってのはそいつの個性と深くつながってる。生まれ持った才能、生活の中で培われ磨かれた才能。これからおまえらがどんな能力を作るのかは知らないけどそれが自分の系統から離れていたら覚えるのにかなり苦勞する」

「それでその相性を調べるの？」

「そう、それが水見式。ちなみに「発」の修行にもこいつを使うんだ、夏流試しにやって見せてくれ。」

「おう、分かった」

夏流の系統を知るちょうどいい機会だし夏流にやらせることにする。

水を表面張力ギリギリまで満たしたグラスに葉を一枚浮かばせて手を近づけて「練」を行う。

一般的な水見式のやり方っていうか俺たちこれしか知らないけど。夏流が「練」を行うと水がせり上がり、すごい勢いで増えグラスから溢れ出してきた。

「水が増えるのは強化系の証、夏流は強化系ってことだな」

「それじゃやってみろよ」

「うん！　すずかジャンケンで順番決めましょう」

「うん、いいよ」

ジャンケンの結果アリサが先となった。

夏流は強化系だったからグラスを変える必要もなくそのまま使いまわすことにした。

「それじゃいくわよ……………」

緊張しているのかアリサがグラスに手を近づけ「練」を行うとグラスの水がかすかに変わり水が若干赤くなった。

「アリサは放出系だな、オーラを飛ばしたりするのが得なタイプ」

「……………なあ夏流これって何色だ？」

「赤にしちゃ薄いな緋色か？ まあ修行していけばわかるだろ」

祐平さんがアリサの系統を放出系と断定してたけどオレと夏流はアリサが水見式のをやったグラスを見て何色に変わってるのかを話していた。

まあ系統が分かったんだからいいか。

オレたちが話している間に祐平さんと稔誉輝は新しいグラスを用意してすずかに水見式をやるように促していた。

すずかが若干力みながら「練」を行うと葉が動き出した。

「葉が動くのは操作系の――」

「待て祐平、よく見てみる」

夏流がそう言うのと祐平さんは発を続けているすずかの水見式をもう一度見る、オレも同じように目を凝らしてみても葉が動いている以外の変化は見られない。

「何か変か？」

「ああ、すずかもういいよ」

「うん」

「それですずかは操作系なの？」

「違う……………と思う」

思っつてなんだよ。

実際水見式で葉が動いたんだから操作系だろ。

他の変化なんて――

「あっなるほどね」

「稔誉輝何か分かったのか？」

「水見式に使った葉っぱとこの葉っぱ見比べてみなよ」

そう言われて水見式に使った葉っぱと稔誉輝が取り出した葉っぱを見比べると水見式に使った葉っぱのほうが若干色が薄い気がする。

「もしかして葉っぱの色素か？」

「うん、その可能性はあるね。　すずか悪いけどもう一度、今度はこの葉っぱで水見式をやってももらえないかな」

そう言ってみんなに葉っぱの色を覚えさせて写真にも収めてもう一度すずかに水見式をやってもらうと、先ほどと同じように葉っぱが動き出した。

しばらくしてから葉っぱを取り色を見比べると若干薄くなってるように感じる。

写真と見比べてるとそれがハッキリ分かった。

「葉が動く以外に葉の色素が抜けてるな」

「これって特質系か？」

「どっちかっていうと操作系だったのが後天的に特質系になったっ
て言う方が納得行くな」

HUNTER×HUNTERの原作でもクラピカは最初は具現化系の変化だけだったけど緋の目の状態の時は全部の系統の変化が起こつたらしいしな。

おそらくずかの元々の系統は操作系だったのだろう、それが何かの影響で後天的に特質系に目覚めてこうなったと考えられる。

そのことをずか達に説明すると結局ずかの系統はどっちなんだと聞かれた。

「ずかの系統は特質系だ。ただし特質系が一時的なものなのか永続的なものかはわからないから操作系に限りなく近い特質系か、特質系に限りなく近い操作系って感じだろうな」

「特質系って確かかなり珍しいのよね？」

「ああたいていは血統だったり特殊な環境で育ったりが作用する個性的な能力だからな、念の系統で言えばめっちゃくちゃレアだ」

「いいなゝずか」

「えっとアリサちゃんそう言われても」

まあ特質系ってチートな能力も結構多いしな、かならず当たる占いとか、記憶を読み取るとか、相手の念を盗むとか、全系統を100%の精度で使えるとか……………

チート臭い能力ばかりだな。

「ちなみに俺も特質系」

「えっ……………」

「げえ……………」

「何……………そのひどい反応」

二人共正直だな、祐平さんのが特質系ってことでアリサなんて「げえ」って……………

まあ念の師匠と言っても普段が超マッドだからな、自業自得か。
あれでも基礎能力だけで旅団員相手にできそうなほど強いんだけど、半ば引きこもりだからな……………

「まあ変態と系統が一緒なのは残念だけど特質系ってのは能力作るのも結構難しいんだ」

「そうなの？」

「ああ特質系ってのは他に類を見ないオーラの総称でもあるからなじつくり考えればいいよ。それにすずかは元が操作系みたいだしそれをベースに考えるのもいいかもしれないな」

稔誉輝が特質系の能力を作る上での難しさをすずかにはなすとアリサがオレに本当かどうか確認の意味も込めて聞いてきたからアドバイスも兼ねて答えてやった。

けど、原作で系統別修行ってあったけどあれって特質系はどうするんだろ……………強化系の系統別修行を見ると特質系を抜いてるしな。

逆に特質系の系統別修行で強化系を抜くってことはあるはず無いし、まあそこら辺はおいおい考えていくしかないな。

「それじゃこれから一ヶ月はこれで「発」の修行をするから第四層に行くとするか」

第四層とはクリエイターズ内部の階層の一つのことだ一層から六十四層までの全六十四階層ある。

ちなみに今オレ達がいる此処は外部と同じ時間の流れの第一層、ここから一層ごとに外部の10倍の時間の流れになるので最深部の十一層では外部との時間の流れは100倍にもなる。通常オレたちが修行で使うのは60倍までのだい七層まででこれでも2ヶ月が一日で終る計算となっている。

ちなみにクリエイターズの企画・開発部門系は第九層にあり、その奥の第十層から六十四層にはその中に『永遠の開発者達《クリエイターズ》』の開発者たちが作った外部時間と内部時間をずらす倉庫を置いてその中にウランやプルトニウムを入れて半減期を短縮しているらしくオレ達は立ち入り禁止区域とされている。

もっとも自分から放射線物資に近づきたくなか無いが………オレや稔誉輝がモノを作るために使うのは基本的に第五層から第六層だ、素材が必要になれば各階層のことにあるフィールドとか………もはやひとつの世界なのだがそこに行って素材を探したりもするが何千年何億年とたって独自の進化を遂げているあのエリアには行きたくない。

「けど改めて考えるとチート臭い能力よねこれ」

「便利なんだけどズルしてるみたいな気がするよね」

「まあすでに別世界だからな………」

これほどの能力を契約者が必要とはいえ個人が使ってるってのが実に驚きだ。

「なあクリエイターズってどれぐらいオーラ持ってるんだ？」

「ん？ オーラなんて扉開くときと許可証作るとき以外に消費なんてしないぞ（継承時にオーラ総量が激減するがな）」

「「「「………はっあ!？」」「」「」」

何そのチート。

ひとつの世界を構築してのになんでオーラを消費してないんだよ。

「前にも言ったと思うけど正確には『永遠の開発者達《クリエイターズ》』はオレの能力じゃなくてこの中に取り込まれた人たちの念なんだよ。だからオレにできるのは開発者たちへの製作命令と扉を

開けること、それに開錠許可証を作ることだけ」

「その開錠許可証ってこのバンクル（腕輪）のことだろ？ 扉開けるのはお前なのにこれって意味あんの？」

確かに、夏流の疑問はもつともな話である俺たち全員に開錠許可という名前のルーンが刻まれた銀製のバンクルが渡されているけど鍵が開けられてもオレ達に転移系の能力が無いのだからハッキリ言っ
て意味が無い気がする。

もらったときは説明すらされずこれ持っていればいつでも入れるからとだけしか言われなかったからな……………

「あれ？ 俺説明してなかったけ？」

「してないわよ！」

「あゝだから皆ワザワザ俺に扉開かせてたのか……………スマンスマンぐぼあ！」

笑ってごまかそうとしたらしいがそんな事をしてもしもアリサと稔誉輝は止まらない。

祐平さんはアリサと稔誉輝にお仕置きという名のリンチをた。

自業自得なので誰も止めに入らなかった。さすがのすずかも呆れたのか祐平さんがいくらボコられても止めに入らなかった。

「……………ゴメンなさい」

顔をお化けみたいに腫らしたままオレ達に開錠許可証の説明をする姿は結構不気味だった。

説明によるとこの開錠許可証（長いのでキーと呼ぶ）は壁や床、天井等に鍵を開けるイメージで何らかのアクションをすると扉を作り出すらしい。

つまり、転移系のアイテムではなく扉を作るタイプのモノらしく

試しにやって見せてもらおうとごく一般的な魔法陣が壁に浮かび上がった、これが扉になるらしく通り抜けることができるらしい。

これを見た瞬間に某青いネコ型ロボットの「通り抜け〇ープ」が頭に浮かんだのはオレだけではなかったようだが、要は扉をイメージしないという意味が無いらしい。

ただし、この世界が別位相の別次元、別世界にあることを利用して此処を経由していろいろな世界に言ったりすることもできるらしいけど一つの許可証でつなげることができると世界は一世界だけなので移動するためにはもう一人別世界にいる許可証を持った人に扉をあけてもらう必要があるという制限もある。

「どっちにしてもチート臭い能力だよな」

「まあ色々と不便な点もあるけどそれに目をつむればな……………」

そういえばこれって定期的に死者の念を蓄えるって言ってたけどどっから拾ってきてんだろ？

昔ならいざしらず今、創りたいものを作れずに死んで霊になるヤツらなんてほとんどいない気がするけど……………

まあ聞かれたくないこともあるか……………

オレと稔誉輝はアリサたちが四層で「発」の修行をしている間にアリサたちのmPhoneと先日、夏流が言い出したことの実験を行う為に第六層に向かった。

.

15話（後書き）

長く待たせた上にこんな駄文で申し訳ありません。

研究室の仕事や就職活動などで全く更新することができませんでした。

恐らくこの状況は研究室が安定するか就職が決まるまで続く可能性があります。

一応ストックはあと3話ほど残っていますが……………

感想のほうで希望が多ければさっさとストックの3話は載せてしまいます。

多分研究室が落ち着くよりも就職のほうが先に決まると思いますが、自慢ではありませんが作者はバカです。

単位だってギリギイ取得している状態なので成績も下から数えたほうが早いのです。

大学院に行けるかすら危ういのです。

ということ……………来年までこんなドン亀更新が続くと思います。

どうか、どうか見捨てないで！

また会う日まで！（・ω・）ノシ

16話（前書き）

みなさんお久しぶりです！

12月から約1ヶ月半ぶりといったところでしょいか？

まあいつも通り何があったのかは何が忙しかったのかは後書きに書かせていただきます！

では本編へどうぞ！

16話

さて、話は少し前まで遡る。

その日、彼は自分にとってもこの世界でも名作であるとされているとある漫画本を呼んでいた。

少年たちに大人気の願いを叶えてくれる龍を呼び出すための七つの球を集め、その為に戦い強くなっていくとある名作だ。

この作品の中で主人公がある武術大会に出たあたりで出てきて最後の方にはほとんどの登場人物が使用できるようになっていた舞空術という技術が存在する。

実はこの技術おはなしの後半では使うことができない人物に主役格が教えるシーンが存在し、その時その主役格はこう言っている「体内の気をコントロールするだけだからそれほど難しくないと。」

ただの少年だったらまあ漫画の世界だからと納得したかもしれないが彼はいろんな意味で普通とは違っていた。

「気ってオーラと同じなんじゃねえか？ となると舞空術の理論って……………」

彼、清水夏流は一度別世界で死んでからこの世界に生まれ変わった。

俗に言う転生というヤツだ、それだけだったら二次創作にもよくありがちな設定だし驚くべきことではあるがまあ人生の続きを味わうようなもので納得できたかもしれない。

しかし、最近はそれだけでなく20代後半からいきなり9歳時に幼児化してしまうという事故………とか人為的な厄介事だが。いろいろあって9歳児になっている彼だが、愚痴っても仕方が無いので元に戻るまでの間（戻ることができない可能性のほうがつつと高いが）今まで仕事が忙しくて読めないでいた漫画や取り溜めしていたアニメやドラマ、映画などを消化しきってしまったおうと考えてつい先ほどまで徹夜で漫画を読んでいた。

「これってもしかしてオーラでも基礎がしっかりと出来てれば出来るんじゃないか？」

ついでに普通とはちょっと違う彼はその漫画の技術を再現できるかもしれない力を持っていた。

前世の頃から思い立ったら吉日の彼はすぐに電話を取り出して、同じ力を持って同じ境遇の仲間に連絡を入れることにした。

「あっもしもし、じつは――」

side 夏流

アリサとすずかが第四層に入って行ったあと、俺達は第六層まで行って修行をすることにした。

先日読んだ漫画の中に念の基礎とほんの少しの応用で再現できる

かもしれない技術があったからタメそうと思ったただけだったんだが、稔譽輝とジンが技術として確立できるならしつかりと技術を確立させてアリサやすずかの修行に盛り込んだほうがいいと言いついて本格的に新技術を作る準備を整えてからということになった。

それで本日ようやく祐平に計測機器や記録装置などを借りることができたというわけだ。

本音を言っちゃまうと半ば冗談で言っていたところがあるからそこまで準備をされても出来なかった時に申し訳が立たないんだが……

（今更言ったって止めるとも思えないし、出来るまでとことんやるとするか）

幸いにも今回使える第六層は外部との時間差が50倍、つまり外の1日が此処では50日となる。

50日もあれば完璧とは行かなくてもほんの少しぐらいはできるようになるかもしれない。

「それにしても、いきなり舞空術って念で再現できないかって電話してきたときはビックリしたよ」

「ホントに、この世界にもあったってのにも驚いたけどまさかそんな事を言ってくるとはね。さすがの俺様も気がつかなかったよオーラも気も生命エネルギーってことでは同じだったこと」

「まあ作品が違うから俺も漫画読み返してなかったら思いつかなかったと思うぜ」

あの世界ではこっちの世界と違って強さのインフレがシャレになつてなかったしな。

最後のほうなんて主人公の初期のライバルなんて見る影もない状況だったし地球人では最強だった兄弟弟子も主人公たちには置いて

いかれてたし。

「さて、時間も限られてんだしとっと始めようぜ」

「分かってるって、ちょっと機材の準備してくるからブザー鳴らしたら始めてくれ、オーラを使い切ったら交代だ」

今回は観測、実行、補助の三役に分担してそれぞれローテーションで実験をやることになってる。

まず実行ってのはそのまんま舞空術を使う役割だ。

言葉で言うのは簡単だが、新しい技術を作るのだから自分たちで一から作る以上最初のきっかけをこの実行者が見つけない限り実験は先に進まない、そういった意味では結構責任がある。

次に観測は祐平に借りた機材などを使って実行者のオーラの流れから周りの空間のオーラなどを観測して舞空術を感覚的ではなく理論的に解析することで今この場にいる俺達以外にも教えやすいようにするなどの目的がある。

最後に補助、これは実は一番重要になる。

実行者がオーラ制御に失敗してあらぬ方向に飛んでいったり暴走したりした場合に体を張ってそれを止めなければならぬ、実力もそれなりに必要とされ実行者の命をあずかっていると云っても過言ではない。

最初は俺が実行者、ジンが観測者、稔誉輝が補助役となっている。俺と稔誉輝が配置についてしばらくしてから準備を終わらせたジンがブザーを鳴らして合図をしてきた。

大きく深呼吸をしてオーラを気持ちいを落ち着かせる。

舞空術は体内の気のコントロールと漫画には書いてあった、これを俺達風に言うと「オーラを操作する」の一言に尽きる。

問題のどうやって操作するか。

これは発まで念を修めていればそんなに難しいことじゃない。

念の基礎は「纏」「絶」「練」「発」の四種類、これらを応用し

た技はいくつかあるが舞空術はこの応用と同じだ。

基礎を使って新しいものを作り出せばいい。

一瞬でも体を浮かせるということに限定すれば放出系の系統別修行の最後辺りで似たようなことをやる。

だけどそれではダメだ、あれはジャンプと大差がない。

（体を浮かせるって事はイメージ的には常にオーラを地面に向けて噴射するイメージがいいか……………）

どのようなイメージにするのかを決めたら迷いなく体内のオーラを練りあげていく。

練り上げた大量のオーラをさらに大きく練り上げる。

自分を飛ばせるだけの大量のオーラを練り上げ、それを一気に開放する。

ドウツ！！

という豪快な音と共に俺は浮かび上がった。

「おおー！！！」

「よっしゃあ！！ 俺飛んでるぜ！」

「あっ……………」

ゴォーン！

飛び上がるということに関しては成功したんだが天井があるというのを忘れていたため天井に見事な頭突きをしてしまった俺はオーラの制御ができなくなり落下しているところを稔誉輝が拾ってくれた。

「すまん……」

「いや気にしないでいいよ俺様も天井があるって確認するの忘れてたからね」

『オーイ、無事かー？』

「なんとかな」

俺に意識があることを確認してから一度検査をすることになった。打ち付けた場所が頭だったってこともあってどうしても慎重にある。

稔誉輝が俺の検査をしている間、ジンはさっきの俺のやり方のどこが良くてどこが悪かったのかを調べている。

俺個人としてはオーラの練り方はよかったと思うがおそらくロケット噴射みたいにいきなり噴射したのが悪かったんじゃないかと思う。

検査の結果特に以上は見られず先程の反省会となった。

「この時夏流は練り上げたオーラを地面に向けて一気に打ち出してる。これは放出系の系統別修行「浮き手」の応用だろ？」

「ああ、オーラで浮かぶとか飛ぶとか考えたときこれが一番最初に浮かんだのがそれだったからな」

実際に飛び上がることはできたんだ、あとは出力を同調整するかの問題だと思う。

「けど、これってかなりオーラを消耗するって分かってるか？」

「うっ……」

確かに、折れの今のオーラはほとんどスッカラカンの状態だ。

「たった一回でスタミナ切起こしてたら使えないだろ」

「確かに、けど浮かび上がるって着眼点はよかったんじゃないかい？」

「まあな、けどオーラのみで浮かび上がるには微弱に放出し続けるだけじゃ足りないんだ」

んじゃどうしろって言うんだよ。

「んじゃそれがにどうしろって言うんだよ」

「うーん……何らかの方法で重力を制御できれば少ないオーラで浮かび上がることは出来るんだけど」

「いやいや難易度上がってるよ」

重力制御なんてよ操作系を極めたヤツでも使えるかどうか分かったもんじゃないぞ。

その後も何度かローテーションを繰り返してみたが一向にできる気配がなかった。

何度やっても必要なオーラ量が多すぎたり制御が難しすぎたりとうまく行かない。

漫画では「体内の気をコントロールするだけ」と簡単に言っていたがシャレにならないほどに難しい。

やっぱり、気と念では仕様が違うってことなのかね……………

side 仁

夏流が舞空術を念でできないかと言い出し、オレと稔誉輝がやってみようと言って三人で開発を初めてすでに20日が経過している。残り時間はあと30日前後、感覚でやり続けるには限界だと感じたオレは一度今までのデータを初めから見直していた。

浮かび上がろうとオーラを噴出する瞬間普段は体内を巡っているオーラが一気に外に出て周りのオーラを吹き飛ばしている。

（オーラを噴出して浮かび上がる方法は燃費が悪すぎて実践じゃとても使えない……）

行ってしまうばペットボトルロケットに近い、オーラという水を精神という空気で練りあげて一気に噴出することで水が尽きるまで飛んでいくが水が切れれば落ちてくる。

何度観直しても殆ど差なんて無いしな……………

「やっぱり無理だったのかな……念で空を飛ばうなんて」

出来るんなら他の奴が試していても不思議じゃないしな……

HUNTERX HUNTERの原作でも飛んでる奴なんて……いた、ゼノじいさんがオーラの龍に乗ってた。

けどあれ舞空術とは違うし、他に空飛んでるところって言ったら

グリードアイランドの移動系スペルは空飛んでるな。

しかもあれ放出系のスペルはレイザーが担当してたよな……ちょっと待てだとしたら移動に使うあれだけのオーラはどこから持ってきてるんだ？

グリードアイランド内限定って誓約はない、あったらゴンがカイトの所に行くことだってできなかったはずだ。

（ってことはあれってそんなにオーラを使ってない？）

そう思ったオレは今までのオーラの流れを再確認しようとしてふと気が付いた。

あの漫画では「体内の気をコントロールするだけだからそれほど難しくない」と言っている。

「体内」の気をコントロールするだけだからそれほど難しくない」と言っている。

……………チョットマッテミヨウカ

（確かオレ達が今までやってたのって）

オーラを噴出することで推進力にすることでロケットのように飛ぶ方法、細かい違いはあっても基本的にそういったやり方だ。

これは体内のオーラを外部に放出するという理論だけど冷静に考えてみると体内だけでオーラをコントロールしてるわけではない。

今見てる観測用モニターだって体の周りのオーラの流れを調べるための機器な訳で……………

もしかしたらオレ達はかなり時間を無駄にしていたのではないだろうか？

観測用モニターの設定をいじって体の周りのオーラではなくレントゲンのように体内のオーラの流れを見れるようにすると血のように巡りながらも下方向に早く上の方方向に遅くオーラが動いて重力

の影響を受けている感じがする。

つまりはこのオーラを上方向に勢いを付けて下方向の勢いを殺せば理論的には重力下と逆の状態になるんだから無重力状態ぐらいには出来るかもしれない。

そう思ってた時期がオレにもありました……………

浮かぶんですよ、やり方は間違ってたんです。

稔誉輝も夏流も浮かぶことまで出来るようになったしオーラの消費量は推進力を出すための僅かなオーラだけなので纏と大差ないから実践でも使えるんですけど、致命的に慣れが必要ということがわかりました。

舞空術に集中してようやく10?程度浮けるんです、自転車や車の運転と同じである程度のセンスが必要だけど恐らく慣れれば問題ないはず。

だけど慣れるまでがきつい……………前世で自転車に乗る練習をしていた時の気持ちを思い出しましたよ。

補助輪なしでいきなりやってるような物だからキツイキツイ、ちなみに今のオレ達の浮くことができる高さはオレが20?、稔誉輝が15?、夏流が10?とオーラコントロールの実力順にハッキリと別れた。

逆に浮いている持続時間はオレが30分、稔誉輝が4時間、夏流が5時間とこっちはオーラ総量の差が出た、いくら効率よくオーラを運用しても元から反則気味のオーラ総量を持つヤツにそう簡単に勝てるはずがない。

まあこの舞空術用の纏だつて慣れればかなりオーラ消費量を抑えることができるはずだ。

残された時間、オレ達は何度も舞空術の練習を繰り返した、それが良かったのかはわからないけど最終日にはオレ達三人ともしっかりと空を飛べるように、舞空術が使えるようになっていた。

まあ三人ともオーラ使いすぎて一層目に戻ってきてすぐ寝ちまつたけど……………

目が覚めた時、オレ達は自分の家の自分の寢床で目が覚めた。

あとから話を聞いたところ、眠っていたオレ達を祐平さんがそれぞれの家に送り届けたらしい。

夏流は祐平さんの研究所に住んでるからあまり関係の無い話だが。オレたちが舞空術を完成させたことでアリサとすずかの修行にこれが追加されることになったらしい。

ただし、アリサ達はまだ「発」の修行を終えていない。

ある程度まで行ってから変化が進まなくなっている、簡単にいえるはスランプの状態だったらしく30日のうち「発」の修行に使えた

のは20日程度だったと言っていた。

「んで、なんでオレの部屋に来るのかね？」

「仕方ないじゃない稔誉輝はなのはそのところだし、夏流は出かけてるんだもの」

だからといってオレの部屋に来る必要があるのか？

「それでアリサが聞きたいのは「発」のコツとか？」

「ええそうよ」

「つつてもなく」

オレも半ば感覚だけで「発」はクリアしちゃったからな……………

「オレに言えることはイメージすることってぐらいだぜ」

「そういえばあんたって何系なの？」

「具現化系」

サラリと嘘の情報を教える。

念能力者が自分の系統をあっさり教えるとは思っちゃいけないよ

「稔誉輝はアンタのこと変化系って言ってたわよ」

「……………それは嘘だ」

稔誉輝のやろう……………なにかってに人の系統バラしてくれちゃってんだよ。

オレの戦い方で系統を知られてるってのがどれだけアドバンテージを失うか分かってるはずだったのに……

「アリサ、そのグラスと水は何に使うのかな？」

「あんたが本当に具現化系なら水見式をすればわかるじゃない」
「……………」

イヤ、だから系統がバレるのが問題なわけでした。
仕方ない、めんどくさいけど説明するか。

「アリサ、戦いにおいて自分の能力が知られているっていうのがどれだけ不利かそれはよくわかるだろ？」

「当たり前じゃない、そうじゃなかったら情報を制するものが世界を制すなんて言葉出てこないわよ」

「そう、オレの場合は能力だけじゃなくて系統がバレただけでかなりのアドバンテージを失うことになるんだ。だからオレは具現化系なんだよ、分かるだろアリサ」

「……………分かったわよ、それじゃ私の発の練習に付き合っ
てよ」

「それぐらいならお安い御用だ」

そう言っただけでアリサに発を見せてもらおうとグラスの中の水は半透明な緋色に変わった。

なかなかの早さだし色も前よりこくなってる。

「何だ十分上達してるじゃないか」

「けどこれ以上うまくいかないのよ、すずかはもうほとんど葉っぱの色素を抜けるっていうのに私はここで止まってるの」

まあハッキリ言っただけの方が才能もセンスもあるし。

けどこれハッキリ言ったら怒られそうだな

「なあ基本的なこと聞くけど発やってる時何をイメージしてる？」
「それは当然、色が付きますようにって」

「その時さ明確に色をイメージしてるか？ 緋色になれ……みたい
に」

「……………水見式にイメージって必要なの？」

スランプの原因判明。

水見式だって念なんだから根底は生命エネルギーを思念……つまりはイメージで操ることなんだからイメージがより鮮明なほど効果がある。

それ以外にも細かいアドバイスをしてからもう一度水見式をやらせてみると、今度は絵の具で染めたかのようにしっかりとした緋色に変化した。

「よし、これだけ出来れば十分。 また今度裕平さんに見せてみな、
きつと合格できる」

次の日、アリサとすずかは「発」の修行を終えて念の基礎を修めた。

.

16話（後書き）

さて、感想でも言われていますが話がすすむたびに誰が主人公なのかわからなくなってきました。

一応主人公はジンなのですが……

書いてる本人もたまに誰が主人公かわからなくなってしまいうんでジン達3人を主人公としておきます。

それはともかくとして、ようやく舞空術のところまでうp出来ました。

いや、色々突っ込みどころがあると思いますがStSならともかく無印から干渉させようとすると空飛べないとお話にならないパターンが非常に多いんでちょっと無理やりやってみました。

実はこの話は10月にはもうできてたんですけどね、ストックはあと3話文しかないのでそれまでには内定が欲しいな

はい、そうです。

更新が遅い原因はネタが思いつかないということもありますが主に就職活動がうまくいっていないというのが原因です。

毎度毎度、説明会セミナーの予約には出遅れ、先日ようやく行くことができたとある企業の説明会では一次選考が自分の誕生日と重なるという事態に。

ちなみに未だに履歴書に書くアピール内容などがうまく定まらず四苦八苦している状況です。

うまいこと3月中に1つでも内定を貰えれば少しは気が楽になれるんですけどそれまではこんなペースの更新が続くと思います。

どうか！

どうか見捨てないでください！

とても長い目で見てやってください！
ではみなさん、これからもよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4173n/>

何の因果か気まぐれか

2011年2月3日18時24分発行